
紅蓮の影（あかのかけ）

井浦美朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蓮の影

あかのかげ

【Nコード】

N0610B

【作者名】

井浦美朗

【あらすじ】

私立の名門高校に時期外れの転校生がやってきた。彼女の名前は遠野二葉^{とみのふたば}。誰とも口を利かず、人形のように表情を変えない彼女には、暗い過去と重い使命が課せられていた。そんな二葉の陰の一端を見てしまったクラス委員の保科由樹^{ほしなゆき}は、同情から二葉に近づく。しかしそれは、由樹の命に関わる危険な行為だった。

第1部：謎の転校生（前書き）

この物語はフィクションです。実在する個人、団体名等とは一切関係ありません。

第1部：謎の転校生

この時期の転校生はめずらしい。

年が明けて間もない三学期の始業式に現れたのはフランスからの帰国子女という、長い黒髪の少女だった。

全校生徒を立たせたまま小一時間は話をする校長の後で紹介されても、皆の意識はすでに飛んでいる。クラス委員の保科由樹ほしなゆきでさえ、例外ではなかった。サッカーの朝連で強張ってる筋肉で立っているのだから、早く終わることしか頭にはない。

（二年生の三学期なんて、どうせ理事長のコネかなんかだろ。今までもそうだった。）

名門進学校である私立翔架学園は、二年生の二学期に高校課程の学習を終了している。あとの一年は受験対策に費やすのだ。だから、今転校してきても、そう容易くついてこられるわけがない。

壇上の少女の顔は、最後尾から認識できるわけもなく、ただ腰までのびた髪と二年生の証である胸元の青いサテンのリボンだけを確認したにすぎなかった。

始業式が終わると、生徒たちは一斉に体育館から教室へ向かいだした。学級委員は先に教室に着き、電子ロックを専用カードで解除しなければならず、由樹も足早にカーペット敷きの廊下を進んでいく。と、それを軽やかに追い抜かすスカートの襷が目の脇をかすめた。

同じクラスの女子学級委員の英涼子いひりょうこだ。

涼子は由樹の方を見ながら、後ろ向きに歩きだした。

「ねえ、さっきの転校生、私たちのクラスに来るのよ。」

由樹の足が、一瞬止まった。

「俺は、聞いてない。」

「朝、担任からよろしく頼むって言われたの。女は女同士ってことでしょ。」

「・・・。」

「興味、ないの？」

「ないよ。どうせコネのお嬢様だろ。」

教室に着き、セキユリティをカードと暗号で解除する。「信頼」
されている生徒だけに許される特権だが、由樹にしてみれば雑用が
一つ増えたに過ぎない。なのに、それを誇らしげにする輩もいるか
らわからない。

「あのね、ちょっと耳貸して。」

教室に入ると、涼子は辺りを素早く確認して由樹に耳打ちした。

「彼女、ピアスしてるけど、宗教上の理由だからはずせないらしい
から。」

由樹は、涼子の黒目がちのアーモンド・アイを覗き込んだ。

「はずせないって？今までは例外なく校則違反にしていただろう？」

「うん。でも、彼女のピアスは耳たぶに埋め込まれていて物理的に
もはずせないみたい。ただ、他の生徒の手前、髪で絶対に隠すって
でも、もしものときはフオローして。」

「フオローって？」

「何か起こっても、保科君がちょっと睨めばみんな口を噤むってこ
と。」

涼子はいたずらっぽく笑って小さく舌を出して見せた。

（何だよ。また、やっかいな・・・。）

平穏な規律を乱されたくない。帰国子女なんて肩書きは眉唾物だ。
おおかた、前の学校で何か問題があつて転校せざるを得なくなつた
に違いない。

やがて、教室に担任が現れ、続いて例の少女が入ってきた。

「起立！」

一瞬のざわめきを打ち消すように、由樹は声を張り上げた。

「礼！」

担任は黒縁の眼鏡ごしに全員が着席をしたのを見届け、少女を前
に立たせた。

「始業式で紹介があつたが、改めて。遠野二葉さんだ。」

近くで見ても、さして印象には残らない顔立ちだ。美人とはいえないが、品はある。色白だから青いチエックのひだスカートトリボンが似合う。頬のあたりの髪は首にかかるときにカットされている。さながら昔の姫君風とでもいうのか。確かに、耳はまったく見えない。

二葉は伏せ目がちに軽く頭を下げた。席に案内され、隣の涼子が「よろしくね。」と声をかけたが、ほんの少し首を傾けたただけで、言葉はなかった。無礼なのか、初めての場所で緊張しているのか。

一通りの事務連絡が終わると、さつそく年明けの実力テストが行われる。由樹は、これが怪しげな転校生を試す良い機会だと思つた。明日の朝にはトップ五十が発表される。見物だ。

九十分間の数学を、時間が足りないと思うか、もてあますか。机四つ分右斜め前の二葉の表情は髪に隠れて見えない。だが、前かがみの加減が真剣に取り組んでいることを示している。完全に私立文系を決め込んでいる生徒はすでにシャープペンが手の中で暇をもてあましている。

(とりあえずは、それなりってことか。)
その日の帰り。

涼子は、鞆にペンをしまふ二葉の様子を伺いながら、遠慮がちに声をかけた。

「遠野さん、お家どこ？よかつたら、一緒に帰らない？」

だが、二葉は涼子をチラリともせず、だまつて脇をすりぬけていった。まだ大勢クラスメイトが見守る中、優等生の涼子の立場はない。その困惑を察した由樹の体は、思うより先に動いていた。

「ちよつと待てよ。」

腕をつかんだ瞬間、振り向いた二葉の長い黒髪が由樹の手の甲をかすめた。

「口が利けるなら、返事ぐらいしろよ。無視するって事はないだろ？」

いつにない強い口調に、周りの者が息を呑んだ。由樹が声を荒げるのはめずらしい。

二葉の目は由樹の目を貫くほどにまっすぐ見返した。しかし。

なぜか、それは挑戦的というより何の感情もないというように見えた。

「！」

由樹の手を強く振りほどき、二葉は足早に教室を出て行ってしまった。

緊張の糸が一気に緩み、教室内はざわめいた。学年一の容姿と頭脳を持つクラス委員の男女をないがしろにした転校生。受験を控えて毎日が息の詰まるような学校生活の中で、この一件は恰好のスキヤンダルだった。

涼子は、由樹に言った。

「ごめんなさい、嫌な思いをさせて。」

「何で英が誤る？」

「一人でいたい人だっているわ。私が気に入らないのかもしれないし。差し出がましいことだったのかも。」

今の涼子には、もう二葉の態度などどうでもよかった。自分のために、あの冷静な由樹が憤ってくれた、そのことが気分をよくしていた。だから、寛大な気持ちになれたのだろう。

「人が好すぎるよ、英は。」

由樹にそう言われると、少し後ろめたい。

「そんなこと・・・ない。」

そう答えるのが精一杯だった。

だが、由樹は時間が経つにつれ、腹立たしさが段々後悔に変わっていくのをとめられなかった。自分をまっすぐに見た二葉の目が脳裏をかすめるたび、思い出し、段々と鮮やかな記憶となっていく。

「口が利けるなら」そんなせりふを言っつてよかったのだろうか。わけありの転校生なら、人前で口を利けなくなるなんてよくある話だ。

前の学校でひどいいじめにあっていたのかもしれない。なのに、あんな扱いをしてよかったのだろうか。もし、明日から二度と学校にこなかったら・・・？

平穏な生活を乱す存在と、きめつけすぎていたのかもしれない。だから、あんな些細なことであそこまで過敏に反応したのかもしれない。だが、それを冷静に自問自答できるほど由樹は大人ではなかった。ただ、わけのわからない思いと、後悔に頭をかかえるしかなかった。そして、明日もまた二葉が現れるよう、祈るしかなかった。

登校ラッシュの時間帯、昇降口にできた人ばかりは、昨日の実力テストの結果発表だ。パソコンで打ち出された筆書体の黒い名前が、五十人分羅列されている。

由樹は、女子生徒の群れの後ろから掲示を見上げた。

由樹はいつもどおり一位だったが、それより気になるのは二葉の順位だった。素早く左へと視線を走らせる。

すると、四九位というぎりぎりのラインで名前を連ねていた。優秀とはいえない、中の上といったところか。二葉はこの結果を見ただろうか。いや、その前に学校へ来ただろうか。

重い足取りで教室に入る。

入り口で一瞬立ち止まり、室内を見渡す。あと五分で始業であるためほとんどのクラスメイトがいる。なのに。

あの長い黒髪は見当たらない。

唇を噛んだ。胸の奥を突かれた気がする。

自責の念にかられるとはこういうことをいうのだろう。いや、悪いことなどしていないのだから、それはおかしい。

「保科君、おめでとう。」

クラスメイトの女子が数名、口々にテストの結果をもてはやしている。だが、それを笑って受け止めることができない。一位であったことなど、今はどうでもいいことだ。

始業のチャイムがなり、担任が入ってきた。すりこまれた習慣が、

由樹に号令をかけさせる。

その日、二葉の席が主を迎えることはなかった。昨日のことが原因なのか。だが、あんなことくらいで？と責める気持ちがないわけではない。

次の日も、二葉は来なかった。

思い切って担任に欠席の理由を尋ねると、連絡が取れないのだと言われた。

「届けられている電話番号が間違いらしくてな。保護者の携帯も留守になってるし。もう少し様子を見て、場合によっては自宅へ行くこと思っている。」

戸惑うような表情の由樹に、担任は聞いてきた。

「保科には、欠席する心当たりでもあるのか？」

どきりとしたが、冷静に否定をし、職員室を出た。

転校早々トラブルを起こし、登校しなくなった少女を、誰もクラスメイトだと思っていない。例え今、訃報でも入るうとも、葬式に行く人間がどれくらいいるだろうか。そう思うと、哀れな気もする。だが、少なくとも普通の少女ではない。一度として笑わず、口を利かなかつた。初日の、緊張とは違う、明らかな拒絶の意思表示。涼子でさえ、二葉のことを口にしない。いや、それは嫌なことを思い出してしまうからか。

そんな昼休みのことだった。

自分の席で何をするわけでもなく頬杖をついていた由樹の耳に、突如「遠野」という名が飛び込んできた。

ハツとして顔を上げる。

その声は、嘉納かのうという男子のものだった。医者の子で優秀だがそれを鼻にかけているため、嫌われている。その嘉納が、クラスの気弱な男子グループをつかまえ、話しているのだ。

「ノーベル賞候補って言われている遠野基博士とのおのせき、知ってるか？あの娘なんだってよ、遠野二葉は。」

由樹は席に着いたまま、思わず聞き耳を立てた。

「でも、一日来ただけで、全然こなくなつたじゃん。」

「それだよ。親父に聞いた話じゃ、あの娘は実験台らしいぜ。」

「実験台？」

「そう、研究材料だつて話。早い話がモルモットさ。クローンって噂もあるらしいぜ。」

嘉納の話し方は、どうしてこうも厭らしいのだろう。どんなセリフも不快に聞こえる。その後の会話は、次の授業準備に湧き出したクラスメイト達によりかきけされてしまった。

(実験台・・・クローン？まさか・・・)

非現実的すぎる。そんな話、嘉納の話題づくりのデマにきまつている。

その日は六時間目を過ぎた頃から雲行きが怪しくなり、七時間目の始まる頃には雪が舞いだした。

「どつりで寒いはずだぜ。」

「窓ガラスの近くなんて暖房関係なしって感じ。冷たい空気が伝わってくるもの。」

雪という年に数回の非日常にクラス中が沸いている。由樹も思わず窓の外に見とれていた。

が、突然、クラスの空気が変わった。

明るい会話が、ざわめきに変わったのである。

何事かとクラス中をかけめぐった由樹の視線が、一点で止まった。

教室の引き戸の横に立っている遠野二葉のところだ。

すべての視線を浴びていることをものともせず、何事もなかったかのように二葉は自分の席にまっすぐ向かっていた。

「もう、席なんか必要ないと思つてたのに。」

誰かが言った言葉が、由樹の耳にはつきりと届いた。女子には違いないが、誰かはわからない。いつもはそういうセリフを許さない英涼子も、今日はうつむいている。二葉はだまって教科書を机に出した。

まもなくチャイムが鳴り、地理の授業が始まった。

由樹は、とりあえず安心はした。二度と学校に現れなかつたら、自分の責任かもしれないと恐れていたからだ。だが、二葉は登校した。周りの目が冷たいのは気になるが、とにかく一安心だ。あとは嘉納が余計なことをこれ以上吹聴しないようにはせねばなるまい。

放課後には清掃が待っている。出席番号順に班が割り振られ、毎週校内のどこかしらを掃除するようになっていく。中でも「教室」は一番手がかり、嫌われている。

「保科。」

帰りのシヨートホームルームの前に、親友の橋武士たかはなたけしが由樹の元にやってくる。

「悪いんだけど、遠野に教室の掃除があるって言うてくれないか？」

「・・・俺、班違うぜ？」

「つれないこというなよ。クラス委員じゃん？話しかけづらいつていうかさ、・・・なんか無視されそうっていうか。」

「情けないこと言うなよ。いくらなんでも噛み付きやしないさ。第一、初日の騒ぎで俺の方が嫌われてると思うし。」

「大丈夫！クラス委員だから！」

「それ、根拠ねえし。」

「頼む！今度おごるから。な？」

「・・・別にそんなこといいよ。わかった。」

由樹は少し緊張しながら二葉に近づいた。身の回りはすぐにも飛んで帰れそうなほど、用意が整っている。

「遠野。」

二葉は、ゆつくりと由樹を見上げた。

二葉の瞳は淡い紅茶の色をしている。

「今日、教室の掃除当番だから残ってくれないか。」

二葉の薄い唇は、硬く閉じたままだ。

担任が現れ、由樹は席へ着かざるを得なくなり、返事を聞くことはできなかつた。

帰りの挨拶が終わり、全員いっせいに椅子を机に乗せ、後ろへ下

げ始めた。二葉もそれに倣っている。由樹は自分の作業をしながら、ずっと二葉の様子を見守っていた。二葉は帰らず、教室に留まっていた。何人かが箒で床を掃き始め、班長の橘は二葉に雑巾を手渡した。

スカートでの雑巾がけがしづらいのに加え、制服の上着は実用性の欠片もないクリーム色がかった白色だ。女子は皆雑巾がけを嫌がり、箒や机拭きに率先して従事し始める。ポジションのわからない二葉は床にひざを着く選択肢しか与えられなかったわけである。だが、二葉は躊躇せず雑巾がけを始めた。

いい加減でなく、もくもくと、汚れを落とそうと一心に力をこめて働き始めた。

意外だと、由樹は思った。

二葉は、適当に仕事をやっているふりだけして帰ってしまうのではないかと思っていたからだ。だが、違った。

「保科君、何やってるの？廊下掃除でしょ？」
涼子が入り口で由樹を急かした。

由樹は二葉の様子に安心して廊下に出た。

廊下には青のタイルカーペットが敷き詰められている。掃除機での掃除と、手すり拭きという簡易なところが、生徒には人気の場所だ。雑巾で手すりを拭き始めた由樹は、やがて二葉がバケツを持って廊下に出てくるのを目にした。水場は廊下の一番奥のトイレ脇にある。二葉達の教室からは最も遠い。水のたつぷり入った思いバケツを持って移動するのは男子にも結構な労働だ。それを女子がやるなんて。

由樹の体は自然に二葉の隣に動いていた。

「持つよ。」

バケツにかけた手に、二葉の息遣いがかすかに聞こえた。が、二葉は手を離そうとはしなかった。しかし、由樹を拒絶もしなかった。

水場に水を流し、中に放り込まれた雑巾を一枚ずつ洗い始める。

二葉の袖も由樹のシャツの裾も雑巾の汚れた水で灰色に染まりか

けていた。寒いし、水は肌を突き刺すようにつめたい。しかし、このままではと、腕まくりをした。二葉もだが、何気なく見た二葉の二の腕に、由樹は思わず絶句した。

一瞬、腕に模様があるのかと思った。

しかし、良く見るとそれは痣だった。

赤紫のもあれば、なおりかけの茶色の点もある。赤い筋のようなものも無数にある。それは明らかかな虐待を証明していた。

思わず由樹は二葉の肩をつかんでいた。

「遠野、お前……。」

二葉は少し困惑した表情を浮かべたが、すぐにいつもの毅然とした瞳の色に戻り、由樹から離れ、走り去った。

置き去りにされたバケツを前に、由樹は動けなかった。

見るべきでないものを見てしまったような感がある。乾いた喉を唾液と潤そうとしても、口を閉じることができない。

(何だよ、今の……。)

由樹の脳裏に嘉納の言葉が走る。

実験台らしいぜ。モルモットと同じ

(いや、あれは実験とは関係ない。そんなんじゃないだろう。)

空のバケツを手にしてようやく教室に戻る頃には掃除は終わっていて、武士が由樹に近づいてきた。

「さっきはサンキュー。」

「遠野、もういないのか?」

「ああ。バケツは? って聞こうと思ったのにすり抜けてっちゃってよっぽど学校とか友達とか嫌いなんだな。」

「嫌い……?」

「少なくとも好きには見えないから。けどああいう性分は苦勞するよな。どういふ環境で育ったか知らないけど。」

嘉納の話が気にかかる。もはや、あれが全くの出たら目だとは思えない。何を知っているのか。どこまで知っているのか。

激しくなる雪が、夕刻を早めの夜色に染め始めていた。部活動も

すべて中止になり皆家路を急ぎ始める。

由樹も武士と校門を出、バス通りへと歩き始めた。傘がすぐに重くなり、紺色のウルコートの上には六の尖がりをもつ星型の結晶がスパンコールのようにくっつく。

天候のせいかバスがなかなか来ないらしく、停留所には沢山の生徒が長蛇の列を成していた。

「駅まで歩いたほうが早いかな。」

由樹の言葉に武士も同調し、二人してまだ雪の積もらない濡れた歩道を歩き始めた。つま先から伝わる寒さが、知らず知らずのうちに足を早め、ほとんど口を利かずに黙々と歩いていく。

十五分ほど歩いただろうか。まだ半分以上の道のりがあるのかとうんざりしかけた時、不意に視線の先に見慣れた制服のスカートが目に入った。

長い髪は、濡れた海草のように重く見える。

由樹は思わず息を呑んだ。

彼女は傘を持たず、コートも着ていない。氷点下になるうかといような大雪の夕方を、マフラーも手袋もなく、製靴ひとつで歩いている。しかも、急ぐわけでもなく、足取りが重い。

「あの長い髪、遠野だよな？」

武士の返事を待たず、由樹の足が思わず宙を蹴っていた。そして、幽霊のように影薄く進んでいく二葉の背後から傘を差し出した。

二葉の足は緩まず、由樹は声をかけた。

「傘、持っていけよ。」

二葉が立ち止まり、二人は視線を合わせた。二葉の驚いた様子が、暗い中でもよくわかる。住宅街の車も通らない静かな路上で、二葉の息が白くにごる。二葉も生きているのだ。どういうわけかそんな当たり前のことを実感する。

二葉は黙って傘を押しつけ、また歩き出した。

「そんな恰好で、絶対風邪ひくぜ？」

さっきの腕を見てしまったからか、妙に同情めいた憐れみ由樹を動

かしている。こういうお節介が嫌いなのだろうかとはわかってはいる。だが、涼子の二の舞を踏むのかという恐れはない。揺るがない強い意志で二葉を追う。だが、二葉の眼は初日に由樹を見た、同じ色をして怯まない。

その頬の脇に、突然、紅蓮色の光が輝いた。

ピアス。

何の因縁か、背徳か。

一体何を、その後ろに抱えて生きているのか。

二葉は由樹の脇をすり抜け、雲溜りの道を、音をたてて走り去っていった。

寒くないのか。

人の気遣いなど、欲していないのか。

青いスカートも、けたたましい水音も、たちまちブルーグレイに染まる景色に溶けていってしまった。

「ふられたな、めずらしく。」

隣に来た武士がからかうように言った。

「そんなんじゃないよ。」

「初日から一番関わってんのが保科だよ。しかも自ら進んで。」

「よく言う。橘は関わりを俺に押し付けた側だぞ。第一、絶対異常だろ。あの恰好。」

武士は先に立ってゆっくり歩き始めた。

「この時期の転校生ってだけで十分異常だよ。しかも初日に騒ぎを起こした。いつ不登校になっても不思議じゃないね。」

「・・・冷たい言い方だな。」

「みんなの意見だ。第一、今のシーン。遠野に傘を貸そうとした保科を他の女子が見てたら鞘当的間違いなしだぜ。」

「ああせずにはいられないのが普通だ。」

語尾を強めて言い切ったが、武士の返事は早かった。

「思っても躊躇うのが普通だ。」

由樹が言葉につまり、会話は途切れた。

雪の日は、なぜこんなにも世界が静まり返るのだろう。ありとあらゆる有機物だけでなく、無機物さえもが息を潜めているようだ。

駅が近づき、少しずつ通りがにぎやかになってきた頃、武士がようやく口を開いた。

「あの英が・・・味方から手を引いたんだ。遠野は孤立する。完全に。でも必要以上に保料が手を差し伸べるのは止めたほうがいい。」

「・・・どういう意味だ？」

「保料が構えば、女子から必要以上に睨まれる。周りから相手にされないか、いじめられるかなら、前者の方がましだろう。」

「橘、今はそうかもしれないけど。」

「明るい将来があるとは思えないね。遠野の態度が何を意味してるのか知らないけど、人嫌いならどうにもならないぜ。そんなクラスメイトをどうにかしてあげようなんて余裕は受験を控えた俺たちには皆無だ。」

「・・・そういう考えをするんだな。」

「進んで厄介ごとを抱え込むことはないだろう？とにかく、保料の行動はどんなに些細なことでも注目される。そういうの、いい加減自覚したほうがいい。自惚れとか、そういう次元じゃないからな。」

自動改札機を通り抜け、二人は異なるホームへと別れた。

由樹の家は密集した住宅街の角地にある。猫の額ほどの庭には木々が所狭しと植えられ、僅かながらも季節の花や実をつける。

名門私立に通いながらも、由樹の家は一般中流家庭にすぎない。

ただ両親が質素にやりくりして教育費を捻出しているだけのことだ。開業医の息子である嘉納や、一流商社マンの娘である涼子とは明らかに違う。だが、両親にはそれなりの意地があるらしく、特待生として支給される返済不要の奨学金の話は断っている。自分の子どもも教育費を人様に都合してもらうことを恥と考えているらしい。昔気質といおうか、自尊心が強いといおうか、今時めずらしいとは思わう。だが、両親がどんな気持ちで自分を育てているのかは、由樹に

は痛いほどわかっている。

母親は由樹が幼い頃交通事故に遭い、車椅子なしでの生活は二度とできない身体になってしまった。まったく足が使えないわけではないのが救いで、日常生活でつきっきりの介護が必要であるほどではないが、やはり不自由な身だ。そんな家族を抱えているのが、必要以上に父を気負わせているのだろう。

バリアフリーの家など、今時めずらしくないし、車椅子用の生活用具も身近になった。ハンディを背負った人にも住みやすい社会へと動き出す精神の豊かさがあがりながら、一方で虐待や殺戮が耐えない世の中でもある。人は二分化しているのか。金銭の豊かさが心の豊かさをもたらす階層と、その逆を突き進む世界と。

「着換えていらっしやい、由樹。ごはんもつすぐできるから。車椅子で台所を動く母に、由樹はいつもと同じ言葉をかけた。」

「すぐ行くから、待ってて。あとはやるよ。」

学校の連中はとりわけ幸せそうに見えた。不自由なく、自分のことだけ悩んでいればいい。欲しいものはすぐ手に入れられるだけの十分な財力、そして名門私立校に合格するだけの恵まれた知力。

（俺だって、遠野だってそんなものは多分持つてるんだ。でも・・・。）

周りから見れば、由樹ほど恵まれて見える者はいないのかもしれない。母のことを抜かせば、確かに恵まれすぎている。両親は揃い、家庭が壊れる心配はないし、家に帰りたくないと思うようなこともない。幸せに育ってきた。

制服を脱ぎ、ふと宙に上げた自分の腕を見つめた。筋肉でひきしまった青年の腕。由樹はあの二葉の腕を思い出し、痛くはないのに頬の筋肉がひきつった。

あれは、人間の腕ではない。痣や傷が絶えない生活とは何なのか。自分が想像しているような日常なら人嫌いで当たり前だし、口を利く気にもなれないだろう。

窓の外は更に白く染まりゆく静かな景色が広がる。

同じ空の下で、今二葉はどうしているのだろうか。
今までにない衝撃は、平穩だった由樹の心をこれ以上ないほどにかき乱していた。

遠野基博士。

放課後、図書室のパソコンで検索すると、数千件のホームページが候補に挙がった。クラスメイトの嘉納の言葉が忘れられないからだ。だが、数ある中にもその正体が見えてきそうな記述は一切なく、ただ遺伝子工学分野の権威だとか、クローンの研究で世界に名を馳せているなどといった内容が同じように書かれているだけだ。だが、怪しげなサイトに行くと、嘉納が言っていたような下馬評が連ねられていた。

「ヒトクローンを作り、実験台にしている」

「浮浪者などをさらい、解剖実験している」

「不法な臓器売買のブローカーである」

研究所があるらしいが、住所などは一切わからない。とにかく誹謗中傷の応酬で、ろくな情報が得られないのだ。

「次、変わって欲しいんだけど。」

どきりとして振り返ると、そこには嘉納のにやけた顔があった。

「ネットは一人十五分。優等生の保料が守らないってというのはまずいと思うぜ。」

あわててページを閉じるが、もうばれている。嘉納は由樹から席を奪い、得意げに鼻先で笑った。

「光荣だね、俺の言ったことを真に受けてくれるとは。」

「……。」

「もっと知りたければ、教えてやってもいいんだぜ。」

「別に、知りたくない。」

「遠野基博士は結婚どころか、浮いた噂ひとつない撫男なのさ。なのに娘がいるんだ。おかしいだろう?」

「おかしくないさ。養女かもしれない。」

「ああ、そうかもな。だが、真実は絶対に違うぜ。」

「・・・遠野の環境を探って楽しいか？」

「他人のこと言えんのか？優等生。」

嘉納の言い方には隅々まで棘がある。これ以上関われば何をしてしまっかわからないと思い、由樹は足早にそこを立ち去った。

教室は、まだ掃除の途中だった。武士や二葉の班が今日までの当番だ。

二葉は、他の女子が優雅に箒を持つ中、男子に混ざって床を水拭きしていた。服の袖をまくらず、長い髪が床につきそうになっている。

汚れた雑巾を持ち、立ち上がった二葉と思わず眼が合った。が、二葉は何の反応も示さず、バケツの水で雑巾を濯ぎはじめた。まるで、由樹の存在など初めからなかったかのように。

「あんまり見んなよ。気付かれるぜ。」

いつのまにか武士が隣に立っている。だが、その目は、悲観的だ。「本気でないなら、気をつけるよ。俺の言ったこと、わかってるだろ？」

「わかってる。大体、『本気でないなら』って何だよ。」

「・・・一番まじめに掃除やってて正直驚いてるし、見直してる。でも、」

「心配してるだけだ。色々ありそうだし。」

「そうなんだろうけど、」

「もう行くよ・・・部活始まる時間だから。」

「ああ、俺もすぐ行く。」

二葉の腕のことは、誰の口の端にも上らない。きつと、誰も気付いていないのだ。あの日から一日たりとも脳裏から離れない、あの凄惨な光景。

そんな由樹の様子を教室の片隅で見守る姿があった。涼子だ。涼子は、二葉が汚れた水と雑巾の入ったバケツを持って教室を出て行くのを見て、思わず声をかけたくなった。「一緒に持つ。」と。

だが、涼子の足はすぐに強張った。

また拒絶されたら。

その思いが先行したからだ。

今まで涼子は誰かに嫌われたり、拒絶されるなどという経験がなかった。いつもみんなが涼子に好かれようと優しく近づいてきた。なのに。

廊下の向こうへとよるめいて進む二葉の背を黙って見送るしかできなかつた。

(わからない……。私が、一体何をしたというの?)

涼子が二葉への手を引いた一番の理由は、由樹の態度にも拠るところが大きかつた。だが、嫉妬が自分を醜くさせているなど、涼子は認めたくなかつたし、気付きたくもなかつた。

そのまま教室を離れ、グラウンドが見渡せるレンガ敷きの中庭へと出た。

広い芝生のコートで仲間と準備運動をする由樹が見える。どんなに遠くからだつて、涼子には由樹のいる場所がはっきりとわかる。

一年から同じクラスで、ずっと二人でクラス委員をしてきた。だから、どの女子よりも由樹の近くにいるという自負がある。例え由樹が何も言わなくても、由樹に好かれていると思つていた。その資格が自分には十分であると、思つていた。

それが揺らぎ始めて、涼子の表情は険しくなつた。

「英が保科を見る分には、誰も文句は言えないな。」
はつとするのと、顔が熱くなるのは同時だつた。

「なんか、意地悪な言い方ね。」

照れ隠しにわざと冷たく言い放つた。が、いつも明るい武士の顔はにこりともしてくれない。

「本当だろ？いくら保科に惚れてる女子が五万といたつて、みんな英にはかなわないつて知つてるからさ。」

サッカー部の鮮やかな青のユニホームが、薄暗い空に浮かび上がる。

「橘君は知っているの？保科君が誰を好きか。」

胸が高鳴り、唇までも震わせている。だが、涼子はどうしても知らなかった。

「・・・いや。」

「だって、親友でしょ。」

「だから、いないんだよ。あいつ、誰も好きじゃない。」

涼子は武士の横顔を凝視した。

「そうなの？」

「俺が知る限りでは、だけど。」

由樹自身が否定する限りは、二葉については何もいえない。涼子の疑いの眼差しは、やはり二葉を気にかけているからだろうか。

涼子は黙って踵を返し、グラウンドに背を向けた。冷たい冬の風が前髪をなで、頬をかすめ、スカートの襞を翻す。

（少なくとも、私を好きではないんだ。私のことなど、好きではなかったんだ。）

閉じたまぶたの裏が熱くなり、噛んだ下唇が震えている。

惨めだった。

自惚れていた自分が馬鹿みたいで、恥ずかしかった。

ふと、目の前を二葉が通り過ぎた。人気のない昇降口で、忙しく靴を履き替えている。

その途端、涼子の中で何かはじけた。

「遠野さん。」

自動ドアから今にも外へ出ようとしていた二葉の長い髪が、宙で揺れて止まった。

呼び止めて、何をしようというのだろうか。涼子には自分のしたこと戸惑い、だが後に引けない意地のよ様なものが彼女を突き動かしていた。

「あのね、あの・・・。」

だが、いざとなると何も言えない。意気地がないのではなく、涼子の本質が優しいのだ。

「・・・さようなら。気をつけてね。」

二葉が何も言わず、そのまま去っていった。涼子は心から安堵していた。

今、本当に、冷たいことを言っただけで済ませたいような気がしたからだ。だが、それを押さえられたことに心から感謝した。言っていたら、きっと想像以上の罪悪感に苛まれたはずだからだ。

優しく、美しく。そんな形容詞に甘んじていた自分が、決してそうではないのだということを感じた。

乱れた前髪が、今の自分にはお似合いだと思った。そして、そんな自分がいつもより愛おしいと思った。惨めな自分を認識しながらも、二葉に冷たくしなかったことが途轍もなく素晴らしいことのように思えた。

(明日もまた、さよならぐらい言ってみようか・・・。)
そんな素直な感情が涼子の中に芽生えていた。

チヨークが黒板をたたく音と、ノートの上で芯の削れる音だけが響く静かな教室に、今日は朝から雑音が時折混ざる。

二葉の咳だ。

かわいた咳が、小さく、時に大きく苦しげに響く。当たり前だ。

晴れて澄んだ空気が冴え渡る日でも、雪が凍りつく日でも、コートもマフラーもなしで過ごしている。傘さえ持たない。そして、痣だらけの腕。一体どういう環境で育っているのだ。特にこの学校では、それがとりわけ異色に映る。

「水を飲んできたらどうだ？」

見かねた数学の教師がその声をかけると、二葉は黙って立ち上がり、教室を出て行った。

静かな授業が戻ってきた。が、それは二葉がなかなか戻ってこないからだ。十分以上たったところで、教師も不振に思いたし、「クラス委員、ちょっと様子を見てきてくれないか。」

「はい。」

立ち上がったのは由樹だった。クラス委員は由樹だけではない。だが、涼子が反応するより、由樹のほうが早かった。というより、まるで教師が言い出すのを待っていたかのような周到さといってもいい。

(また・・・)

涼子の美しい額に筋が入った。

そして、それは武士も同じだった。由樹が二葉に関わることがないように祈っているのに、二葉の不幸が由樹をますます引き付けていく。そんな二人の心中など予想だにせず、由樹は教室を出ていった。

全館空調の校内は、廊下でも暖かい。

人気の全く無い廊下とは、こんなにも広いものなのか。遠くの突き当りが、まるで異次元に繋がっているかのような錯覚さえおこる。まるで、見知らぬ場所に立っているかのようなようだ。

とりあえず水飲み場の方向へと足早に向かう。だが、想像通り二葉の姿などない。授業中の校内が、こんなにも寂しいものだとは思わなかった。しかも、冬の曇り日はどこも薄暗くて、不気味ささえ漂う。由樹には、二葉がこの広大な敷地のどこかに吸い込まれてしまったのではと思った。そんな非現実的な考えが浮かぶほど、やはり二葉は浮世離れた存在として捕らえられる。

あの二葉が保健室へ行くとも思えない。だからといって、他に行く当てなどあるのか。

「保科君」

突然後ろから声をかけられ、驚いて振り向くと、そこには涼子が立っていた。走ったらしく、少し息が上がっている。

「遠野さん、いた？」

「・・・いや。」

「だと思った。保科君が入れないような場所に遠野さんがいたとしたら絶対見つけられないんじゃないかと思って私も来ちゃった。教

室へ戻つてて。あとは私が探すから。」

何も言えずにいる由樹に、涼子は諭すように付け加えた。

「更衣室とか、トイレとかじゃ、さすがに無理でしょ？」

「別のところで倒れてたら、英も一人で困るだろ？俺も探すよ。」

涼子は、自分の下心を見透かされたような不快な気持ちになった。

そう、これ以上、由樹と二葉が近づくのがたまらなくて来たのだ。

だが、それを由樹が察することは許せない。

「・・・じゃあ、一緒に探しましょう？手分けすると行き違いにな

りそうだし。」

「そうだな。」

とりあえず、由樹が肯定してくれたのは救いだっただ。

いつからだろう。こうして、他人の顔色を伺い、その言動に気を

遣うようになったのは。涼子が思うように話し、行動しても誰一人

反論することなどなかったし、思い通りにもなった。なのに。

半歩前を小走りに進む由樹の背は、完全に他人だ。その背が、涼

子を拒絶している。

嫌われていないだけいい、なんていう友達の負け犬の遠吠えをい

つも叱咤していたのは自分だ。それが今は、その陳腐なセリフが脳

裏に何度も浮かんでいる。

いくら多くの女子が、涼子をライバルになることを避けて由樹を

諦めたとしても、由樹が自分を好きでないのなら、何の意味もない

のだ。

今、よくわかる。

由樹の自分に対する態度は、決して好意を持っている相手に対す

るものではない。由樹が自分を好きになることは、ないだろう。多

分、一生。どんなに思っても、叶わない相手というのがやはりいる

のだ。

由樹は、二葉を女としてみているというわけではないのだろう。

涼子の知らないところで何かがあり、それが由樹を突き動かしてい

るだけなのだろう。

しかし。

(それはいつか、恋になる。)

いくら女子にもてはやされようと、冷静に制していた由樹。唯一近寄れたのが同じクラス委員の涼子だけだった。涼子は自分に自信があつたし、いつかは絶対両思いになれると信じていた。だが、それは思い上がりだった。

ただの同情だけでこんなに必死になるわけがない。こんなに意識するわけがない。当の由樹は、まったく気付いていないのだろうが、二人は、中学棟も含め二十分以上探し回った。段々身体が火照り、熱いくらいになってきた。だが、見つからない。念のため保健室も行ったが、案の定二葉はいなかった。

「まさか、帰つたつてことはないわよね？」

「教室に戻っているかもしれないな。」

「もう授業終わるし、いったん戻りましょうか。」

チャイムが鳴り、途端に学校中が湧き出した。どこに人がこんなに潜んでいたのかと思うほどだ。

教室に戻ると、数学の教師が二人を待っていた。

「ご苦労だったな。遠野、十分くらい前に戻ってきたんだよ。悪かった。」

そう言い、配布物のプリントを由樹たちに渡した。

「宿題だ。二人なら、わけなく解けると思うが、もし質問があれば、いつでも来なさい。」

「ありがとうございます。」

由樹は、二葉の方を見やった。二葉は、上腕を抱えてうつむき加減に座っている。

「遠野さん。」

近づいたのは、涼子の方が先だった。

「もう、具合はいいの？」

当然、二葉は反応しない。だが、今の涼子はそんなことくらいで傷ついたり、怯んだりももうしない。女王様然としていた自分の思い

上がりを知ったからだ。

「保科君、心配しすぎて探していたのよ？話したくなくれば頷くだけでもいいから、答えてくれない？咳は止まった？」

だが、二葉は頑なだ。宙を睨み付けるかのような目を、僅かにひそめただけだ。

「あのね、人に心配かけた以上は、やっぱり答えるべきことっていうのがあると思うのよ。」

少し強い口調になったところへ、涼子の友達が近づいてきた。

「ほっつておきなさいよ、涼子が構う価値なんかないんだから。」

「そうよ。一人がいいっていうんだから、放っておけばいいのよ。」
そこへ由樹が近づこうとした。が、それを武士が制した。

「もう、やめておけ。」

「？」

「もう構うな。由樹が何に同情してるのかしらないけど、遠野はそれを望んでいないんだから。」

二葉の唇が、ぎゅっと引き締められた。

何か言いたいのに、言えない理由があるのではないかと、由樹には思える。二葉の震える唇が開かないかと、期待する。

固唾を飲み込んで見守る。

だが、二葉は動かない。目元を歪めて、なお沈黙を守り続けている。

担任に一度は聞いた。二葉に、口がきけない理由があるのかと。だが、ないと言う。

転入試験の面接では、普通に話していたという。だが、転校を繰り返していることから、やはり対人的に何かあるのだろうとは言っていた。

このままでいいとは思わない。だが、由樹にはどうにもできない。もしかすると、どうにかしようと思うことは、間違っていないか。二葉の人生に、そこまで関わる資格があるのか。

違う。

他人を哀れむという感情こそが、思い上がりではないだろうか。優しくなれといった。大人はみな。

心底から湧き上がる感情を、間違っていると思ったことなどなかった。それは、良心だと信じきっていた。

だが、今はわからない。

二葉が何を考え、何に苦しんでいるのか。

明らかかな虐待。異常な環境。そこから救い出す力など、自分にはあるのか？

(ないのなら、下手に関わるなど言いたいのか？)

自問自答の末、由樹は自分へそう言い放った。

その後、二葉は二度と咳をしなかった。だが、それは具合が良くなったためでは断じてない。顔を真っ赤にして、体を震わせて耐えていたのだ。

それに気付いたのは、由樹、武士、そして涼子。

二葉なりの気遣いなのだろう。二葉なりに悪かったと思っているのだろう。

もし、ここで水のペットボトルを渡しても、のど飴を渡しても、絶対にはねつけるのだろう。だが、二葉をただの変わり者で片付けたいいけない気がする。親切が、人によっては親切にならないこともあるのではないか。

武士は知っている。二葉が、このクラスの誰よりもまじめに掃除をすることを。二葉をせせら笑う女子や、成績だけを気にしているような男子よりも、ずっと立派だ。

涼子は、由樹があれだけ二葉に関心を持つ理由がどうしても知りたいと思っている。才色兼備の涼子になくて、二葉にあるものとは何なのか。それがわかれば、涼子自身、今までの高慢さから一つ抜け出せるのではないかと思っている。

由樹は、二葉に熱がなければいいなと思っている。咳を我慢なんかしてほしくない。それがどんなに辛いかわかってるし、身体に

いいわけもない。

昼休み、二葉の姿はあつという間に教室から消えていた。鞆はあるから、帰ったわけではないだろう。

咳をこらえるのも限界だったのではないか。

武士との昼食を心あらずの状態で済ませた由樹は、早々に席をたつた。武士はその様子に何か言おうと思ったが、思いとどまり、黙って見送ることにした。

由樹は、二葉を探した。だが、人目を気にせず二葉が思い切り咳をすることが出来る場所など、ひとつしか思い当たらない。

屋上だ。

普段は立ち入り禁止となっているが、出ようと思えば出られてしまふ。もしかしたら、さっきの授業中も、屋上だったのではないかと、とりあえず生徒があまり使わない階段を上ってみた。

屋上への扉へと階段を上り詰めていくほどに、外の冷気が身に染みてくる。

アルミ製のドアには、鍵がかかっている。誰かが開けた証拠だ。由樹は、それで確信した。二葉はここにいる。

曇り空は、風を呼んでいる。

制服だけでは、あつという間に腕に腕に鳥肌が立つ寒さだ。

灰色の屋上は、空調機や給水タンク、配管などで足場が限られている。もともと、人が出入りするための場所として作られているわけではないからだ。足元に気をつけねば、すぐ何かにつまずきそう

だ。

と、そのとき。

激しい咳が耳に入った。

急いで多くの障害物を潜り抜け、視界が開けた先に、黒い髪と、

青いスカートが風に絡まれているのが見えた。

脳にまで響くのではないかというほど、激しい咳き込み方で、二葉はコンクリートの地面に半分突っ伏しているようだった。このままでは、吐き気も伴う恐れがある。

由樹は二葉のもとにかけより、まず、揺れる身体を支えてやった。口元を押さえていた二葉の手が、由樹を突き放そうと宙を切った。だが、それは虚しく空回りしただけだ。

咳がおさまった一瞬を狙って、由樹は持ってきたスポーツドリンクのペットボトルを二葉の口元にあてがった。

呼吸の荒い二葉の唇には、液体がうまく入っていない。それとも飲もうという気持ちがないからか。

「午後もあんな思いして、咳をこらえてるつもりか？そこまでする理由がどこにある？」

由樹を正視した二葉の目は赤く、涙がたまっていた。具合が悪い証だ。

「何も考えないで、飲めよ。絶対身体が欲しがっているはずだ。何も考えないで、身体の思うとおりにならせてやれよ。」

強い口調で、由樹は二葉を説得しようとした。

一体、何だというのだ。

まるで、己にいつも苦しみを与え、幸せや喜びの類の一切を、禁じているかのようだ。まさか、腕の痣も自分で作っているのか？

やがて二葉は喉を潤す唾さえ失い、由樹からペットボトルを受け取った。

貪るように一息に飲み干さんばかりの勢いで、その姿はまさに貧困の地の児童のようだった。高級ウール地の洋服を身にまとっている少女とはあまりにもミスマッチで現実味がない絵なのに、吹き荒ぶ風は、現実には二人のまわりを取り囲み、身体を縮込ませる。

「これ以上こんな寒いところにいたら、もっとひどくなるぜ。保健室行って寝てろよ。」

二葉は、首を振った。

「何で？腕のこと、知られたくないからか？」

途端、二葉の身体がびくつと震えた。

「安心しろよ。俺は絶対誰にも言わない。保健室行っただって、別に服脱げとか言われないから、大丈夫だよ。」

しかし、もう駄目だった。

二葉は、たちまちその場から立ち去ってしまった。

「遠野！」

痣のことには、触れてはいけなかったのだ。

由樹には、二葉が人を恐れて牙をむく小動物のように思えた。少し慣れても、すぐにまた離れていく。

意識を喪失して暫らくぼんやりしていたが、やがてその場に空になったはずのペットボトルはないことに気付いた。二葉は、持ったまま立ち去ったのだ。

念のため、教室までの道のりを気をつけて見てみたが、捨てられたような形跡はない。

良かった、と思う。

由樹のことを怒っているなら、その辺に投げ捨ててあってもよさそうなものだからだ。

(とりあえず、これはこれで良かったんだよな。)

いけないことはしなかったと、言い切れる。

教室には、二葉の姿があった。何事もなかったかのように、席に着いている。

次の時間も、その次の時間も、やはり二葉は咳をこらえていた。

だが、気のせいか、その回数は少なくなったように由樹には思えた。飲み物を与えた自分の行動が間違っていないかったと、裏打ちしたいだけかもしれないが……。

放課後、部活を終え、荷物を取りに教室に戻った由樹は机の中が空であることを確かめようとのぞいた。と、その中に空のペットボトルが入っているのが見えた。

思わず、誰かが嫌がらせてごみを入れたのかと思った。

しかし、取り出してみても、心臓が爆発するほどに驚いた。

それは、二葉に渡したもので、その証拠にボトルの側面に黒いマジックで文字がかかれていたからだ。

『ありがとう』

走り書きは、間違いなく二葉のものだ。他の誰であるはずがない。胸の鼓動が、喉まで波打っている。

二葉が、自分の行為を認めてくれたのだ。それは、由樹にとって途轍もなく嬉しいことだった。

(俺にも、できることはあるんじゃないだろうか。)
そんな風に思えてきた。

だが、うぬぼれはいけない。すぐに底へと突き落とされるはずだからだ。

由樹はペットボトルを握り締め、スクールバッグの中にしまった。捨てることが、もつたいなかった。

人への親切が当たり前を受け止められる人生を歩んできた由樹には、それは初めて味わう感情だった。

深い吐息をもらした唇が、僅かに震えていた。

郊外の駅から徒歩圏内にあるマンションの一室に、遠野二葉は住んでいる。二葉は鍵を持っていない。チャイムを鳴らすと、同居している叔母の美鈴が開けてくれることになっている。

だが、今日はその気配がない。

二葉は二度目のチャイムを鳴らす気力もなく、いつもどおり屋内非常階段の途中に座り込んだ。こんなことは、めずらしくもない。叔母は保護者というより監視者だ。家への出入りさえ、自由になどさせはしない。そして、自分の居場所はいつだって見張られている。この、耳に埋め込まれた赤いピアス型発信機によって。

冷たいスチールの手すりにこめかみを預けて、二葉は眼を閉じた。嘉納という生徒の言うとおり、二葉は遺伝子工学の権威として名高い遠野基博士の娘だ。

だが、本当は娘というより、「作品」と言ったほうが正しい。基が己の精子と金に困って自らを実験台として提供した名も知らぬ女との間に作り出した、人工人間だからだ。幾多の遺伝子操作で、完璧な人間を作りたかつたらしい。

（何度考えても笑わせてくれる。大金と労力を投じてできたのが、私だなんて・・・）

二葉にとつて学校は現実離れしている、幸せな場所だった。幸せに気付かないほど幸せな若者が、日々を贅沢に食い潰している。中には、基が求めた「完璧」に近い人間も存在する。たとえば、保科由樹。英涼子。そして、嘉納。基は、そういう自然の産物を欲している。自分の手で作り出すために、実験台にして研究したいという。二葉は、そんな実験台を探し出すために学期ごとに名門校を渡り歩いているのだ。

見つけ出した生徒は、同居する叔母が拉致し、研究所へ連れて行く。実験台とは、生きている人間からデータを取るだけではない。ほどなく切り刻まれ、肉塊からミクロへとその姿を変えていく。世間では、行方不明となり、その死体は決して見つかるわけもなく、迷宮入りするのだ。

転校を繰り返しても怪しまれないように、学校ではヒト嫌いを演じる。必ず孤立し、いつ不登校になってもおかしくない状況になるからだ。ターゲットを見つけたら叔母に報告し、時期を見て学校へ行かなくなる。そして、二葉との関係が怪しまれなくなる一ヶ月ほど後、そのターゲットは突然この下界から姿を消す。

犯罪という認識は、基にも、美鈴にもない。「偉大な研究」のためなら、犠牲は当たり前だという。むしろ、名誉だなんてほざくこともある。無論、現実の捜査から逃れる万全の対策はとっているが、それは研究に理解のない無能な人間のための後始末だという。

小学校六年のとき、二葉の運命は決まった。

それまでの二葉は平凡な少女だった。普通の家庭で、普通に暮らしていた。だが、育ててくれた夫婦は養親で、本当の父と母は外国で働いてるといふことは物心ついた頃からきいていた。そして、中学に入る頃には両親が迎えに来るからといわれていた。養父は優しく、きちんとした倫理観にもとづいて正しい教育を行う人格者だった。

迎えが来たのは、突然だった。

背の高い、痩せた女が二葉を引き取りに現れた。真っ赤なフェラリを乗り回す、派手な遊び人に見えた。これが母なのかと思っただが、女は「叔母」と名乗った。

二葉は山林の奥深くにある、窓のほとんどない四角い灰色の建物に連れて行かれ、その中で信じられないものを見た。

そこには、ついさっきまで学校で仲良く遊んでいた友達が、透明なカプセルの中で眠っていたのだ。

痩せた女、すなわち美鈴は二葉の髪をつかんで、そのカプセルの前に跪かせた。

「よくみておきなさい。これがお前の使命になるのだから。」

クラスメイトのセシリアは欧米系のハーフで、可愛らしいばかりか頭がよく、優しかった。二葉は彼女が大好きで、憧れていた。それが！

「このカプセルはね、肉体をそのまま保存するための装置なの。お友達にはこのまま、当分この中で眠ってもらおうね。」

二葉は美鈴につかみかかった。

「どうなるの？セシリアは、いつここから出られるの？」

美鈴はうつとうしさに、二葉を突き飛ばした。

「私に触らないでよ、汚らわしい！こんな出来損ないの人工児と血が繋がってるなんておぞましくてしょうがないんだから！」

（出来損ないの・・・ジンコウジ？）

二葉には、美鈴の言っていることがよくわからなかった。だが、美鈴がいかに自分を嫌いなのかだけは理解できた。

「この子はね、選ばれたのよ。後世まで保存する価値があるってね。名誉でしょう？」

「・・・？」

「この子は、私たちが生きている間は目覚めないわ。この若さのまま、私と兄の偉業の証として後世に華々しくよみがえるのよ。」

この女は何を言っているのだろう。何に眼を輝かせているのだろう

う。

幼い二葉にわかるのは、ただひとつ。セシリアは、もう二度と自分の目の前で笑ってくれないということ。

「二葉、お前の役目は、第二、第三のセシリアを見つけてくることよ。」

つまり、実験台となりうる優秀な人材を見つけてこいということだった。

「さからうたらどうなるかも、ついでだから言っておきましょうか？」

悪魔のような微笑で、美鈴は棚から小瓶をとりだした。

「なんだかわかる？」

眼をひそめてよく見ると、赤黒い見慣れぬ物体が透明の液体の中に沈んでいる。

「これはね、人体の一部。さからえば、お前もこうなるのよ。」

「……え……。」

「だってお前はこの子みたいに後世に残す価値などないもの。まあ、切り刻んでこうしてサンプルになるくらいの使い道しかないからねえ。」

これは、夢ではないのか。

何かの小説の影響を受けて、長い、悪い夢を見ているのではないのか。

そして、今では学校での生活のほうに夢のようだ。転校のたび夢を見、そしてターゲットを美鈴に告げると、一気に現実へ引き戻される。年を経ることに理解してきた自分の現実。

「ああ、それから誰かにいつつけたり、逆らうたらセシリアを殺すから。」

「……！」

「簡単よ。コードひとつ抜くだけでいいんだから。」

その一言が、二葉を完全に支配した。

別に、いつ瓶詰めサンプルになってもいい。しかし、チャンスが

あるのならセシリアを救い出したい。あのカプセルを開け、再びこの世に生きて欲しい。

セシリアの両親が、狂ったように娘を探す姿をテレビで見た。その後は、一切のメディアから遮断された生活を強いられているため、どうなったかはわからない。だが、親のない環境で育った二葉には、親子がどういうものなのかを少し感じることができた。友達の自分がこんなにつらいのだから、きっと両親はもつとつらいのだろう。

そんな思いを、これから何組もの両親に味わわせるのが自分の使命だというのか。

そんな思いを抱きながら、実行してきた。

（私は、何人もの命を、セシリアと私の命の引き換えにしているんだ。）

小六までの日常が、二葉の常識を支えていた。それが、美鈴の気を逆なですることだとわかってからも。

美鈴は、二葉を道具というより、奴隷のように扱う。気に入らないことがあれば容赦なく棒でたたいたり、物を投げつけたりする。

二葉は、自分の腕を制服の上から凝視した。

この学校の制服は、今までのどの制服よりも美しい。淡いクリーム色に青いサテンのリボン。非実用的すぎて、掃除をするときに汚すことを躊躇してしまい、由樹に痣を見られてしまった。

（それが、間違いだった・・・。）

ひざを抱えた腕の中に額を埋める。どんなおせっかい焼きでも、三日もたてば、二葉をかまわなくなる。なのに、今回はうまくいかない。初日、あんなに突っぱねた涼子でさえ、いまだに声をかけてくる。まだ、自分の態度が甘いのだろうか。少なくとも、自分の腕など見せたために由樹が自分を気にかけていることは確かだ。今日だって、思わずペットボトルを受け取り、お礼まで書いてしまった。そうせずに、いられなかったのだ。

二葉には、コートや傘といったものは与えられていない。制服以外の服もない。どんなに寒くても、どんなに濡れになろうと、

所詮「道具」には気にかける価値もないということなのだろう。

だから雪の曰。

差し出された傘に、二葉の心は激しく揺さぶられた。そんな心遣いを、何年かぶりにもらったからだ。

由樹の同情は、いつもなぜか切なかった。

由樹は申し分のないターゲットになる。美鈴は喜ぶだろう。だが、それを躊躇する自分がいる。

涼子も同様だ。

涼子は、セシリアに似ている。美人なだけでなく、頭が良く、しかも優しい。だから、ターゲットにできない。

セシリアが身に着けていたものは、証拠隠しにすべて燃やされた。だが、緑色の髪留めだけが、焦げてはいたが形を留めていた。それを拾い上げ、今も肌身離さず持っている。

ポケットを探り、それを手のひらにのせて見つめた。

辛いときは、これを見てセシリアを思い出す。

意思がくじけそうになったときも、これで自分を奮い立たせる。

セシリアを救うために、まだ死ねない。そして、そのためには生贄が必要だ。

そろそろターゲットを絞って美鈴に報告すべき時期かもしれない。三学期はとても短いし、のんびりもしてられない。

午後八時をすぎ、再び玄関扉の前まで行った。

こんな家に帰る価値がどこにあるのか。別に、帰りたいわけではない。しかし、自分の居場所はここしかない。それだけだ。

金も殆ど与えられず、稼ぐことも許されない。

逃げても行くあてなどない

発信機つきのピアスがある限り、所詮は美鈴の道具なのだ。

自由など皆無なのだ。

チャイムを鳴らす。が、反応はない。美鈴はまだ帰ってないのか。こんなことはめずらしくない。研究が煮詰まれば、美鈴は何日でも帰らない。例えばその間に二葉がどうなろうと、気にもかけない。

身体の居場所さえわかれば、生死は問わないのだ。

乾いた咳が喉の痛みが変わってきた。食欲があるわけではないが、昼食をとっていないため、流石に何か食べたいと思った。

空腹を満たすため、駅前のファーストフード店に入った。一番安いハンバーガー一つ注文し、店の片隅でゆっくりと食べる。あと何日食い繋げばよいかわからない限り、警沢はできない。外は手足が悴む寒さだ。ここなら寒さを少しは防げる。

その様子を偶然目にした者がいた。

武士だ。

武士は、塾帰りで遅くなっていた。共働きの両親は夜遅いため、一人、同じようにファーストフードで夕食を済ませていたのだ。見覚えのある制服に驚いたが、それが二葉であることに、更に驚いた。二葉は、こんな所と無縁だと思っていたからだ。しかも、座って食べているのは一番安いバーガー一つ。思わず自分の食べているものが豪華に見えて気まづくなった。デザートプリンまであることに、罪悪感さえ生まれる。それほどまでに、二葉が惨めに見えたのだ。しかも、二葉は風邪をひいているはずだ。もっと栄養をとって、早くベッドに入るべきではないのか。

武士は散々悩み、迷った拳句、自分のトレイを持って立ち上がった。

「こんばんは。遠野さん。」

あまりに突然のことで、二葉はとびあがるほど驚いた。まさか、こんなところでクラスメイトに会うとは思っていなかったからだ。

「掃除の班が一緒の橘。わかる？」

二葉は、自分の食事の惨めさに恥ずかしさで顔から火が出そうだった。橘武士が由樹の親友だと知っている。いつも一緒に、信頼しあっているのがわかる。

「返事はいいよ。俺、すぐ行くから。ただ」

武士はプリンとプラスチックのスプーンを無造作につかみ、二葉の前に置いた。

「セットでついてきたんだけど、俺、甘いもの食べられないんだ。よければ貰って。じゃ、また来週。」

失礼かな、とも思ったが、由樹があれだけ固執する二葉と話すチャンスが欲しかったし、二葉の食事がどうしても気の毒に見えたからというのもある。

二葉の拒絶が怖くて、早々に店を出た。二葉はどうするだろうか。そのまま捨ててしまうだろうか。気を悪くしたのではないか。

駅前のロータリーに目的のバスが来たため、武士はそれに乗り込んだ。もう、店の中は見えない。

二葉は、武士が自分を哀れんだのだろうと思った。見られたくないところを見られただけでも恥ずかしい。甘いものが苦手、なんて見え透いたたてまえだ。

武士は、親切のつもりだったのだろう。何の計算もない、素直な優しさなのだろう。そして、それは由樹も同じなのだろう。

こういうことがわからないくらい、冷酷になりたい。

小六までの平和な環境が、骨の髄まで染み込んで二葉を支配する人を邪険にするなど。どんなものでも大切にしろと。それを身体と心で覚えてきた。だから、武士の親切を投げ捨てることなどできない。

プリンをかばんにしまい、店を出た。

火照る顔に、冷たい風が当たる。

マンションに戻っても、扉は開かなかった。いつもどおり、人目につかない非常階段に座り、プリンを取り出した。空腹が満たしきれれていないため、喉から手が出るほど欲しい。だが、惨めだ。自分が満たされているときに貰ったなら素直に喜べるのに、飢えているときに貰うと、惨めでしかない。

カップのふたを指でつまむと、涙が溢れた。こんな贅沢な服を着ている自分が飢えているなど、誰が思うだろう。家にも入れず、階段で野宿するなど、誰が想像するだろう。そう思うと、自分があまりにも可哀想に思えて情けなくなった。

武士と会わなければ、こんな気持ちにならなかった。厳しい目で、冷たい心で、踊り場に身体を横たえることを厭わなかったはずだ。人の優しさは、自分を駄目にする。

罪を犯し続ける自分に、優しくなどしてはいけない。そんな勿体無いことをしてはいけない。

一つのプリンを抱えて、二葉は肩を震わせて泣いた。声を押し殺して、唇を噛んで泣いた。

傷なんか痛くない。

いくら殴られても、心はもう反応しない。

心が痛むのは、人の優しさに触れたとき。

泣きたくなるのは、自分の罪深さを後悔するとき。

セシリアのため。

そんなのはきつと、いいわけだ。本当は、自分が生きていたいからだけだ。アルコール漬けのサンプルになるのが嫌なだけなのだ。

（私は、いつたい何なのだろう。罪を犯すための道具……。そのために作られた道具。）

学校で、友達をつくりたい。思い切り勉強して、部活もしたい。

そう強く願った時期もあった。それらを面倒だとか、うざいとか思う若者は、幸せが何なのか知らないのだ。こんな幸せな場所があるだろうか。こんなに美しい時代が、あるだろうか。

プリンは、涙の味がした。

そして、忘れられない甘さだった。

懐かしい幸せを、思い出させる味だった。

週が明けた。

その日、駅には先客がいた。武士だ。いつもは気付かなかったが、学校に間に合う電車の時刻などが知れている。意識すれば会う可能性のほうが高くなる。

武士は、何となく二葉と顔をあわせるのが気まずかった。だが、由樹以上の関わりを持ったことに、言い知れぬ優越感が気分を良くし

ている。

二葉は武士に気付いたが、一瞥しただけで改札を抜けた。いつもの電車は間もなくやってくる。乗り込んだところに、武士も続いた。駅を経るごとに、同じ学校に通う生徒は増えていく。二葉は自分と関わりたくないのだろうと思って武士は背を向け、偶然そばに立っている風を装った。

ラッシュは増し、自然と二葉との距離は離れていく。武士はいつもながらこの混雑には辟易してくる。幸い頭ひとつ分突き出ているため、息苦しくはない。だが、女性はみな、男の背や胸に埋もれてきついだろつなと想像する。二葉とて、例外でない。

まもなく目的の駅につく頃、二葉の隣にも同じ制服が並ぶのが見えた。赤いサテンのリボン。一年生だ。が、彼女の様子は少し妙だった。懸命に身体をよじったり、その場から離れようとしているのだ。だが、鞆を持ち替えることさえできないような混雑で、女生徒は成す術も無い。武士は、一人の男が彼女の背にはりつくように立っているのを見て、はっとなった。

痴漢だ。

だが、武士も身動きができないし、第一、男が何かしているかどうかは見えない。間違いかもしれないと思うと、下手に声をあげるのも憚られる。

と、そのとき。

二葉の肩と腕が、女生徒と男の間に割り込むように入り込んだ。後ろの男は、そのまま動かないが、二葉が女生徒の背に手をまわしたことで、行為の抑止となったことは明らかだ。まもなく学校の最寄駅に着き、武士も二葉らの後から下車した。混雑のため降りるのが精一杯で、痴漢らしき男を見ることがも睨むこともできなかった。

ホームでは、二葉が女生徒を支えるようにして、待合所のベンチに腰掛けている。女生徒は俯いて泣いているように見える。

「大丈夫か？」

武士が声をかけると、二葉は鞆から財布を取り出した。

「悪いけど、温かい飲み物を買ってきてくれる？」

「わかった。」

近くの自販機で何にしようか迷った瞬間、武士は雷に打たれたかのようにビクツとした。

二葉は今、口をきかなかったか？

学校では何があるうと口をきかず、沈黙を守った彼女が、今、確かにしゃべった。

二葉が託した黒い折りたたみ財布を開け、武士は眼を疑った。札はおろか、百円玉が四枚しか入っていない。

ふと、この前の夜を思い出した。一番安いバーガー一つを店の片隅で食べていた二葉。この財布の中身も、偶然ではないのだろう。お小遣いがピンチ、なんて状況もピンとこない。

武士は自分の財布を出し、ホットのレモンティーを買った。とても、二葉の財布から金を出す気にはなれなかったからだ。

財布とともに、飲み物を二葉に手渡す。女生徒は温かい缶を手にとると、さらに肩を震わせはじめた。

「・・・誰か呼ぶ？」

すると、女生徒は激しく首を振った。二葉は彼女の肩をさすりながら武士の方を見た。

「彼女が落ち着くまで、もう少しここにいろわ。」

「俺に出来ることはある？」

「いいえ、大丈夫。」

「じゃあ、学校に遅刻の連絡をしておくよ。みんな、心配するし。」

「ええ。・・・あなた、名前は？」

女生徒は、震える声で小さく答えた。

「Aの嘉納・・・」

武士は、思わず唇を噛んだ。よりによって、あの嫌味な嘉納の妹とは。

しかし、去ろうとする武士を、二葉は呼び止めた。

「橘君。」

ちゃんと、自分を認識しているのではないか。なら、初めから無視などしないでほしい。

二葉は武士の下へ小走りに近寄った。

「彼女のこと、・・・見てた？」

「電車で？・・・確信持てなかったけど、やっぱり痴漢？」

「ええ。私も気付くの遅くて。」

「混んでて、俺なんか立ってるだけで精一杯だった。遠野は・・・えらいよ。」

「学校には言わないでほしいの。彼女、わかるでしょ？強気で痴漢をつかまえられるタイプじゃないわ。例え私が痴漢の手をつかまえたって、あれでは無理よ。私がかわりに訴えるわけにいかないし。誰にも知られたくないんじゃないかな。」

「わかった。遅刻の理由は、『具合が悪くて駅で休んでる』ってことにしておく。」

「お願い。」

二葉がこんなに普通に話すなんて、不思議な気持ちだ。ここにいる二葉は、間違いなく今朝までの人を寄せ付けない二葉だ。なのに、今はまるで別人のようだ。

武士の心は弾んだ。はやく由樹にこのことを知らせてやりたいと思った。二葉はいい奴で、きつと今までのことも本心でやっていたのではないと、教えてあげたかった。由樹は喜ぶはずだ。

ただ。

気になるのは、助けた女生徒が嘉納の妹だったこと。妹がいて、可愛がつてるという噂をきいたことがあった。嘉納がどんな反応を見せるか、まったく予測がつかない。

駅を何度も振り返りながら、武士はバスに乗った。そして、再び二葉が口を開いてくれることを強く願った。

嘉納の妹は三十分ほどで落ち着きを取り戻し、二葉とともに学校へ向かった。

とにかく痴漢に遭ったということを誰にも知られたくないと繰り返し返した。その気持ちは二葉にもわかる。男の手をつかんで、公衆の面前で「痴漢だ」と大声をあげる度胸は二葉にもないし、羞恥心のほうが先にたつ。

「私も、さっきの彼も絶対誰にも言わないから安心して。」

「・・・あの人、お知り合いですか。」

「ええ。・・・信頼していいと思う。」

あの由樹の親友で、心配りのできる男だ。もし見込み違いだとしたら、武士をターゲットにしてもいい。それくらいの自信がある。

「迷惑かけて、すみませんでした。いつもは兄と一緒に、こんなことなかったんですけど。」

二葉は、その言葉でこの女生徒があの子の嘉納の妹だということを確認した。二葉は名前をしつこく尋ねられたが、やんわりと断った。どうせいつかはばれるのだろうが、今である必要はない。

(私、何やってんだろ。)

成り行きとはいえ、自分の使命とかけ離れたことをしてしまった。もう少しで不登校になろうとしていたのに、武士と口まできいてしまった。

このことを、由樹が知るだろうか。

知るだろう。武士は由樹に話すだろう。

知られたくない。

自分のこういう姿を、由樹に知られたくない。

心を、探られたくない。

学校に着いた二葉らを昇降口で出迎えたのは嘉納だった。

武士の話が担任から嘉納に伝わったのだ。授業中だということに、ずっとこの風が通る中待っていたというのか。

嘉納は、妹が二葉と一緒にだということに不安を隠せなかったのだ。

「茉莉！」

「・・・お兄ちゃん。」

嘉納は、二葉から引き離すように、妹の肩を抱いた。

「具合が悪いって？」

「・・・もう平気。授業でるから。」

「無理しなくていいよ。家に電話して迎えに来てもらおうか。」

「本当に平気。・・・大丈夫だから。」

必死で言い訳をする茉莉が、救いを求めるように二葉の方を見やっ
た。

嘉納は二葉を一瞥したが、すぐに目をそらせた。

「あのね、あの方に介抱していただいたの。お兄ちゃんと同じ学年
でしょ？」

嘉納は何と返事をしていいかわからない。まさか礼など言うこと
もできはしない。

二葉とて、嘉納と口を利く気など到底なく、そのまま踵を返した。
もう、茉莉を心配することなどない。茉莉が背に向けて何か言っ
ているが、振り向くことはしなかった。今後、茉莉と顔をあわせても
口を開くつもりはないのだから、下手に関わってはならない。そう
でなければ、嘉納自身いらぬ心配をするだろう。

教室では、クラス中がすべてを承知済みといった雰囲気、授業
担当教師も二葉を優しく迎え入れた。

居心地が悪い。

いつも針の筈みたいな状況を自ら招き、それに慣れきっていた。
だから、こんな暖かな場所はむずがゆい。

冷たい光を宿した眼差しを作り、席に着いた。

武士が大げさにいいふらしたとは思っていない。ただ、担任や授
業担当に話していた内容が口から口へと伝わっただけなのだろう。
しかも、普段絶対に口を開かなかった謎の転校生の思わぬ快進撃に
興味津々だったと推測できる。

武士は、痴漢の件以外はすべて由樹に報告していた。ただ、嬉し
かったからだ。由樹の親切をことごとく散らしていたが、それは二
葉の本心ではなく、何らかの事情があつてのことだと確信が持てた
からだ。

だが、由樹はそれをネタに二葉に近づくことはなかった。というより、近づく理由がない。人を寄せ付けられない少女が、本当は温かな心を持つていた。喜ばしいことかもしれないが、それは、由樹を動かす原動力にはならない。

なぜ、こんなに心が冷めているのか由樹自身、不思議だった。嬉嬉とする武士の表情が、ますます由樹を冷静にさせていく。

複雑なインテグラルの公式をノートに書き写しながら、自己分析をしてみる。

所詮、自分より不幸な人間に妙に同情を寄せてしまう、その実、人の不幸を密やかな愉しみにしている人間だったのか。

ただ、優しい自分に酔っていたかっただけなのか。そうだ。

誰にも心を開かない少女が、自分にだけ心を開いたから、価値があり、唇が震えるほど嬉しかったのだ。誰にでも優しい少女の優しさなど、別にありがたくはない。

だから、涼子には全く反応しなかったのだ。

そこまで考えて、由樹は苦笑した。

やっと、二葉に固執する理由がわかったからだ。

(そうだ、これは同情でも愛情でもなんでもない。ただの優越感だったんだ。)

同情とか愛情とかでくくられるのが嫌だった。そんな垢にまみれた言葉で自分の気持ちを語られるのが嫌だった。それ以上の高尚なものとして捕らえたかったのだ。

(思いついていたのは俺のほうか・・・)
がっかりした。

うなだれた先に見えた己の本性がたまらなかった。

黒板の前に立つ二葉が、積分を解いている。

なぜか、その姿が今日は勇壮に見える。

(本当は、俺の同情なんかいらぬ、優等生だったんじゃないか。)
謎の転校生を気取っても、その化けの皮がはがれたのだ。

その日の放課後は、由樹たちが教室掃除だった。さりげなく雑巾がけを避ける女子の群れに、涼子もいた。頼まれれば嫌とは言わない。だが、自ら選択権を行使している。

汚れたビニルコーティングの床にひざをつき、由樹は渾身の力をこめて、見せつけるように雑巾がけをした。

なぜか悔しかったのだ。

二葉の善行が、自分を裏切ったように思う。二葉は決して特別なんかじゃなく、雑巾がけを真面目にやることなんか自分にも当たり前に行えることなのだと言いつけられた。聞かせたかった。

由樹にはわからない。

なぜ、こんなにも腹立たしいか。

雑巾の水を取替えに行き、乱暴にバケツを水場に放る由樹を、階段掃除でやはり水を取替えに来た武士が、怪訝そうに声をかけた。

「何、いらだってるんだよ？」

「・・・別に。」

「朝からずっと不機嫌だろ？らしくない。」

由樹の目が、武士を刺すような目つきになった。

「なんだよ、らしくないって？」

武士も、さすがに尋常でないと察した。こんな由樹を初めて見たといつてもいい。

「・・・いや。俺の思い違いだった。悪い。」

武士がバケツを持っていく先には、二葉がいる。また、ああして長い髪を床につけながら痣だらけの手で掃除をしているのか。

「橘！」

驚いて振り向く武士に、由樹は言った。

「ちゃんと、掃除してるのか、遠野？」

「ああ。」

「また、雑巾がけを？」

「まあな。他の女どもは要領いいから。雑巾がけが一番手があるのに。」

「じゃあ、お前がかばってやれよ。」

「・・・？なんで。」

「口、利いたんだろ？櫓にしかできないことだろうが。」

武士は、一瞬意味がよくわからなかったが、由樹が何に怒っているのか納得した気がした。

そうだ、あれほど気をかけてきた由樹にではなく、単なる掃除の班長面だけしてた武士にだけ口を利いたことが面白くないのだ。

「もう、口なんか開かないと思うよ。今朝はやむを得ずって感じだった。」

「・・・そうか？」

「あたりまえだろ。」

なだめ落ち着かせるような優しい口調で言い、武士は由樹から離れた。

由樹は神様みたいなところがあつたが、やっぱり人間なんだなと思ひほつとした。

だが、武士には、由樹の思惑を押し量りきることなどできはしない。由樹が心底苛立っていることなどわかりはしない。

部活でも闇雲にシユートを打つ由樹を、武士が追った。

「まだ怒ってんのか？」

「何も怒ってないよ。」

「今朝のことなら、誤解だぜ？」

「誤解？」

「遠野が俺にだけ口利いたってやつ。」

「誤解するようなことなんかないだろ。」

「じゃあ何で荒れてるんだよ？」

「荒れてないし、怒ってもいない。放っておいてくれよ！」

(荒れてるじゃん・・・)

やはり、わからない。

冷静に自己分析してみたが、それだけではない気もする。だが、それが何なのかわからない。由樹は、自分で自分がわからない。

家に帰ると、二葉が残したペットボトルを取り出し、凝視した。

これを喜んでいた自分が馬鹿らしいと思った。

そして、その空の容器をゴミ箱に投げつけた。

少しは気が治まるかと思ったが、かえって虚しくなった。世の中
のすべてを引きちぎりたいと思った。自分の一部を引きちぎりたい
と思った。

（俺は変だ。遠野がいいことをしたのを、こんなにも許せない・・・
！）

二葉の秘密を自分だけが知っている優越感。自分だけが二葉を救
える可能性を担っているのだという思い上がり。

なにもかもが滑稽だ。

次の日。

由樹は治まらない気持ちを引きずりながら教室に入った。二葉の
姿はまだない。

間もなくショートホームルームが始まるつかという時間に、二葉
は教室に入った。だが、その顔を見た瞬間、クラス中が水を打った
ように静まり返った。

頬が腫れている。

虫歯かとも思えるが、青あざもあるため殴られたのではと推測で
きる。

すぐに担任が現れたため、そのときは陰口をたたく暇がなかったが、
ショートホームルームが終わるや否や、至る所で囁きが溢れた。

「見た？ひどいよね、あれ。」

「相当の力で殴らないと、ああはならねえよ。」

「親に虐待されているのかしら？」

「案外、暴力団の彼氏でもいるんじゃないの？」

昨日の一件のせいか、クラスメイトの囁きにはただの好奇心だけ
ではない思いやりが覗く。

由樹は、この状況をほくそ笑んでいる自分に気付いた。そうだ、

二葉はこうでなければならぬ。凡人には想像もつかない環境で人知れず苦境に喘いでいれればいい。そして、それを自分だけが救い出せるのだ。

ヒーロー気取りの男は、その実サディスティックなエゴイストだ。だが、由樹はそのことにはまだ気付いていない。ただ、他人の不幸に同調している自分が厭らしいと思う。しかし、沸いては浮上していく胸の高まりを抑えることもできない。

武士は、一人考え込む由樹の傍にただ付き添っていた。他の連中と興味本位に話す気には到底なれないし、このことを一番気にかけているのが由樹だと思っている。由樹が動き出しそうになったら、自分がまず動かねばなるまい。間違っても由樹が二葉に公衆の面前で優しい言葉などかけてはならない。それは、二葉のダメージを大きくし、それが更に由樹を引きずり込む。

武士には、二葉は危険な存在に思えてならない。冷めた毒で由樹をじわじわと貶めていくのではないかと思うと気が気でない。真の悪党なら気が楽だ。だが、いまやそうではないから性質が悪い。

一時間が終了すると、不意に二葉の姿が見えなくなった。由樹はつられるように席を立ち、教室前の広い廊下を見渡した。だが、二葉の姿は無い。

そのまま席に戻るのも変な気がして屋上へ向かうことにした。別に、二葉がいたからといって何をしようという当てもない。これ以上惨めな自分を知りたくもない。だが、どうしても放っておけない。(俺は、そんなに白馬の王子を気取りたいのか?)

自問自答しながらも、身体は動いていく。

屋上は立ち入り禁止になっているため、三階から上へ上る階段は誰も立ち入らない。掃除の区域からはずされ、ほこりだらけだ。だからこそ、二葉がいつも一人になる場所だと由樹は確信していた。その日、二葉は屋上には出ず、階段に座り込み、紅い頬を押さえて呻いていた。

「遠野。」

二葉の息遣いが、二人の間にはつきりと響いた。由樹が近づこうとすると二葉は弾かれたように立ち上がり、その場から逃げ出そうとした。

「待てよ！」

思わず二葉の腕を強くつかみ、はっとなった。ひどい痣があったことを、思い出したからだ。

長い髪の毛から、生々しい顔の一部が覗く。

腕を放したが、二葉はそれ以上抵抗はしなかった。

「冷やしたほうがいいんじゃないのか？」

二葉は眉根をひそめたまま、首をふる。

「我慢することないだろう？保健室行けば、病院へつれていってくれる。手当てした方がいい。」

二葉は由樹の手から逃れようと激しく身をよじった。

「どうして！保健室が嫌なのか？病院が嫌なのか？」

「そうよ！」

はっとなるまで、少しの時間が必要だった。

二葉がしゃべった。

初めて、由樹に。

由樹は改めて耳を疑った。

だが、二葉自身、ここで口を開くつもりはなかった。昨日の今日で、もう二度と話すまいと固く決意していたのに。盗聴器も気になるが、この辺で徹底的に由樹の手を振りほどかなければ取り返しのつかないことになる。由樹をターゲットにするつもりがないのなら、もう絶対、自分に関わらせてはいけない。

「私がそんなに憐れに見える？こんな痣が、そんなに同情に値するの？」

二葉は、腕をまくり、由樹の目の前にその痣だらけの部分突き出した。

思わず息を呑む。このあいだより、ひどくなっていないか？黒に近い紫が、この腕を蝕み、いつか腐ってしまうのではないかと思わ

せる。

「当たり前だろ？異常だよ、ひどすぎる！」

二葉は、眉を吊り上げた。

「あなたは、本当におめでたいわ。不幸なんて知らないで育ってきたのね。世の中にはね、比べ物にならないくらい過酷な運命を背負って生きている幼い子がたくさんいるのよ。地べたで雨風にさらされて眠り、ごみしか食べられないような子供がね。それでも彼らは同情されることなんか欲していない。自分の境遇を受け止め、生きるために運命と戦っている！」

由樹は、圧倒された。

力強い口調。強い意志。いまだかつて、こんな魂の叫びを聞いたことなどあつただらうか。

ヘドロが渦巻くような胸中に冷水が浴びせられた気がした。

「私は、自分の幸せを知っている。あなたは知らないでしょう？今ある幸せが、周りにいる沢山の人たちの努力で作りに出されているなんて、考えたことも無いでしょう！」

ゆるぎない力を持つ瞳。

他の女子が絶対に持たない、芯の強さを感じる。二葉が負っているものを、由樹はまったく知らない。きつと、自分に想像もつかないような人生を歩んでいるのではないか。安っぽい同情など踏みにじりたくなるほどの過酷な日常と戦っているのではないだろうか。

二葉は救い出してくれる王子様など欲してはいない。拒絶されて当たり前ではないか。

二葉の不幸を望んだ自分を許せない。

二葉の気を引いて「特別」になろうとしていた自分を許せない。

そのとき、二葉の口から一筋の血が流れてきているのに気付いた。口の中の傷が開いたのだらう。二葉がそれを手の甲で無造作に拭き、口のまわりが赤く汚れた。

それを、見過ごせというのか。

ほっつっておけというのか。

ヒーロー気取りで手を出すなというのか。

(ちがう、そんなんじゃない。)

ただ、理屈なしに心が動く。その心情を否定なんかつけないでほしい。同情とか、愛情とか、そんな言葉で片付けられないで欲しい。

由樹は腕をのばすと、二葉の肩を力強く自分の下へと引き寄せた。

第2部：揺れる心

由樹は、二葉の肩を引き寄せた腕とは反対の手で、ポケットの中のハンカチを探り出し、二葉の口元を押さえた。

驚いたのは二葉だった。

由樹の顔をこんな間近で見ることになるとは。

「俺は、平和ボケした幸せすぎる人間だよ。だけど、見てみぬふりをしろなんて言うのも結構酷だぜ。」

「……。」

由樹の表情は苦しげだ。

二葉に由樹の気持ちはまったくわからない。由樹が、今まで感じることのなかった自己嫌悪に陥っているなど想像もできない。

ただ、この感覚はなんだろう。

くらくらする。

息ができない。

今、自分は由樹と何の話をしていたのだろうか。

思い出せない。

「口利くなよ。傷が開いてるんだから。」

由樹の眉は濃い。理屈で無く、とにかく顔全体が整っている。非の打ち所がないというのは、こういうことだろう。顔のいい男は得だ。こんなに接近されることを、生理的に受け付けられない相手だっている。そういう意味でも、由樹は人を恐れることを知らないのだろう。

外界からの冷気が漂う階段では、由樹の体温が制服越しに伝わってくる。

(このままではいけない……)

二葉は由樹のハンカチを自分の手で支えた。こうすれば、由樹が離れるとふんだからだ。抵抗より、こっちのほうが効果的だろう。

案の定、由樹は自分の手を離し、二葉から一歩引いた。

きっと多くの女子が、この事実を知ればうらやましがらるだろう。いや、嫉妬するだろう。傘のことも、咳の件も同じだ。だが、由樹を惹きつけているのは腕の痣がすべてなのだ。そんな事実さえ由樹を想う女子にはいい「情報」になる。そして、由樹を惹きつけるためなら多少の傷ぐらい負つてもいいと考えるだろう。

二葉は、自分でも気付かぬうちに由樹に気を遣いすぎていた。それが、誰よりも二葉自身を傷つけることをわかっていながら。

二葉の目に、再び冷酷で荒んだ影が戻った。

「あなたのような人を、おせっかいというのよ。」

「そうだろうな。」

「わかっているのなら、私に二度と関わらないで。」

「関わろうと思つて関わつてゐるわけじゃない。」

「なら言い方を変えるわ。私を可哀想だとか、憐れだとか思わないで。」

「これ見よがしな傷を見せられても、傍観者になれというのか。」
「そうよ。幸せの塊みたいな人に同情なんかされたくない。同情なんて言葉、大嫌い。他人に何がわかるというの。私が背負つた運命なんか想像もつかなくせに、容易く情なんて寄せて欲しくないわ！」

階段を転がるように、二葉は激しい足音とともに姿を消した。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴っている。

「いったい、二葉は何を抱えているのか。」

最後の最後で、気になるセリフを残して去つていくなんて意地悪だ。後ろ髪引かれてしまふではないか。

時間に追われるシンデレラのように、二葉は階段を駆け下りた。

自分は、学校に慣れすぎてしまっただろうか。そうだ、こんなに人から情をかけられ、情を移してしまうなんて、今までなかった。

武士といい、由樹といい、人が好すぎる。

黒板をたたくチョークの音。

白いノートを埋めていく黒い知識。

まだ見えぬ未来。

(私には、似合わない場所だ。)

様々な希望や夢を追い求める若者の姿がここにはある。純粹で、まだ穢れを知らない。そんな彼らを望んで傷つけねばならない。それが、二葉に許された唯一つの「良心」の表現だからだ。

優しく、楽しく学校生活を送ったつていいのかもしれない。だが、そうしたら誰をもターゲットにできなくなる。次に来るのはセシリアの死だ。セシリアは、研究材料というより、二葉を意のままに動かすための人質だ。

そして、二葉は実際何十人もこの世から姿を消す手助けをしてきた。死へ旅立つ人間を、この手で選び出してきたのだ。そんな罪人が、人生を楽しむことなど許されるわけがない。

笑ってはいけない。

喜びを感じてはいけない。

悲しみ、泣くことさえ贅沢だ。

人に好かれ、好くことも許されない。

人に優しくされる資格もない。

おいしいものを食べたり、柔らかい布団にくるまって眠ることも許されない。

セシリアを助け出せたら、アルコール漬けにしてもらおうと思う。遺伝子操作された人造人間が、どんな細胞を連ねていたのかいい見本になるだろう。

(そうだ、私は人間じゃないんだ・・・)

ようやく、思い出した。己の身の程を。

二葉は、午後、教室に戻らなかった。

何度も空席を目で確認する由樹の様子を、涼子も武士も落ち着かない心持で見守っていた。

蟻地獄に引きずり込まれる様に、由樹が平常心を失っていくのが怖い。

涼子は、さっきの由樹と二葉の一件をすべて見ていた。どうして

も気になって仕方が無かったからだ。階段での二人の会話から、二葉に痣があることを知った。それも、由樹が同情せずにはいられないような。

由樹が二葉に固執する理由が一応わかったが、だからといって安心したり、嫉妬が消えたりすることはなかった。

由樹が二葉の口元を押さえた瞬間、涼子は身体の一部が引きちぎられるような痛みを覚えた。

「髪を切りたい。」
そう思った。

理由などわからない。ただ、この衝撃を何らかの形で外へ表さないといいたたまれない気持ちだったのかもしれない。

由樹は、同情だと思っているのだろう。

二葉が男だったとしても同じことをすると言っただろう。

それは違う、と思う。

涼子がかも同じように同情した男子がいたとしても、それを追いかけて、あんなふうに手当てしたりしない。するとしたら、同情以上の特別な感情があるからだ。

由樹になら、するだろう。

だが、嘉納になら絶対にしない。

武士でも、しないかもしれない。かえって変な誤解をされるのではないかと危惧してしまいそうだからだ。そうだ、由樹の行為は相手に誤解を与えるほどのものだ。

由樹がそれに気付かないのだとしたら、余程鈍感なのか、慈悲深すぎるのか。

だが、涼子には由樹を直接質す勇気がなく、武士に探りを入れることにした。武士は涼子の気持ちを知っている。今更隠すこともない。

放課後、涼子は武士を人気のない自習室へ呼び出した。そして、今日の由樹が二葉に対して行った行動を一部始終話して聞かせた。

「どう、思う？」

「どつって？保科が遠野を好きかどうかってこと？」

「そうよ。・・・橘君に聞くなんて卑怯だと思っっているわよ。でも、我慢できなくて。」

武士は、由樹が二葉を構う理由がわかって少し安堵してはいた。だが、それ以上の気持ちがあるのかといわれると、返事の仕様が無い。昨日、由樹は自分に嫉妬していた。だが、それ以上の確信は何もない。

「・・・少なくとも、保科は否定してた。」

「でも、やりすぎだと思わない？橘君ならどう？そこまでやる？」

「・・・躊躇する。やらないよ。だけど保科ならやりかねない。」

「優しすぎるってこと？」

「ああ。だけどあんまり自覚してないからな。俺も一応釘さしてるけど。」

涼子の困惑した表情が曇る。武士は、気分を変えるように明るく言った。

「遠野って謎だらけじゃん？変な噂もあるし。ミステリアスってやつ？そこに惹かれてるだけだとも思えるけど。」

「・・・そうかしら。」

涼子は全然そう思っていない口調だった。武士は深く息をついた。

「悪いけど、俺、わかんねえ。保科つてもともと女の話しないし。

遠野が男でも同じことしてた・・・気もするし。」

「・・・わかった。ごめん、つき合わせて。」

暗い影の背を向けた涼子の姿に、いつもの快活さは微塵も感じられなかった。今の姿を見たら、涼子に惚れている佃煮にするほどの男子がみな、幻滅するかもしれない。涼子の美しさや聡明さは、その自信に裏打ちされているようなところが多分にある。それを失いま、その魅力さえ失おうとしている。

「英。保科の価値観で自分を計るようなことするなよ。保科の気持ち英になかったとしても、英に価値がないってことじゃないんだからな。」

しかし、その武士の言葉に涼子は激しく反論した。

「理屈ではそうよ！でも私には保科君がすべてなの！保科君に好かれなかったら、私の持っている長所なんて、全然意味がないのよ。保科君に好かれるなら、もつと醜くたって、もつと馬鹿だった方がいいの！保科君が同情してくれるのなら、骨の一本や二本折った方がいいの！全身痣だらけにした方がいいのよ！」

大きな目に一杯涙を溜めている涼子が哀れだと思った。由樹のために、あのお姫様のような涼子がここまで墜ちるのか。

「・・・保科に聞いてみるよ。それで英が満足するなら。」

「いいえ・・・。もう、満足したわ。橘君に聞いてもらったから。自分から止めを刺すまでもないわ。」

涙の粒を、落とさなかった。

涼子は精一杯上を向いていた。

（上を向くと、涙が落ちにくいだけじゃなくて、気持ちも上を向くんだ。）

涼子が去り、武士は硬く両目を閉じた。

涼子の強い想いを由樹は知らないことはないはずだ。だが、それでも二葉へ引きずられていくのだろう。

（バカな奴・・・。）

涼子のどこに不満があるのだろう。

いや、そうではない。不満とは、相手に何か求めるから生まれるものだ。由樹は、もともと涼子に何も求めてさえいない。

（酷だ・・・な。）

涼子にしてやれることはない。人の気持ちをどうにかすることなど出来ない。

由樹の気持ちも。

二葉の気持ちも。

マンションへ戻った二葉を待っていた美鈴の顔は、機嫌がよかった。

「あんたに同情している子、どういう子？」

「・・・普通の男子です。」

「クラス委員じゃないの？号令の声と同じっていう分析がでてい
けど。」

「そうですね、別に、普通です。どっちかっていうと、品の無い
顔立ちで、頭は少しいい程度です。」

「そう？名門校のクラス委員なら、それ相応だと思っていただけ。
」
「本当に賢い子は委員なんかには時間割いてられないから、ほどほど
のおせっかいがやっているみたいです。」

「でも、あんたみたいな平凡な子でもちゃんと男の子の関心を引く
ことができるんだねえ。」

美鈴は、二葉の腫れた頬から顎を驚& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; みに
し、自分の鼻先へ引き寄せた。

「醜いあんたでも、傷で人の同情をちゃんと引けるんなら、利用し
ない手はないね。もっと上等な獲物を探して、そっちの気を引きな
さいよ。まあ、虐待なんて噂がたっても困るけど。」

「・・・わかりました。」

「いい子ね。早めにターゲットを絞ってちょうだい。三学期は短い
のよ。」

隠しカメラがピアスに仕込まれてなくてよかった。そうしたら、
美鈴自身がすぐターゲットを選ぶのだろうが、由樹の姿をごまかす
ことはできない。

ハンカチを返すのを忘れていた。

ダークグレーのタータンチェックのハンカチ。二葉は、なんだか
これが由樹の遺品になりそうで怖くなった。早めに別のターゲット
を差し出さないと、いつか由樹の存在が美鈴にばれそうな気がした。
ハンカチに染みた自分の血を洗濯しながら、二葉は何度も自分の
心に言い聞かせた。

私は罪人。

私は罪人。

私は何人をも死へ追いやった罪人。

私は道具。

私は人の手で作った道具。

私は人間ではない。

私は生きているのではない。壊れて役立たずになっていないだけだ。

私は幸せ。

私は幸せ。

ごみを食べなくてもいい。

雨風にさらされて眠らなくてもいい。

私は十分、幸せ

二葉は唇を引き締め、目の前の鏡に映った自分の顔を凝視した。それは、己の分をわきまえるための、繰り返された儀式でもあった。

一月下旬。

その日のロングホームルームは三年生を送る会の相談だった。

受験本番のシーズンを迎える前の二月中旬に三年生は卒業してしまう。式の前日、下級生が先輩へのお礼をこめて、クラスごとにもてなすという行事だ。

一時間という時間制限もあり、大抵は手作り菓子でのお茶会とかかくし芸とか月並みで終わってしまう。が、今年の由樹たちのクラスは少し違った。先日くじ引きで、迎え入れる三年生のメンバーが決まり、それが大当たりだったからである。

「涼子えらい！」

くじを引いたクラス委員の涼子は得意げにメンバー表を黒板にはりつけた。それは、校内一の美男美女かつ頭脳ぞろいといわれる三年A組の半数だったからだ。三年はクラスを二つに分け、一、二年の十二クラスへ散る。一番憧れの的が多いメンバーが、涼子たちのクラスへ招かれるということだ。

「何をやる？月並みなのは駄目よ。」

「あのクラスはハズレだった、なんて言われないうにしないと。」
クラス中が湧いている。二葉には眩しい若さだ。喧々譁々の話し合いの末、自分たちが出演する学園ドラマを撮り、上映するという話にまとまった。

由樹と涼子が三年A組を訪れ、メンバーの代表と送る会の打ち合わせを行った。三年の代表は元生徒会長の桐嶋だ。日本人の良さを再認識するような引き締まった凛々しい顔立ちで、全国統一東大模試でトップテン入りする頭脳を持つ。

「内容は当日まで内緒？楽しみだな。」

桐嶋の近くを通りかかった樹里も話しに加わった。樹里は桐嶋との恋仲を噂される美少女で、有名私立大への入学が既に決まっている。「私は毎日学校に来ているから、何かあれば私に連絡をしてちょうだい。」

本当に出来る人というのは余裕がある。自分もこうありたい、と思わせる。

撮影にはクラス全員が、協力しあう。だが、クラスメイトのいう「全員」に、二葉は含まれていない。役割分担や配役に「遠野」の文字がないからだ。それに気付いた由樹が反論すると、脚本担当は口を尖らせた。

「だって、気まぐれそうじゃん？協力すると思えないんだよね。そうすると、こっちが尻拭いしなきゃならないわけよ。」

「遠野は協力してくれるよ。」

「まあ、保料が言えばやるかもしれないけど。」
その言葉には、含みがあった。由樹が事あるごとに二葉に関わっていることは、少なからず噂になっている。

眉を歪めた由樹の前に、武士が立った。

「ほら、掃除、真面目だろ？与えられた責任ってというのは果たす柄なんだよ。」

そして、話は予算の方へと移っていった。

ビデオカメラやテープ、編集パソコンは学校のものを貸してもら
えるが、小道具や衣装など、けっこう物入りだ。それに、送る会
は、三年生全員に小さな花束と寄せ書きを贈ることもなっている
ため、やはりお金が必要だ。

「一人五百円かな・・・。全部で二万円。」

「それはきついよ。上映中、お茶とお菓子は出すだろ？一人千円。
絶対。」

だが、その話に反応したのは武士だった。二葉のことを考えたか
らだ。

「そのカンパ、強制？」

「強制にしなかったら、払わない奴でるぜ？そうしたらやってい
けないし、第一不公平だよ。クラスでやるのにさ。」

二葉は出せるのだろうか。それが心配だ。

「だけど、一応個人の経済事情とかあるんじゃないか？」

会計担当は笑った。

「千円出せない奴が、この学校に通えるか？」

「そりゃあ、そうだけど、自由になるお小遣いは別問題だろ？」

「心配すんなよ。変な奴。橘自身が出せないってことじゃないんだ
ろ？」

「・・・違うけど。」

こんな心配を由樹はしない。するのは二葉の財布の中身を見てし
まった武士だけだ。杞憂に終わればいいと思っている。

金銭の徴収の話は次の朝のショートホームルームで出た。一応、
クラスメイトの賛同は得なければならぬ。会計担当二人が明日か
ら金を集めると言っている。

どきどきしながら武士は二葉の様子を伺った。どうするのだろうか。
口をきかなくても金を出すことはできるが、断ることはできない。

払わなければ、更に悪い噂がたつ。そして、それが由樹の関心を
誘い、由樹を引きずり込む。

二葉は、武士の心配どおり、困ったと思っていた。

今まで徴収金というのはあった。だが、大抵それを払う前に不登校になって逃げていたのだ。だが、今回は難しい。

明日いきなり不登校は不自然だし、美鈴に何と言われるかしれない。今日中に何か事件が起きない限り、きつかけがない。

財布の中身は、本当に緊急の場合のためといった感じで、美鈴の気持ち一つで決まる。だが、一月千円を上回るとはまずない。

アルバイトなど美鈴は許さない。二葉に自活されては困るから金が多ければ自由も増える。それを許すわけがない。

ばれたらどんな目に遭うかわからない。二葉の折檻くらいですめばいいが、最悪、セシリアの身に何かが起こる。それが怖い。

拒絶すればいいと思う。嫌われるのが使命なのだから、それで十分だ。

だが。

今回、それがためらわれる。

二葉には、今回の転校が最後になりそうな気がしている。もう、二十歳になるのだから限界ともいえる。年齢が様々な高校もあるが、そういう場所には美鈴が望むような人材はまずいない。

一生懸命クラス一丸となって取り組む姿は眩しい。そして、うらやましい。最後に、二葉もその仲間に入りたいと思った。だから、徴収金にも応えたいと思った。参加したいと強く思った。

昼休み、グラウンドを駆け回る由樹を、レンガ敷きの中庭から見下ろした。周りには沢山の女子がいて、由樹たちを見守っている。羨ましい、と思う。

自分とは違う世界を生きている彼女達を。

なのに、なぜか懐かしさが胸をつく。いつか、夢で見た風景だ。過去の事実と現在と想像が混ざった不思議な感覚。

別に特別な思い出があるわけでも、何でもないので、何度も夢に見る。それが、まさに今日の前に広がる風景なのだ。

その日の昼休みに、涼子は武士に近づいた。

「お願いがあるんだけど。」

「何？」

涼子は辺りを見回し、由樹の姿がないことを確認した。

「今日の放課後にね、遠野さんの撮影をしたいのよ。橘君、撮影二班のリーダーでしょ？私は監督なんだけど、・・・一人じゃ頼みづらくって。」

「保科は撮影一斑のリーダーだよ。あっちの方が日程に余裕があるはずだけど」

「あのね、私は事実上失恋したてなのよ。」

武士は困惑の表情を浮かべた。

「いや、・・・俺の思い違いかもしれないし。」

「そんな慰めはいらないわ。ただ、今は少し離れていたいの。」

「わかったよ。じゃ、一緒に声かけにいこうか。」

「うん。」

幸い、二葉は給水機で水を飲んでいた。

早速声をかけると、長い髪をサラリとたらしこちらを向いた。

「今日の放課後クラス映画の撮影があるんだけど、遠野さんの撮らせて欲しいんだ。」

二葉の表情ははりついたままだ。

そこで、涼子が言葉添えた。

「ワンシーンだけなの。三分でいいから、掃除の後、残ってもらえない？」

由樹と武士は脚本係に、無理やり二葉のための役を作らせていた。

もし二葉が断ったとしても、支障がない程度という条件で。だから、セリフはない。

二葉は、大体の事情は察している。ここで断っても、クラスが困らないことも。涼子や武士を、誰も攻めはしないことも。

だが、今の二葉には妙な学校生活への愛着心が芽生えていた。小六のある日から、ずっと封印してきた気持ちを、最後となるであろう今、噴出することを止められない。

ずっと、何かに打ち込みたいと思っていた。何かに夢中になりた

かった。しかし、それは自分には許されないことだと諦めていた。
だが、今ならいいのではないか？

美鈴だって、これ以上普通の高校生で通じるとは思っていないはずだ。別の手立てを考えるだろう。なら、この最後の学園生活を少しは味わってもいいのではないか。

普通の高校生のように。

普通の高校生として。

「……いいよ。」

「えっ。」

涼子が二葉の声を聞いたのは初めてだった。武士は二度目だが、やはり、息を呑んだ。

「……いいつて、言ったよね？」

涼子の表情が震えている。

「言ったよね？……すごい！」

涼子が二葉の白い手を握った。

「すごい！私、みんなに自慢する！放課後、掃除終わったら教室で待っててね。迎えに来るから。ね？」

一生懸命手を握って無邪気に喜ぶ涼子に、二葉は思わず微笑んでしまった。

武士も、頷いた。

「ありがとう。俺、撮影するんだ。絶対綺麗に撮るよ。」

二葉は、これでよかったのだと自分に言い聞かせるように繰り返した。美鈴だって、何も文句はないだろう。

ターゲットを差し出せば。

(ター……ゲット……)

忘れていた使命。

だが、なるようになる。

今までだってそうだった。

だから今だけは、ほんの少し、忘れない。

忘れて、普通の生徒になってみたい。

放課後。

二葉は制服の後姿から、振り向き、目までのアップを撮っていくというシーンに出る。謎の生徒という、実在の二葉と変わらない設定だ。

画板役が、白い大きな板を斜めに立て、照明係が色温度の低い電球を上から照らす。

人払いをした広い廊下で、二葉はその中央に立った。

「OK。背中向けたまま、ゆっくり五数えて。そしたら、髪が宙を靡く感じで振り向いて。目一杯目力表現して。」

英プロデューサーの注文は細かい。

二葉は、本物の女優になったかのような恍惚感を全身にみなぎらせていた。

面白い、と思う。

タイムキーパーのカウントがはっきりと聞こえる。

「三、二、一、」

武士のビデオが回る。

二葉はゆっくりと深呼吸して数をかぞえ、そして、振り返った。

ファインダーから覗く二葉の表情は、ハツとするほど鋭い。段々とそれに近づくことがためらわれるほどに。

睫毛に囲まれた上がり気味の眼が、こちらを凝視している。

「・・・カット!」

タイムキーパーの掛け声で、ハツと我にかえった。そこへ、由樹たちの撮影班が現れた。

由樹は、二葉のシーン撮りを涼子が武士に頼んだのだと推察した。そして、それはやはり面白くないことだった。だが、それを露骨に表現することなどしない。それが理不尽なことだとわかっているからだ。

武士は、由樹の姿を見つけて少し気まずい思いをした。涼子が頼んだとはいえ、由樹は自分以外の人間が二葉に関わることをあまり望んでいないということに気付いたからだ。

二葉は由樹の姿を見つけ、少し唇を引き締めた。なぜだかはわからない。ただ、そうしないとだらしのない口元を見られてしまうと思っただからだ。

帰り道。

二葉は夜の渋谷に来ていた。

金を得る手段が、これしか思いつかなかったのだ。

風紀の悪いネオンの谷間を彷徨う。目的の店がどこにあるのか見当もつかない。

この街では翔架学園の制服は殊更のように目立つ。そして、珍しさからターゲットにもなりやすい。

「彼女、お金欲しいんでしょ？」

自分と寸分たがわぬ年齢の男が声をかけてきた。二葉には、その男の顔は人間に見えない。だが、これはいいチャンスだ。

「ええ、そうよ。」

「ついておいでよ。即金で払うから。」

くだらない。こんな男についていく女がいるから、女は泣きを見る。

「いいえ、店を知りたいだけなの。」

「店？」

「そうよ。女子高生関連の品を高く買ってくれる店。」

「ああ、そういうのね。」

だが、男はとにかくついて来いとしか言わないため、二葉はうまく誤魔化して逃げた。あんなのにひっかかっては、目的を遂げられない。

厳しい法規制のためか、その種の店はなかなか見つからない。世の中では「時代遅れ」の産物のようにもいわれているが、マスコミから八年間も遮断されている二葉の頭の中の流行や風俗は、八年前でストップしている。とにかく、片っ端から意味不明な看板の店に入っては出て、二時間後にやっとそれらしきものを見つけた。中層ビルの二階。ガラスの窓があるものの、ビニルのシートが貼り付け

られ、その役割は果たしていない。

入り口はミラーガラスで、二葉がその前に立った途端、中から怪しげな若い男が出てきた。男は二葉を上から下まで舐めるように見た。まず手に入ることの無い天下の翔架学園の制服。

男の目がいやらしく光った。

「で、何を売りたいのかな？」

二葉は、鞆から白いソックスを取り出した。校章が紺色の糸で刺繍された、まぎれもない翔架学園生でなければ絶対に手に入れられない一品だ。

「今、君がはいているものの方が高く売れるよ。」

その物言いに、二葉は鳥肌が立つほどの嫌悪感を覚えた。こんなことも、今回きりだ。そう自分に言い聞かせ、二葉は、その場でソックスを脱いだ。

店を出たとき、二葉は千円札一枚を手にしていった。だが、それだけにするため、二葉は予想外のものまで売らねばならなかった。唾液をとられたのだ。

吐き気がする。

見知らぬ男に自分の一部が売られるというおぞましさ。

何という荒んだ街。

何という爛れた空。

こんなに惨めな気分になるとは思わなかった。こんなに情けなくなると思わなかった。

なり振り構わず走って、走って、道がわからなくなった。

でも、そんなことは怖くも無い。

この屈辱に勝る感情など、ないに等しい。

(でも、これしか思いつかなかった。)

てっとりばやく、男に手を触れさせること無く、金を得る方法を。

(・・・思いつかなかったんだもん。)

下顎が震えて、走れなくなった。

人通りの無い真つ暗な道で、二葉は手の甲で目頭を押さえてうなだれた。

後悔はしない。
したくない。

悪いことはできないものだ。

二葉が店に出入りした姿を、見ていたクラスメイトがいた。彼氏と一緒にあんなところをうろついていたという彼女も彼女だが、当然、二葉の件だけが一人歩きしている。

「・・・まさか。」

鼻先で笑った由樹に、武士は首を振った。

「本当らしい。デマでこんな話は飛ばないだろ。ま、先生にばれなきやいいけどな。」

由樹は口を開いたが、返す言葉が出ない。

武士は、この話が本当だということを誰よりも確信している。二葉が財布の中身を憂いてやった可能性があまりにも高い。

(やっぱ、送る会の金・・・だろうな。)

由樹にその話をすべきだろうか。迷っていると、朝のショートホームルームが始まった。

ぎりぎりで二葉が教室に入るなり、一気に空気が凍りついた。

怪訝で、異物を見るかのような視線。

「じゃあ、昨日言っておいたとおり、送る会のお金を徴収します。

会計班が回るので、千円出しておいてください。」

会計および買出し班は八人。二人一組で受け取りとチェックをしていく。四手に別れているため、手際よく進む。

二葉は、そわそわしながら自分の番を待った。なぜだか、落ち着かない。しかし、それはワクワクする感覚に近い。

二葉はまだ知らない。

自分がブルセラシヨップで金銭を得たことがクラス中の話題になっているということ。

とうとう二葉の番になった。

だが、そこへ来た会計班の一人、嘉納が、二葉の用意した千円札を見るなり冷たく言い放った。

「あ、そういう汚いお金は三年も喜ばないと思うから、いらないよ。」

「!？」

驚いて目を見開いた。しかし、周りも同じくらい固唾を呑んでその様子に注目している。

座っている二葉を見下ろして、嘉納は続けた。

「身に覚えあるんだろ？うちみたいな学校の生徒がそういう店に入りするっていうのはまずいんじゃないの？俺ら、そういうの軽蔑するんだ。」

二葉の身体は凍りついた。

昨日の今日で、なぜばれているのだ。

頭の中が熱くなる。

目の前がぐらぐらする。

息が上がる。

喉がひつつきそうで、でも、顎が動かない。

スカートの襷を、ぎゅっと握り締めた。

こんなところを、見られたくない。

こんなことを知られたくない。

誰でもない、由樹だけには！

クラス中の視線を集め、二葉は全身が石になってしまえばいいと思った。今すぐ、地中深く沈んでしまいたいと思った。

二葉の机から、拒絶された千円札が床に舞い落ち、その瞬間、二葉は弾かれたように立ち上がり、教室を走り出て行った。

武士は、気管の詰まる思いがした。二葉の経済事情を思えば、同情せざるを得ないというのに。

その騒動はすぐに一時間目の教科担当が入室したことで抑えられた。

武士は床に落ちた千円札を拾い、二葉の机中の奥深くに入れておいてやった。これが、二葉にとってどんなに貴重な金なのか痛いほどわかっていいるからだ。

武士は、由樹にだけは本当のことを知らせておくべきではないかと思った。由樹がこんなことで二葉を軽蔑するようになるのは筋違いというものだ。二葉に近づいて欲しくないと思いながら、矛盾している。

現国の時間。武士は、ノートが一番後ろを破いて、由樹に二葉の財布事情を走り書きで綴った。そして、教師の目を盗んで、由樹まで回してもらった。

休み時間になると、由樹が武士に声をかけた。

「読んだよ。」

「・・・ああ。」

「俺、遠野の居場所に心当たりあるから、今から行ってくる。もしかしたら次の時間戻らないかもしれないから、そのときはうまく言っておいてくれよ。」

「授業をさぼる気か？」

「戻ってきたとは思っているよ。だけど、わからないから。」

武士の目が深刻な光を帯びた。

「みんな事情を知っているんだ。噂になるぜ？」

すると、由樹はそんなことは構わないという風に笑った。

「行ってくる。」

他に、二葉を心配している者はいない。涼子だって、怪しいものには近寄らないといった感じだ。

二葉が憐れだと思った。だが、積極的な行動に出ようとは思わない。武士だって十分二葉に同情しているのに、この由樹との差は何なのだろう。

由樹は、いつもどおり屋上へ行った。

空調機や給水タンク、パイプのはりめぐらされたその向こうに、フェンスから空を眺めるように立っている二葉を見つけた。

二葉は、前を向いている。

唇を硬く結んでいる。

しかし、その頬は涙の跡で光っている。

声を決してあげず、口を開かず、涙だけを零すその様子が、由樹には大人に見えた。

ああして、今までも沢山のつらいことを乗り越えてきたのだろうか。

二葉の姿に、由樹の心までが張り裂けそうになった。

こんなに離れているのに、その隔たりを超えて同じ空気の振動を共有している気がする。

一緒に泣いてやりたい。

それを、ヒーロー気取りのエゴイズムだというなら、それでもいい。

同情だというなら、それでもいい。

人の不幸を喜ぶサディストだというなら、言えばいい。

今あるこの気持ちに、嘘はない。

ただ、ストレートに動く心を、否定したくない。

声をかけることが憚られ、由樹はずっと二葉を遠くから見ていた。何も出来はしないが、これでいいのだろう。

二葉が、好き好んでそんな店に入ったとは思っていない。武士の言うような事情があるなら、きつと追い詰められてどうにもならず、最後の手段をとったのだと信じたい。

そうだ。

もし罪悪感を持っていないのなら、他人がどう言おうと、意に介さないはずだからだ。これだけ傷ついているのは、その行為を心の中で否定しているからではないのか。

一時間経ち、二時間が経つ。

二葉はまだ、微動だにせずフェンスに指をかけ、空を仰いでいる。

二葉は、教室に戻るに帰れないのではないか。あんなことがあって、あんな形で飛び出してしまったのだから。

一緒に戻ろうと言えばいいだろうか。

それしか、きっかけをつかめないのではないだろうか。それとも、本当に戻る気はないのだろうか。

間もなく昼休みになろうかという頃、由樹は意を決して、二葉に近づいた。さつきよりは、周りの空気が和らいでいる。

「遠野」

二葉は、あらかじめ察していた人の気配で、驚くことはなかった。だが、ハンカチを持っていないためにひりひりするほど涙の跡を頬に残しているこんな顔を見られたくはなく、呼びかけには振り向かなかった。

「もう、休み時間になるから、教室に戻らないか。」

二葉は、黙って首を振った。

あの教室に戻るほど、気持ちが悪えたわけではない。

「じゃあ、帰るか？ かばん、持ってきてやるから。」

二葉の目から再び涙が溢れ出した。

こういう時に、思いやりの言葉をかけられるとかえって泣きたくなる。

手で顔を覆う二葉に、由樹は自分のハンカチを差し出した。

二葉は、そういえば由樹にハンカチを返すのを忘れていたと思った。なのに、また借りるわけにはいかない。

「・・・もう少ししたら、行くから。先に行つてて。」

「本当か？」

このまま自殺でもしかねないという疑惑はまだ拭えない。しかし、二葉は大丈夫だからと繰り返す。

「・・・じゃあ、ちょっと待ってて。」

由樹は屋上からいなくなった。

二葉はその間に涙を止めようと、懸命に唇を噛み、奥歯を噛み締めた。

わからなくなった。

今、自分はどうして泣いているのだろうか。なぜ、こんなにも涙が

止まらないのだろう。

由樹は、すぐに戻ってきた。

走ってきたのが一目瞭然だ。

「これ。落ち着くから。」

それは、温かい缶紅茶だった。

嘉納の妹が痴漢に遭って泣いていたとき、二葉も同じことをした。ただの偶然か、それともこういうシチュエーションの常套手段か。だが、そんなことはどうでもいい。

二葉はただ、嬉しかった。

由樹と同じ考えなのが、嬉しかった。

静かに微笑んで、缶を受け取った。

両手で包み込み、

「ありがとう。」

と言った。

由樹は、穏やかに目を細めた。そして、再び屋上から去っていった。

二葉は、由樹の背を見届けると缶に頬を寄せ、瞼を閉じた。

もし、由樹が味方になってくれるのなら、どんな視線にもどんな罵倒にも耐えねば罰が当たるだろう。

由樹が、二葉の行為すべてを知って優しくしてくれるのなら、これほどの慰めはない。

教室に戻ろう、そう思った。

嘉納の言ったことは事実だ。ああいう金は確かに綺麗なものではない。それを三年生が喜ばないというのも事実だ。

ただ、二葉がどういう気持ちであるの店に入り、どんな気持ちで金を受け取ったのか知らない立場の人間からそういうことを言われたから悲しくなったのだ。

誰にもわかるまい。

わかるはずがない。

それは、昼休みの終わる頃に起こった。
まだ二葉は帰ってこないが、戻ると言ったのだから信じて待つしかない。

午後の選択授業に備え、教室内は理系の数学演習をとっている生徒だけが集まっていた。

武士は、由樹と相談し、嘉納の所へ行った。

「さっきの、遠野のことだけど。」

嘉納は、悪びれた様子も無く、挑戦的な目で二人を見る。

「あの金、受け取ってやってくれないか。」

「・・・俺の一存じゃないんだぜ。会計班みんなで結論を出したんだ。」

「遠野が複雑な事情を抱えているの、わかっているだろう？」

「・・・ああ、実験台ってやつ？」

由樹は、眉を吊り上げた。

「そんなことじゃないよ。」

「他にあるのか？親に虐待されてるとか思ってるなら、お門違いだぜ。」

「そんなことはどうでもいい。とにかく、受け取ってくれ。」

そう言った武士に、嘉納はにやついた。

「保科は橘まで丸め込んだのか？おかしなヤツ。」

武士はムツとした。

「俺は誰かの言いなりになったりはしない。」

「よく言う。すでに噂になってるんだぜ。保科の同情菌が橘に伝染したってね。」

由樹の息が止まった。

「同情菌？」

「まんまだろ？」

クスクス笑っているのは、嘉納だけではない。

武士は、由樹の息遣いが変わったのを、はっきりと聞き取った。思わず由樹の前に立ち、さりげなく制する。

なのに、嘉納は調子に乗って更に続けた。

「だけど、遠野の持ち物なんか買う奴も気の毒だよな。本当の人間だかわからないんだぜ？転校ばっかしてて、女子高生と言えるかどうかも危ういしな。」

武士の背を乗り越えて、由樹は憤った。

「お前、遠野に妹を助けてもらってんだろ？よくそんなことが言えるな？」

「冗談だろ。俺からすればいい迷惑だ。妹にはよく言い聞かせたよ、絶対に近づくなとね。妹まで実験台にされたらかなわないからな！」
由樹と嘉納の視線が激しくぶつかるやいなや、由樹の右手が嘉納の襟首をつかみにかかった。

「いったい何の根拠があつて遠野を侮辱する!？」

「俺には情報網がある。保科が想像もつかないほどのな。第一、あんな人間もどきにかれてるなんて、とんだ優等生だぜ！」

嘉納の身体が机と机の間にぶつかつていくのと、女子たちの叫び声はほぼ同時だった。

「保科!!!」

武士が飛び出す。

由樹は完全に理性を失っている。だが、嘉納も受身ではない。互いの腕が、足が、絡まりあつて離れない。

「やめろよ!!」

いつもは気の弱い生徒が、思いがけず二人の間に割つて入り、武士も由樹を後ろから羽交い絞めにした。

「何をしている!」

数学教師が教室に入ってきたため、集っていた生徒たちが散った。だが、由樹と嘉納はまだ相手を噛みつかんばかりの形相で互いを睨み付け合っている。

由樹と嘉納は、教師に腕を取られ、指導室へと連れて行かれることになった。

二葉が教室へ戻ってきたのは、そのときだった。教室から乱れた

服装で連れ出される由樹たちを見た二葉は、何事かと息を呑んだ。

乱れた前髪の奥から二葉の姿を確認した由樹は、安堵の表情をかすかに浮かべた。だが、その唇の端が血で汚れている。

二人が去り、教室は騒然とした。

あの由樹が生活指導を受けるとは、誰が考えていただろう。確かに嘉納は鼻につくが、それをまともに相手にするほど皆、要領は悪くない。

「橘、それから遠野。ちょっと。」

担任と、そして生活指導の教師が入り口から二人を手招いている。

武士は思わず二葉に言っていた。

「遠野、お前、全然関係ないからな。全然悪くないから、責任とか考えるなよ!」

二葉は、唇を噛んだ。

一体どういうことなのだろう。何があったというのか。なぜ、由樹があんなことになってしまったというのか。

武士がわざわざ言ったということは自分が関係していることは間違いない。

担任が武士を連れ、生活指導部の女性教師が二葉を連れ、普段は自習室になっている複数の「カウンセリング室」へと別れた。

「ちょっと涼子、大変よ!」

始業のチャイムがとくに鳴ったというのに、どのクラスも授業が始まらないため不振に思い職員室へ尋ねていった友人が、息咳きって走ってきた。

「どうしたの?」

軽く肩を支えて顔を覗き込むと、彼女は手振りを交えて興奮して話した。

「保科君と嘉納君が殴り合いの喧嘩して、指導室つれていかれたって!」

「ええっ!」

それはクラス中のどよめきだった。涼子は意外さに声がでない。何かの間違いではないかと思う。だって、由樹は空手が使えて強い。それに、暴力を何よりも嫌っていた。

「原因は何だよ？」

脇から男子が口を挟んできた。

「よくわかんない。でも数学演習クラスの子の話だと、遠野っていう転校生が関係してるらしいよ。」

涼子のからだが大げさな震えをした。

（遠野 二葉？）

涼子の杞憂があたったというのか。しかし、なぜ嘉納までが関係するののか。

「それって、三角関係ってやつ？」

キヤーツという黄色い声と共にクラス内は收拾つかないほど盛り上がった。涼子は頬の筋肉を硬直させたまま、呆然と立ちつくした。どうして由樹は二葉にここまでこだわるのか。

ふと廊下を見ると、二葉が歩いているのが見えた。一人ではない、指導部の先生と一緒に。それを見た生徒たちはなおのこと盛り上がってしまった。二人の喧嘩に二葉が関係しているという証明だからだ。

小さくて寒いカウンセリング室で、二葉は俯いたまま白い机を凝視していた。二葉が呼ばれたのは、ブルセラショップへ入ったという噂が本当かどうかの確認のためだった。だから女の教師が担当しているのだろうか。

「ああいうお店は、古着屋さんとはわけが違うのよ？持ち物と一緒に、あなたの価値や性も売っていることになるの。それがどういうことかわかる？」

わかっているから、あんなに悩み、惨めになったのだ。だが、自分の心を引きちぎってでも、どうしても金が欲しかった。学校生活に参加したという証みたいなのが欲しかったのだ。

そんな気持ちで、誰がわかるというのか。

人間ではなく、実験材料として生まれ、なのに人間として十二年も育てられてしまったために、心が分裂している。

人間としての権利をすべて奪われ、なのに人間としての感情だけを徒に利用されている。

奥歯を噛み、すべてを耐えるしかない。この女教師が何と言おうと、返す言葉などない。靴下を売ったのは事実。それを否定するつもりはない。

だが、わかるものか。

人間として生まれ育ったものに。

わかるものか。

指を飾る余力のあるこんな女に、売る服さえない自分のことなど。もし、売る本があつたなら、売った。

売る古着があつたなら、それを売った。

だが、二葉にはそれさえない。あるのは今の学校の制服一そろいと、下着。そして、実験台になるときに着る白衣のみ。寝巻きさえない。

教科書以外の本もない。

売るものさえなかったのだ。

唯一、靴下だけは二足あつた。だが、普通では金にならない。ましてや、千円になどなるわけがない。一足の靴下を、毎日洗わねばならないことを覚悟で、もし乾かなければ濡れたままはくことを承知で、それでも売らねばならなかったのだ。

悔しい。

そのことを、誰かに責められたくない。

この思いまでも、否定されたくない。

「とにかく、明日から三日間、自宅謹慎ですからね。保護者の方に迎えに来ていただかないと。」

「！」

二葉はさすがに青くなった。

美鈴は、できるだけ人前に出ることをさけている。その方が、何

かあった場合に都合がいいからだ。こんな場所に来るとは思わないし、来て欲しくない。

でたらのめの電話番号のおかげで、学校が美鈴に連絡をとることは出来なかった。二葉はそれ幸いと、嘘を言った。

「叔母は夜遅くまで帰ってきません。」

「じゃあ、お父様は？」

「父とは一緒に暮らしていませんので、わかりません。」

「じゃあ、登校謹慎になるわね。おうちで監視できないってことだから。」

(監視なら・・・されてる、いつも。)

二葉がカウンセリング室から出ると、武士が待っていた。そして、二葉の鞆を差し出した。

「俺、鞆係たのまれてさ。ほら、保科と、嘉納の分まで持ってきてるんだぜ。」

苦笑いして、足元の大きなスポーツバッグを膝で支えている。

女教師は片腕を差し伸べ、二葉を促した。

「じゃあ、校長室へいらっしやい。」

「・・・はい。」

二葉は武士に少しだけ頭を下げ、背を向けた。

武士は、二葉が謹慎になると確信していた。由樹が話さずとも、絶対に嘉納が話すだろうし、生徒の中であれだけ噂になっていれば逃れる術もない。武士は、嘉納が語った言葉の中で、事実ではないことを拾い、訂正することに終始した。

二葉が謹慎の言い渡しを受け校長室を出ると、そこには由樹と、そして車椅子の女性が待っていた。

由樹の腫れた口元を見た瞬間、二葉の目から涙が溢れた。

校長が喧嘩の原因を教えてくれた。

申し訳なくって、仕方が無い。

由樹は心痛な面持ちで俯いたままだ。

由樹の母親が車椅子に乗る障害者だとは思ってもみなかった。そ

れは、学校のほとんどの生徒が初めて知った事実だった。恵まれた知性、恵まれた容姿、誰もが羨むその隠された背景に、由樹を妬む気持ちが一気に冷めやるのを誰もが感じていた。

帰り道。神妙な面持ちで母の車椅子を押す由樹を、通夜の参列のように皆黙って見送った。

廊下の片隅で立ちつくす二葉を、今の由樹が見ることはなかった。二葉は、後悔した。

「幸せの塊」なんて言うべきではなかった。自分以外が幸せだと思いがついていたのは、二葉自身ではなかったのか。自分を幸せだなんていいながら、他人の幸せを非難したのは自分が不幸だと言っているのと同じだったのに。

誰だって、何かしら抱えているものなのに。
やっとな、わかった気がする。

なぜ、天から二物も三物も与えられたような由樹が、少しも驕らず、謙虚で、思いやりがあるのか。

二葉は、人目を逃れるようにして学校をあとにした。

高校生らしいことをしたい、なんて考えたのが間違이었다。美鈴の言うとおり、分をわきまえておくべきだったのだ。

もう、学校へ行くべきではないのかもしれない。第一、由樹にあわせる顔がない。

一方、学校を出て、冷たい風にさらされた髪をなでながら、由樹の母は息子に言った。

「泣いていたわね。」

「え？」

「私たちの前に校長室に入っていた女の子。見ていなかった？」

由樹は、下唇を噛んだ。二葉を正視することができなかった。理由はどうあれ、指導を受けたということは屈辱的なことだった。学校の誰をも、見ることはできなかった。鞆を届けてくれた武士にだけは、かろうじて頷いてみせたが、それ以外はまったく欲しかった。

「由樹の傷を見て泣いたのよ。とても、心を痛めている感じだった

わ。」

「……色々、あるみたいだから。」

母の車椅子をゆっくりと押しながら、由樹は曖昧な返事しか返せなかった。今は、二葉のことを心配する気持ちのゆとりが無い。後悔をしているわけではない。ああでもない限り、嘉納はずっと二葉を嘲り続けただろう。

ただ、母への申し訳ないという気持ち。

理由がどうあれ、母は学校へ謝罪し、嘉納の親へも謝罪せねばならなかった。第一、車椅子でここまで来ること自体、大変だということに。

だが、今は誤る言葉さえ見つからない。何といえはいいのだろう。母は由樹を少しも咎めない。それどころか、庇ってくれている。

「お父さんに、なんて言おうかしらね？きつと私と同じで驚くでしょうね。」

「……ちゃんと自分で話すよ。」

「そうね。」

母の声は限りなく優しく、それが切なさを助長した。

放課後。

武士は一人、教室に残っていた。部活をやる気には到底なれないが、帰るのも気が引ける。顧問に休むと伝えようかどうか迷ううち、何となく別のことに思いが移り、時間が経ってしまっていた。

「まだ帰らないの？」

涼子がコート姿で、声をかけた。

「……何となく、動く気がしなくてね。」

「私も。午後は何にもする気になれなかったわ。部活も、さぼっちゃったし。」

「英がサボり？世も末だな。」

武士が笑うと、涼子も笑った。

「それで、何してたと思う？洗面所の掃除よ。何かやりたくなっち

やって。一生懸命磨いてたらあつという間にこんな時間！」
白いアンゴラのピーコートは、涼子の柔らかな雰囲気によく似合う。
だが、今の涼子は傷ついている。一心不乱に掃除をせねばいられないほどに。

薄暗い教室だが、蛍光灯はついていない。

「遠野さんのこと、・・・本当だったの？」

「・・・ああ。」

「・・・意外だわ。」

「理由があつてのことだから。」

「詳しいのね。」

「俺は偶然が重なって、色々見ちゃったからな。」

「でも、だからって許されることではないでしょう？」

武士は頷いた。

「そうかもな、常識的には。でも、それだけじゃ凶れないこともあるみたいだぜ、世の中には。」

「どうということ？正しいことが、正しくないこともあるっていうこと？」

涼子の口調が厳しく冴えた。だが、武士はそれに理路整然と応えてやる気持ちにはなれない。色々考えることがある、というより、果然としていたのだ。何も考えず、神経を休めたい。少しでも脳を動かせば、奥の奥まで探るまで気がすまないであろうことが、何となしにわかつているからかもしれない。

「私は、私の価値観を信じている。だから、それが必ずしも正しいわけじゃないなんて・・・嫌だわ。」

「英は正しいよ。でも、遠野からしてみたら、俺らはすげえ幸せボケの甘ちゃんなのかもしれない。」

涼子の瞳が鈍く光った。

「遠野さんって、何？そんなに過酷な運命を背負ってるっていうの？」

「詳しいことはわからない。けど、」

「私だって、別に安穩と暮らしてるつもりはないわ。そりゃあ、普

通より恵まれてるわよ。でも、相応の努力だつてしてるし、いろいろ悩んでるし、苦しんでるわ。」

「……そうだな。……ごめん。」

「……誤らなくていいのに。……おかしいよ。」

涼子の声がかすかに震えている。どうしたというのだろう。いや、どうかしているに決まってる。

「おかしいよ、橘君も・・保科君も！」

涼子が走り去り、誰もいなくなった教室には、ガラス越しに、外の街路灯のかすかな明かりだけが映し出されていた。

武士自身、本当はシヨックだった。

由樹のあんな姿を見たくなかった。

偶像を壊されて戸惑っていたのは誰よりも自分だとわかっていた。誰にでも、ウィークポイントも、ダークポイントもある。

だが、それが、わかっていない生徒のほうが多い。

名門私立で、多くが恵まれた環境にある彼らに限って、些細な身の回りの出来事を取り立てて、自分だけが不幸なのだと思いがちだ。他の者がみんな大した悩みもなく安穩と暮らしている幸せ者だと疑わない。だから、由樹が決して口にする事のなかった母親の障害のことが、少なくとも彼らに衝撃を与えたのは事実だ。

強くて、凛々しくて、颯爽と歩く由樹が好きで、憧れていた。

だが、その裏にある、本当は誰もが持っている陰を、見てしまった。

これから五日間、由樹と話すことはできない。接触は一切許されない。そして、二葉とも。

武士は、由樹を偶像崇拜していた自分に気付き、苦しく眉根を寄せた。

勝手にイメージを作っていたわけではない。

武士なりに、ずっと由樹のそばで、由樹を誰よりも理解していると自負していた。

なのに、この絶望感。

あの由樹が、嘉納を殴ったときの目を、もう、思い出したくもない。

(でも、あれも保科だ。それを受け入れなければ。)

すっかり暮れた暗い教室の隅で、武士はいつまでも動けずにうなだれていた。

第3部：決意

二葉は、重い足取りでマンションへ戻った。事の顛末を美鈴が盗聴器で聞いていたら何をされるかわからない。謹慎処分など受けて叱られるのではないか。それより、自分の持ち物を売って金銭を得たことの方が、許されないのではないか。

ところが、二葉を迎えた美鈴は出かける支度を完璧に整え、待ちわびた様子だった。

「研究所へ戻るわ。」

美鈴はヒールの低い黒いパンプスに足を入れながら、二葉の腕をつかんだ。

「謹慎ですって？ ちょうどいいわ。一緒に来なさい。」

二葉は鞆を置く間もなく美鈴に引きずられるようにして、地下駐車場にやってきた。今の美鈴は赤いスポーツカーなど乗り回さない。

地味な中古車の助手席に二葉を放り込み、すぐにエンジンをかけた。

美鈴は何も言わないが、引き締められた唇の端が、何かただならぬ雰囲気を漂わせている。二葉が取り付く島も無い。

(まさか、セシリアに何か・・・?)

今までも、こういうことが無かったわけではない。研究所で問題が起ると、必ず美鈴が助っ人に戻る。そしてそれはいつも、研究所員だけではどうにもならない重大事に決まっている。

美鈴にとつて、というより、研究所にとつてセシリアは冷凍保存の成功を賭けた大事な症例だ。他の実験台はすべて失敗に終わっている。セシリアだけが唯一、生き残っている。

夜遅くに、山奥の研究所に着いた。

一年ぶりだろうか。

二葉がここへ来るのは健康診断という名の検証のためだけだ。

厳重な扉を幾重も通り抜け、やっと所内に入る。

美鈴は出迎えた所員に二葉を引き渡した。

「いつもの部屋へ入れておいて。」

「かしこまりました。」

ここでの美鈴は研究主任という立場にあり、研究所員すべてを指揮下に置く。

目元から下をすっぽり隠すマスクで顔がわからない所員に連れられ、いつもの実験室に入れられ、鍵をかけられた。

ここで逆らっても、何もならない。

美鈴にとってセシリアがどんなに大事な存在かわかっていながら、いつ、反旗を翻すかわからないという不安。

間もなく、二葉には栄養ドリンクのような液体が与えられ、ほどなく深い眠りについた。

眠っている間に何が行われているのか、まったくわからない。夢を見ても、覚めたときにはそれさえも覚えていない。

セシリアの夢を見ても。

由樹の夢を、見ても。

週末、美鈴は二葉を連れてマンションへ戻った。どういう経緯かはわからないが、とにかく学校と連絡をとり、家で面倒見るからと登校謹慎を断つたらしい。謹慎になったことについて、美鈴は何も言わなかった。それが、かえって不安を駆り立てる。

月曜の朝、美鈴は静かに言った。

「保科由樹をつれてきなさい。」

二葉は、呼吸を忘れて立ちつくした。

「決めたわ。彼が欲しいの。」

二葉は何も言わず、外へ出た。

二葉が眠っている間、美鈴は研究所の総力を挙げて由樹を調べ上げたのだろう。そして、由樹が類まれなる逸材だと認めたのだ。

いつか、来る日だと思っていた。

由樹を隠しとおせるとは思っていなかったが、できることなら隠しておきたかった。

重い足取りで、少し懐かしい道をたどっていく。だが、校門をくぐる気持ちになれない。久々の登校であることもあるし、とうとうこの日が来てしまったという胸苦しさもある。

今までも、平気だったわけではない。いつも「この日」はそれなりの覚悟と気持ちの準備に体中がしめつけられていた。

二葉は、学校へ続く道を一つ手前で折れ曲がり、広い公園に入り込んだ。

ペンキのはがれかけた雨ざらしのベンチにそっと腰掛け、背からうなだれた。

わからない。

どうすればいいか、わからない。

由樹は週明けであるその日、謹慎が明けて登校した。車椅子の母と早朝に校長室を訪れ、謹慎の解除の申し渡しを受けた。しかし、母が一人でここから帰るのは大変だ。もちろん、来るのも。だから、由樹は二度とこんな過ちを繰り返すまいと硬く誓ったし、自分の軽率さを悔いていた。

「大丈夫よ。大通りまで出せばバスも電車も手伝ってくれる人がいるのだから。」

「じゃあ、大通りまで送るよ。」

「だめよ、授業が始まるでしょ。大丈夫。私のことは、心配しないで。」

天気が良いことを幸いに、由樹の母は一人、校門を出た。細いが、車も良く通る道をゆっくりと慎重に進んでいく。通りの端は僅かに斜面になっていて、健康者は気付かないが、車椅子にはつらい。

少し進むと、緑の生い茂る公園が見えた。ここを通り抜けると、大通りに近い。

わずかな段差を上り、園内に入った。アスファルトで舗装された緩やかな道を進んでいくと、噴水が見えてきた。しかし、冬の最中では水は止められているため、枯れた寂しさが漂う。

と、そのとき。

少しわき見をしたのが悪かったのか、車輪がわずかな窪みにはまり、動かなくなった。ちゃんと見て、注意しているはずが油断した。これは、自分ひとりではどうにもならない。第一、こんな寒空の下では散歩する人影もない。住宅街なのだから、暇を持て余した老人がいても良さそうだが。

もがいても、もがいても、車輪は窪みから外れない。
なす術がなく、額に汗が滲んできた。
こうなったら、携帯で由樹を呼ぶか。

「お手伝いしましょうか。」
はっと振り向くと、そこには制服姿の女子が立っていた。青いサテンのリボン。由樹と同じ学年だ。そして、思い出した。由樹の傷を見て涙を流した、事件の発端となった少女ではないか。

二葉はその場にしゃがみこみ、はまった車輪をゆっくりと持ち上げ、正常な道まで押し去っていった。

「どうもありがとう。一人でどうしようかと思っていたのよ。」
車椅子の女性は、美鈴よりずっと年を重ねてはいるが、小奇麗で清潔な感じが漂う。優しく穏やかな笑顔だ。何となく、見覚えがある。

そうだ、思い出した。

由樹の母親だ。上品な目元が似ているような気がする。

保科由樹をつれてきなさい

美鈴の言葉が頭を殴りつけるように木霊する。

二葉は、唇がひきつるように、震えだした。

「顔色が悪いわ。大丈夫？」

覗き込むような視線に、二葉は思わず顔をそらせた。一番、会ってはいけない人に会ってしまったのではないか。

「とりあえず、そのベンチに座ったら？」

不自由な身体を乗り出して促す女性を振り切ることが、二葉にはできない。言われるまま、さっきまで自分が座っていたベンチに再

び腰掛けた。

「ちよつと、待っていてね。」

なす術も無く額を抱えてうなだれた。

どうすればいいのか。

さらって行かねばならない少年の母と、今、どう向き合えばいいというのか。

「気だるく頭をもたげた。と、その視線の先に由樹の母が懸命に腕をのばしているのが見えた。自販機で、上のほうにあるボタンを押したいらしい。」

考えるより先に、身体が動いた。

二葉は、由樹の母の腕を押さえた。

「いけません！もし車が倒れたらどうなさるんですか？」

つかんだ手の甲にはいくつも筋が浮き出っていて、年を感じさせた。だが、しつとりとして、やわらかい。

「どのボタンですか？」

二葉が代わりをつとめると、由樹の母はその缶を二葉に渡した。

「これは、あなたの分。」

温かな赤い缶。

「・・・そんな。」

「ココアは、お嫌い？」

「・・・いえ。」

ココアなど、何年ぶりかわからない。

昔、幸せだった頃、養母が冬に入れてくれたきりだ。養母はいつもココアに少しのバターかチョコレートを落としてくれた。すると、何も入れないときに比べ、魔法のように素晴らしくおいしくなる。

缶の中からは、そんな優しい時間を思い出させる香りが漂ってきた。

人のいない公園はとても静かだ。しかし、陽の光に誘われるように、雀のさえずりや鳥の羽音が風に混ざる。ほんの少し、春の訪れを予感させる。買ったての飲み物で手を温めながら、由樹の母親は

語り始めた。

「実は一週間前、あなたを学校でお見かけしてますのよ。」

「・・・私も、覚えております。」

由樹の母親。好意を持つても、決して報われない相手の一人だ。こうして、一緒にお茶を飲んでることさえ、奇跡に近い。由樹と同じ、人の好さゆえか。

「由樹は何も話さないけれど、代わりに橘君がたくさん話してくれて、大体の事情は聞いています。あなたを・・・、遠野さんを、先生の前でも一生懸命かばっていたわ。」

「橘君は、保科君が本当に大事なんです。私をかばったのではなく、私の事情を話すことで、保科君の正当性を証明したかっただけだと思います。」

「・・・由樹は幸せね。いいお友達を持つて。」

「橘君だけではありません。保科君は、・・・皆に好かれています。」

「嬉しいことをおっつしやるのね。」

目尻に皺を寄せて微笑むのは、心からの喜びに見えて、ほっとする。こんな穏やかな空気の流れの中にと、現実を忘れそうになる。由樹の母親にとって、この時間は確かな現実なのだろうが、二葉には夢の中のことのようなようだ。自分の罪を忘れ、身分を忘れ、一人の普通の少女になった気がする。

こんな素敵な女性が母だったらどんなに幸せだろう。身体が不自由でそれなりの苦労があるのだろうが、絶対大事にする。

だが、今、本当に言わなければならぬことが上手く言葉にできない。誤るべきだとも思う。だが、一体どういふうに言えばいいのか。どちらにせよ、この女性がいい思いをするわけないのだ。

ほどなくバスの時間がやってきて、由樹の母親は上半身を動かした。

「バス停まで、送らせてください。」

「まあ、ありがとう。」

素直に喜んでくれたのなら、嬉しい。心の奥底で澱む闇が、ほんの少しかき回された気にはなる。

「学校、行つてくださいね。由樹も、あなたを待っていると思うから。」

別れ際の一言で、返す言葉もなく、バスは小さくなった。

裸の街路樹が規則正しく並ぶ幹線道路に立ちつくし、このまま車にでも轢かれてしまいたいと思った。

美鈴は、賢い。二葉を言いなりにする最善策をとった。セシリアという最上の実験台を得た上、二葉を意のままに操る術も手に入れた。

(ずるいよ。)

ターゲットを見つけ、調査し、データをまとめて美鈴に渡す。それを何度繰り返してきたか。出席日数が足りないから、いつまでも高校を卒業はできない。そして、もう、二葉は二十歳になる。

この前、冬の街灯に立つセシリアの両親を久々に見た。

小雪の舞う灰色の空の下、セシリアの搜索を訴え、ピラを配っていた。

見るたびに、老けてゆく。

若くて澆漑としていた面影は完全に無く、背を丸め、頬が落ち、皺の溝だけが深さを増していく。

教えられるものなら教えてあげたい。

だが、警察や第三者が研究所へ踏み込む前に、美鈴や基が何をするかはわかっている。

研究所の爆破。

証拠や研究成果を完全に消滅させてしまふ。その中に、セシリアの眠るカプセルも当然含まれるのだ。

そんなセシリアと家族の悲運を、由樹にまで味わわせることなどできるか。

身体の不自由なあの母親は、絶望に嘆き死んでしまふのではないか。いや、気丈に由樹を探すかもしれない。きっと、地獄の果てま

でも。

二葉はわけがわからず走り出した。

冷たい空気が肺を刺激する。

激しく息をするたび、ちくちくと痛む。

だが、心があばれて、どうにもできない。

こんなことを、一生くりかえしていくのか？

「研究のため」という名目の元に、あとどれくらいの犠牲を払えばよいのだ？

二葉は、スカートのポケットにしまつてあるセシリアのピン留めを握り締めた。

（教えて。私は、どうすればいい？）

由樹の拉致を拒絶することは、セシリアの死か、二葉自身の死につながる。

二葉の脳裏に、由樹の母の笑顔が浮かぶ。由樹の横顔が浮かぶ。

（できない。私には、彼らを苦しめることができない！）

二葉の中で、ある決意が芽生えていた。

マンションへ戻ると、美鈴が怪訝な顔をしている。まだ学校が終わる時間ではない。

「学校は？」

二葉は、恨み顔で美鈴をにらみつけた。

「私を、……きざんでください。」

「……お前は自分が何を言ってるかわかっているの？」

「はい。」

「くだらないわね。」

美鈴は鬼のような形相で二葉の長い髪を自分の腕に巻きつけ、ひっぱった。

「あのね、何のために多額の寄付金をつんでお前を名門校に入れていると思ってるの？それなりの実験台を手に入れてもらわなきゃ割にあわないのよ!」

二葉を部屋へ引きずり込み、床へ叩きつけた。骨と皮でできたような美鈴の細い腕のどこに、こんな力があるのか。

「あんたはね、今しか価値が無いのよ。十八歳以下の実験台を直接探し出すためには、あんたが高校生のふりしてもぐりこむしかないんだから。あんたみたいな出来損ないは、切り刻むより、そつちで活用したほうがよっぽど役に立つのよ。あんたが高校生で通用しなくなったら、遠慮なく刻むわよ。どうでもいい標本にしなければならないけど。いくらかにはなるから。」

美鈴は、電流の流れる金属の棒を取り出し、倒れたままの二葉の背に打ち込んだ。

「・・・っ！」

焼け付くような痛み。だが、これは初めてではない。

気付くと、腕に何かを注射されていた。

(これは・・・！)

「これで反省するがいい。三十六時間、たっぷり地獄を味わうがいわ。」

部屋に鍵がかけられ、まもなく二葉はとてつもない頭痛に苛まれた。目をあけていることができず、吐き気もする。全身が痛み、しびれる。立ち上がることはできないが、のた打ち回らなければ耐えられない。

このまま死ぬことは無いのだろう。

だが、死んだほうがましだと思う。

身体がどうにかなる前に、精神が崩壊するのではないか。何かの頭の中ではじける。目の前がゆがんだかと思うと、体が押しつぶされたように痙攣する。

気を失えば楽なのに、それも許されない。

三十六時間の地獄。まさに生き地獄。

(私は、私を殺す選択権さえ持っていなかったのだ・・・。)
さっきまで、やはり夢を見ていた。優しい時間など、二葉にはすぎた贅沢だったのだ。

(当たり前前だ。私は、今まで何人の人間を地獄に貶めたと思っている?)

ターゲットだけではない。周りの人間まで不幸にした。周囲の人間は、やはり生き地獄にいるのだ。一生。

(それに比べたら、私は三十六時間。それくらい、何!)

叫びたいのに、声さえ出ない。身体の置き場が無い。だんだん、天と地の区別がつかなくなる。

息ができない。

吸っても吸っても、必要なものが身体の中に入らない。

見開いた視界が、やがてヘド口色の闇に埋もれた。

その夜、帰宅した由樹は、母に今日学校へ来させてしまったことを改めて誤った。そして、謹慎になってしまったことも。

「帰り道、この間のお嬢さんと会ったのよ。」

「お嬢さん?」

「そう、遠野さんよ。」

「遠野?」

「車椅子の車輪が溝にとられてしまったところを、助けてくださったの。」

「何か、話した?」

由樹は期待と不安のまじった声で尋ねた。

「たいしたことは話してないけれど。彼女、ちゃんと登校した?」

「いや、欠席だった。」

「そう。・・・行きづらいのかしらね、やっぱり。」

あんな形で謹慎になってしまったのだ。由樹には、もう二度と二葉が登校しない気さえする。今までも、いつ不登校になってもおかしくない状況だった。

いくら由樹や武士が二葉をかばおうと、それは二葉を引き止める原動力になるとは言えない。

憐れむなという。

同情が嫌いだという。

生傷が絶えない状況なのに、自分は不幸でないという。確かに、世の中には過酷な生活を送る子供も大人も沢山いる。だがそれらは、今、この国で生活している自分とは離れた世界のできごとだ。目の前の二葉の境遇と比べるといわれても時限の違いを感じる。

由樹は、明日も二葉が登校しないようなら、家へ行ってみようかと思った。自分の謹慎のことで気に病んでいる可能性がないわけではない。

担任に休みの原因をそれとなく尋ねると、風邪で休むという連絡が入ったきり、こちらからの電話は通じないのだという。二葉が学校へ申告している電話番号はでたらめだ。担任が今日当たり自宅を訪問しようと思っているということを利用して、由樹がプリントを届ける役目をかってでた。担任だって、やっかいごとは避けたいはずだ。

住民票が絡むことから住所は本物だったため、由樹は二葉のマンションをつきとめることができた。最寄の駅までは武士と一緒に行った。武士の地元知識のおかげで、場所を探すのに手間はかからなかった。

マンションのセキュリティは甘く、部屋の前までいくのは問題なくできた。

マンション側が準備している白い表札には、何もかかれていない。何度も部屋番号を確認してからチャイムを鳴らすと、二度、ゆっくりとした電子音が流れた。

「どなたですか。」
インターホンから女性の声がした。低めで尖った印象だ。

「翔架学園で遠野さんのクラスメイトの保科由樹といます。休んでいる間のプリントを届けにきたのですが。」
かなり緊張する。

「どうもありがとう。今、開けますね。」
金色の縁取りがある黒い鋼製の重い扉が開けられ、その中から背

の高い、痩せた女性が現れた。化粧をしていない顔に黒縁の眼鏡をかけている。誰だろうと思う。二葉の母なのか。にしては似ていない。

「二葉のクラスメイトの方ね？」

「・・・はい。あの、遠野さんの具合は・・・？」

「だいぶいいのよ。」

由樹は注意深く女を観察した。今、にこやかに微笑んでいるが、この女こそが二葉に傷を負わせている張本人なのではないだろうか。風邪なんて嘘で、二葉は外に出られないくらいのひどい怪我をしているのではないか。

一方、美鈴は由樹を見下ろし、ほくそ笑んだ。獲物が自分から罠にかかりにきたのだ。

「せっかくだから、お茶でもいかが？外は寒かったでしょう？」

由樹は、一瞬躊躇した。が、二葉の内情を探るまたとないチャンスだと思い、頷いて玄関に足を踏み入れた。

と、そのときだった。

「だめ・・・！」

家の奥から、搾り出すような声があがった。

由樹が視線を上げると、廊下脇の部屋から二葉が身体半分をのぞかせている。美鈴の打った薬品の効き目はきれていない。苦しくて眠れず、今に至る。

だが、朦朧とした意識の向こうで由樹の声が聞こえたため、弾かれたように部屋から飛び出したのだ。

美鈴は目を疑った。あの薬がまわっている身体が、こんなに動くはずがない。動くのは、意志と無関係に痙攣したり、のた打ち回るだけのはずだ。声だつて出ないはずだ。

なのに。

由樹は、二葉のやつれて青ざめた死人のような表情に言葉を失った。

「駄目よ、彼はこれから塾があるんだから。誘ったら、ご迷惑よ。」

浮腫んで感覚のないような足をひきずるようにして、二葉は由樹が靴を脱ごうとするのを制した。

「駅まで送ってくる。」

美鈴が何かを言おうとしていたが、二葉は痺れてギリギリする腕で由樹の手をつかみ、素早く外へ連れ出した。

息が吸えない。水の中でもがき苦しむかのような感覚の中、二葉は必死で由樹を美鈴の目の届かないところへ行かせようとした。

マンションから出たところで、二葉はよろめき、足から崩れていった。

「遠野！」

由樹がその身体を支え、思わずぎよつとした。熱い。どれくらい熱があるのかと思うくらい熱い。

「風邪、ひどいんじゃないのか？」

由樹には、二葉が薬でおかしくなっているなどまったく予想のつかないことだ。二葉は、つつじの植え込みのレンガに手をつき、身体を支えた。

「かえって。」

「え……。」

「早く帰ってよ。」

「遠野。」

「はやく！」

由樹は、二葉が家庭の事情を覗かれたくないのだなと思った。

しかし、事態は緊迫していた。美鈴は、もう、由樹を放しはしないだろう。もしあのまま家でお茶でも飲もうものなら、そのまま眠らされて研究所行きになるところだった。

二葉の額に冷たい汗が浮かぶ。口の中の唾液の出る穴という穴から、液体があふれ出す。許されるなら、ここで横になりたい。だが、とにかくまず由樹をここから帰さねば。

「はやく！」

いつ、内臓が口から溢れ出してもおかしくないとさえ思えるのに、

由樹は二葉の異常な様子に、立ち去ることができないでいる。

いつ美鈴が追いかけてくるかわからない。今こそ、由樹の自分に対する同情心を、どうあっても崩さねばならない。

二葉は震える爪先で、植え込みの硬い黒土を引っかくようにむしりとり、由樹へ向かって投げつけた。それが最後の力だった。二葉の身体はひざから地面へと碎けてしまった。

二葉の必死の思いを、由樹が理解できるわけもない。こんなに拒絶する理由は何だろうかとは思うが、それ以上は想像もつかない。

倒れても、二葉の意識は、まだある。だから、由樹を救わねばならない。二葉は最後の力をふりしぼり、二の足で地を踏みしめようと上体を起こした。

だが、そこで二葉を待っていたのは由樹の手ではなかった。

「どうしたんだ、二葉。」

二葉の身体を軽々と抱き上げたその視線の先にあつたのは、遠野基の顔だった。

由樹は思わず息を呑んだ。

突然現れた大人の男は、痩せた身体に濃い灰色のトレンチコートを巻きつけ、由樹を見下ろしている。

「その制服は、翔架学園の・・・？」

由樹は、この男が二葉の父だろうと推測した。

「はい。遠野さんのクラスメイトです。」

「そうか。・・・二葉は病弱でね、学校を休みがちだが、心配して来てくれたのかな？」

「はい。プリントを届けに。」

「ありがとう。迷惑かけたね。気をつけて帰ってくれ。」

この父親が虐待をしているとは思えない。さっきの女の人もだ。

(でも)

二葉の痣は、確かだ。自分でやっているわけではなし、他人からやられていれば身内が黙っているわけではない。

一度は背を向けた駅前の高層マンションを振り返り、由樹は唇を

引き締めた。あのまま二葉を引き渡してよかったのだろうか。無理やりでも救急車を呼ぶべきではなかったか。だが、もう後の祭りだ。かすかな後悔が由樹を足止めした。

由樹は嘉納と話をしたいと思った。嘉納が由樹より二葉について詳しいのは確かだ。冷静に、尋ねようと決めた。

二葉が父に会うのは、年に数回。健康診断という名の検査のときだけだ。父とはいえ、二葉は「所長」と呼ばなければならない。美鈴のことは「主任」。「お父さん」「叔母さん」は、人前だけの呼び名だ。

この間、研究所を訪れたときは会わなかった。それが、どういう風の吹き回しだろう。

二葉は由樹が離れたことを確信するとそのまま意識を失っていた。基は、美鈴の入れるコーヒーに手をつけず、声を荒げた。

「やりすぎだ、美鈴。私が見ていないからといって好き放題しているようだな。」

美鈴は、動じることなく鼻先で笑った。

「ちゃんと限度はわきまえているわ。」

「どこが？あんなに苦しめて！」

「お兄様は二葉に甘いよね。まだ自分の娘だなんてくだらないセンチメンタルを捨てきれないってわけ？」

基は美鈴の腕を鷲掴みにした。

「勘違いするな。確かに、二葉は実験台だ。だからといって何をしてもいいわけじゃない。まして、無意味な苦痛を与えていい理由などどこにある？」

「勘違いはお兄様よ。二葉はね、今回、拒否したのよ。獲物をつれこむことをね。」

基は、由樹を思い出した。

（そうか、あの少年か。）

確かにターゲットに相応しい。

だが、二葉はそれを由としなかったのだ。

「二葉には、情を捨てきれないところがある。それは仕方が無い。」
「産まれたときからちゃんと躰けなかったのが悪かったのよ。」

「仕方ないだろう！私とお前に、乳飲み子を抱えていける余裕なんかなかった！第一、私にもお前にも子供なんか育てられない。」

美鈴は眉を歪めて、横を向いた。

「もうその言い訳は聞き飽きたわ。」

基は、美鈴に手を差し出した。

「解毒剤をよこせ。」

「そんなものないわ。大体、あと少しで治まるわよ。」

「あれでは体力が持たない。何でもいいからよこせ！」

兄の強い口調に、美鈴は憤慨した。

「二葉は思い上がっている！道具だという自覚を忘れ、高校生に成り下がっている！」

「二葉はもう二十歳だ。限界だ。それに、この間の検査結果がでた。今日はその話をしに来たんだ。二葉はすぐにでも私が集中治療しなければ、危険だ。」

「そう。だったら、なおさら今回の学校では働いてもらわないと。いい子が沢山いるぞ。」

「もう、それ自体が限界なんじゃないのか？セシリア一人で縛り付けられる限度を超えたんだろう。」

美鈴は、苦々しく腕組みをし、リビングを徘徊した。

「さっきの彼、私は諦めないわよ。二葉に同情しているみたいだし、どうにでもなるわ。」

「冷凍催眠させるのか。」

「そうよ。しかも頭も切れるクラス委員。久々の特別な男の子よ。ただ、」

美鈴の眼鏡の奥が兄を捕らえた。

「嘉納恭二の息子がクラスメイトにいて、二葉の正体を探っているみたいなの。」

嘉納恭二は医師としてだけでなく、研究でも名をあげている。学会でも度々顔をあわせている。だが、個人的な関わりは一切なく、特に話をしたこともない。

「息子に余計なことを吹き込んでいるのか？」

「多分ね。盗聴器で聞きかじっただけのことしかわからないけれど。」

「下手に動かない方がいいな。」

「わかっているわ。」

「迂闊だった我々の責任だ。今回はおとなしく収めたほうがよくないか。」

「弱気にならないで。私たちは今までうまくやってきた。今回だって慎重にやるわ。だからお兄様も今まで以上に気をつけて。」

「わかっている。」

基が二葉の部屋をのぞいたとき、二葉はフローリングの床の上に死んだように横たわっていた。口元に手をやると、やわらいだ呼吸が感じ取れた。ようやく葉がきれいらしい。基は、二葉をベッドの上に横たわらせ、布団をかけてやった。

娘だという実感はない。娘だからといって何か特別だとも思っていない。基自身が人工授精し、遺伝子操作をした大事な研究成果だ。今後も、その成長を観察し今後に活かそうと思っている。もっと美しく優秀な人間を作ろうと思っていたが、できたのは平凡な少女だった。人間の手をかけず、自然にできた子供の方がよほど優秀かもしれない。

汗だくで眠る二葉の傷だらけの腕を見て、基は胸がしめつけられた。美鈴は、二葉への虐待を止めない。ストレスの捌け口の様に、そして、一生実験道具として存在すべきだということを知らしめるかのよう。

二葉は、さっきの少年を想っているのだろうか。だから、あんな身体で彼を守ったのだろうか。そうだとしても、何の不思議も無い。二葉を育てた研究員は、遠野研究所の創設者である基の父に忠実

な男だった。子供を欲しがっていた男は、妻には真実を告げず、二葉を預かってくれた。十年という約束で。彼らは口封じのため間もなく実験台の露と消えた。父は三年前に他界し、基が所長職を継いだ。

セシリアのことを、二葉は決して忘れないだろう。子供とは思えぬ激しい形相で美鈴につかみかかった。どうにもならないと知り、何日も何日も泣き続けた。

あの少年は、二葉のささくれた心を癒してくれたのだろうか。

家だけでなく学校でも針の筵となっている二葉には、どんなささやかな思いやりでさえ、救いになるのだろう。

（研究所へもどったら、治療ついでに耳のピアスはずしてやろう。）

父親である実感も無いまま、娘の頭をなでることもできない。

それが基の良心であり、弱みでもあった。

朝、目が覚めたと同時に、二葉ははじかれるように身体を起こした。

眠っている間に、由樹が連れ去られてはいないだろうか？

部屋を出て、リビングへ行くと、そこにはコーヒーを飲みながらテレビを観る基の姿があった。

「・・・主任は？」

「美鈴ならまだ寝ているよ。今は六時。少し早いんじゃないか？」

基は穏やかに微笑み、二葉にカフェオレを作って渡した。

二葉はカップの中の褐色の液体を凝視し、そのまま口をつけられずにいた。

「何も入っていないよ。私は、美鈴とは違う。」

基は、二葉の手からカップをとり、別のカップに少しつつしてそれを飲んでみせた。

「ほらね？大丈夫だよ。」

怯えた二葉の様子が、子ウサギのようで、痛ましい。

やっと、立ったまま口をつけた二葉を優しく見守り、基は言った。
「もう、学校へはいかなくていいから。」
「!?!?」

「美鈴が起きたら、三人で研究所へ戻ろうと思う。」

「……じゃあ、保科君は……?」

「もう、お前に無理はさせないよ。」

「諦めたということですか。」

「そうだね。」

二葉には信じられない。そんなうまい話があるものか。邪魔できない場所に自分を追いやり、由樹をものにする算段ではないのか。

基は、二葉の疑心暗鬼の様子に、言葉を続けた。

「そのピアスを外そうと思っっているんだよ。」

「えっ?」

「お前を縛り付けていたからね。これからは研究所で働いてもらうんだし、監視なんていらなくなるから。」

「……どうして。」

「お前は二十歳になる。もう、高校生というには限界だ。だから、先のことを考えたんだよ。それだけだ。」

「そうだろうか。」

例え基の考えはそうであっても、美鈴は違うのではないか。美鈴は、何としても由樹を手に入れるだろう。そして、それは可能だ。

「今日、私が学校へ行って退学の手続きをとってくる。そうしたら研究所へ一緒に帰ろう。」

一度部屋に戻り、二葉は制服のリボンにそっと触れた。この美しい制服を、もう着ることはないのか。そして、もう、あの学校に行くこともない。

(諦めるわけが……ない。)

弾かれたように、二葉の身体が反応した。

(まさか、もう……!?!?)

自分が眠っている間に、美鈴が由樹をさらってしまったのではない

だろうか。

二葉の脳裏をかすめるのは、あの日の恐怖。

青く冷たい顔だけがのぞくカプセルの中に閉じ込められたセシリアのあの……。

首を締め付けられたような息苦しさ。

確かめなければならぬ。

確かな安全を手に入れられる日まで、由樹を守らねばならない。

今まで、何人もが犠牲になった。

セシリアを救えると信じて、目を瞑ってきた。

なのに、由樹をその一人にできない。

絶対に、できない。

それは、変わらない二葉の決意。

二葉は、今一度制服の青いサテンリボンを硬く結んだ。

そして、父にだまって、家を出た。

それは、二葉にとってこの世の終わりを意味している。

美鈴にさからったただけでなく、基にもさからった。

今度こそ、終わりだ。

セシリアを捨てる日。

(セシリア……！)

ドアノブを握ることを一瞬躊躇した。が、すぐにその手を、もう一度伸ばした。

生き返る見込みが百パーセントとはいえないセシリアよりも、生きていく人間を選ぶ日があったのだ。

第4部：実行

由樹を救いたい。

由樹を美鈴から救えたのなら、生きてきた意味があるというものだ。

何人も犠牲にし、罪を重ねてきた償いに、少しくらいはならないだろうか。

由樹がいつもどおり部活の朝練に出ているなら、もう学校にいる時間だ。

肌を刺す冷たい空気をはねのけながら、二葉は走った。いつもは気にもならない電車が、なんと遅いことだろう。

美鈴が家にいたかどうかは確かめられていない。だが、とにかくまだ由樹が無事であることを信じて、学校へ行くしかない。

家を出たところを拉致されていないか。
わからない。

泣きたい気持ちを抑えて、二葉は校門をくぐり、レンガ敷きの中庭へ直行した。ここから、広いグラウンドを見下ろすことが出来る。視界の開けた先に、いくつもの蒼いユニフォームが点在していた。目を細めても、見えない。あんなに遠くでは、いくら好きな人でも見分けられない。

「遠野？」
ハツとして振りかえる。

そこには、武士がユニフォーム姿で立っていた。二葉は思わずその裾にしがみついた。

「保科君は？今日、見かけた？」
「俺がどうしたのか？」

武士の陰に、由樹はいた。まだ制服のまま。かばんを肩に背負って。

二葉は開いた口がふさがらなかった。ほっとして、呼吸さえ忘れ

てしまう。

「よかった、もう、学校にこないんじゃないかと思ってた。」

由樹が微笑む。それは、二葉を溶かしていく。だが、今はそれに酔っている時間はない。美鈴が、由樹を諦めると証明されるまで。だから、ここでのんびりはしてられない。二葉が家を抜け出していることはもう気付かれています。そして、父は今日、学校へ来る。それと鉢合わせしたら、おわりだ。

二葉は、覚悟を決めた。

「保科。俺、先行ってる。」

武士が、何となしにその場から離れるやいなや、二葉は由樹の腕を強くつかんだ。

「お願い、私と一緒に来て。」

「え？」

「あとで理由は話すから。早く！」

二葉に手をひかれるまま、由樹は走り出した。二葉の乱れた長い髪が、由樹の頬をときおりくすぐる。

由樹は、二葉が休んでいる間、思い切って嘉納に声をかけていた。嘉納は相当驚いていたがすぐに頷いた。由樹の表情の強張りが尋常でないことに気付いたからだ。

二人は、最も人目のない屋上へ続く階段の踊り場に行った。

「嘉納が知っている遠野のこと、全部教えてくれないか。」

嘉納は、眉をひそめた。

「興味本位で探るなって言ったのは保科だぜ？」

「興味本位じゃない。」

由樹の真剣な眼差しに、嘉納は首を振った。

「なら、知らないほうがいい。」

意外な言葉だった。

いつも人を馬鹿にしたような物言いからは想像ができない。

「なぜ？」

「俺、喧嘩で謹慎になったとき、親父に全部事情を話したんだ。そ

したら目茶苦茶叱られた。喧嘩のことじゃなく、遠野の正体を口にしたことをさ。」

嘉納は唇をゆがめた。

「ネットの掲示板でいろんな噂が流れてるけど、真相はわからないでも、遠野二葉は学期ごとに転校してて、転校するたびに間もなく不登校になってる。共通しているのは、遠野が回った学校ほぼすべてから行方不明者がでているということなんだよ。」

「行方不明・・・？」

「とにかく、すぐ学校に来なくなるから存在自体が薄くて確かなこととは言えないらしいけど。親父もその話は聞いたことがあるらしくて、絶対に近づくなつて釘刺された。」

「遠野と行方不明が関係あるのか。」

「証拠はない。でも、偶然にしては、できすぎてる。」

由樹は、はつとした。

二葉の態度。

よるめきながらも、必死で由樹を追い返した。痩せた女の方は由樹を家へ招きいれようとしたが、男のほうは由樹を帰した。それは、どういうことだったのだろうか。

由樹が、二葉の家を訪ねたことを言うと、嘉納の顔色が変わった。「馬鹿か？自分から畏にかかりにいったようなものだぞ？帰ってこられたのは奇跡だ。遠野がお前を無理やり帰したのなら、遠野はお前をかばったってことだ。二度と行くなよ。遠野がこのまま学校に来なくても、学校に来ても、絶対に近づくな。絶対だ！」

嘉納の食い入るような形相に、由樹は初めて全身に鳥肌が立つほどの恐怖を覚えた。嘉納が嘘を言っているとは思えない。真実なら恐ろしいことだ。もしかしたら、あのままどうにかになっていたのかもしれないということか。

嘉納の話と、二葉の家のできごととは考えるほどシンクロして辻褄が合う。

「もう絶対に関わるな。脅しじゃないぜ。」

嘉納は耳元に念を押し、席に戻っていった

嘉納の話の思い出しながら、由樹は二葉の後姿だけを見ていた。二葉の細い身体のどこに、こんな持久力があつたのだろう。普段から身体を鍛えている由樹さえ、相当息が切れているのに、二葉は少しもスピードをゆるめない。

弾む息が苦しげなのに、由樹をつかむ腕の力は変わらない。

嘉納の一言で怖気づいたのだと思いたくない。だが、二葉を救えるなどと思いついて自分が嫌で、情けなくてたまらない。

今の二葉は、自分を救おうとしているのか。それとも、自分を、実験台にするために連れ去ろうとしているのか。

どちらにせよ、もう、運命を二葉に委ねるしかないだろう。

それでいいと思う。

二葉を信じている。

すべてを、委ねていい。

それは、遠い昔から知っていた夢の続きのような気がするから。

「馬鹿な子だわ。」

美鈴は、二葉の行き先を受信器で眺めながら鼻先で笑った。

「私たちが逃げられるわけがないのに。」

だが、基の表情は厳しかった。

「甘いよ、美鈴。二葉は、これが「死」を意味していることぐらいわかってるだろう。自分だけでなく、セシリアの死にもなることだ。相応の、覚悟だよ。」

「あの子に何ができるといふの？みすみす保科由樹の居場所を教えられているものじゃないの。やっぱり、ばかよ。」

「二葉はもう、何も恐れていない。それを侮ってはならない。」

「どこへ行って、どうしようというの？誰も助けてくれるわけがないって、知ってるはずよ。警察だって、私たちには手も出せないのだから。」

基はソファから立ち上がった。

「私は研究所に戻る。美鈴も一緒に来なさい。」

「ええ、行くわよ。二人を連れて。」

「いや、駄目だ。二葉はともかく、保科由樹は捨てる。」

「いやよ。」

美鈴は、きつぱりと言い切った。

「セシリアが失敗した以上、新しい実験台が必要よ。やっと見つけたまれの逸材だわ。諦めないわよ。」

「二葉がセシリアを捨ててまで、守ろうとしているんだぞ。」

「だから、なおさらよ。冷凍保存しなくてもいいの。生殖実験がしたいから。」

「いいや。嘉納の息子のこともあるし、今回は手を引け。」

「いやよ！私は、保科由樹を殺してでも手に入れるわ。いいのよ、私が生き返らせるのだから！」

「ばかなことを！思えばいいところだ。」

「この世の不可能を可能にするっていつも言っていたのはお兄様でしょう！それを、今さら何？研究のために、私はすべてを捨ててきたのよ！私の人生と引き換えにしても手に入れる価値のある成果がでなければ、私は・・・！」

美鈴は興奮で震えた唇を固く噛み、基に背を向けて黒いコートを羽織った。

「私は、この世に可能性がゼロの現象なんてないと信じているの。不可能なのではなく、今はまだ期が熟していないだけ。だから私がそれを可能にするのよ。・・・お兄様は先に研究所に戻っていて。」

基は、美鈴自身が人工授精の実験結果であることを知っている。基の父が、長年かけて成功させ、世に認められた唯一の例だ。しかし、美鈴がそれを知ってしまったとき、どんなに苦しんでいたかも知っている。自分のデータをとる父を、一度、なぐつてもいる。

私は人間よ、実験のデータじゃないわ！

そう言っていた美鈴だからこそ、二葉をああいっ扱いにするのだ

るうか。自分と同じ境遇の実験台が本来あるべき姿を、自分では実現し得ないそれを、二葉に強要するのか。

（二葉が命を賭けて抵抗する日がかかることも、知っていたはずだろうが……。）

苦渋をのみ、基もマンションを後にした。

鍵を持たない二葉が、ここへ帰ってくることはないだろう。

基は、研究所へ戻った。

ああなつた美鈴を止めることはできない。

二葉を娘と認めたくない気持ちだが、二葉を救うことを、いつもためらわせる。せめて、乳飲み子の頃から自分の手元においておけば、基はもつと素直に情を表せたのだろう。

研究所は基の唯一の居場所であり、心の拠り所であり、逃げ場所でもあつた。

「遠野！ちよつと待って。」

冷たい空気が肺をちくちくと刺す。

そんな中、由樹は、二葉を呼び止めた。

二葉がふりむき、歩みを緩めた。

「電話させてくれないか。家に。」

「……。」

「学校から家に連絡いってたら、心配かけるだけじゃなくて、面倒なことになる。」

「……そうね。」

由樹は二葉に背を向け、携帯電話をとりだした。

どんな言い訳をしているのかわからない。

だが、これからどうしたらいいのかわからないのは二葉自身だ。本当は、学校にいたほうが安全だったのではないだろうか。いや、美鈴はそんなに甘くはない。

由樹の電話が終わり、二葉は尋ねた。

「今、いくら持ってる？」

「・・・五千円くらいかな。」

遠くへ行ける額ではない。どちらにせよ、このピアスで追跡可能な範囲から逃れられそうにない。

とりあえず、人ごみに紛れるか。

車で簡単に横付けされるようなところからは離れるべきだ。

電車に乗り、渋谷へ行った。

駅前には方向感覚を失いそうなほど複雑に絡み合っている。空の方向にそびえる灰色のビルにめまいがする。

嫌な街だ。靴下を売ったとき、こんな吐き気をもよおす街へは二度と来まいと誓った。なのに、今はこの街の雑踏に頼ろうとしている。

平日の朝。若者の、しかも制服姿は奇妙に目立つ。

九時前。開いている店も限られる。

モーニングで賑わうお洒落なカフェが見えた。意を決し、二葉はそこへ入った。

カウンターでカフェオレを注文し、それを受け取ると、店の一番奥の二人がテーブルに着いた。

「事情、話してくれるか？」

店にいるサラリーマンも若いOLも、皆食べることや新聞、仲間とおしゃべりに夢中で、周りには無関心だ。制服姿の男女がいれば、学校をさぼっているか、単位制で時間が不規則なのだろうくらいにしか思わない。

「いいえ、まだ、だめよ。」

これからどうすべきか、頭の中をフル回転させている二葉には由樹の言葉が素通りする。

こんなところに長い間留まっているわけにもいかない。それは、美鈴に捕まえてとっているようなものだ。わずらわしいこのピアスを何とかしない限り、どうにもならない。もちろん、こんな人目のある中で拉致はできないだろうが、待ち伏せさせる時間を与えるには十分だ。

二葉は下唇を噛み締めた。
決意の時だ。

鞆の中のノートを取り出し、シャープペンを走らせた。それを、
由樹に無言で見せる。

一ページずつ、紙芝居風に。

『私には盗聴器がとりつけられている。』

由樹の目の色が変わった。

『だから、声を出さないで。』

二人の呼吸が止まった。

『これから、あなたは荷物を持って男子トイレに入って。個室に。
そして、十分たったら、出てきて。』

「・・・」

『あなたのコートを、私にわたしてほしい。これは、お願い。』

由樹は、濃紺のフード付きのコートを静かに二葉に差し出した。

これは、学校指定の高級なものだ。二葉は、買ってもらえていない
が。

『十分後、もし私が見当たらなければこの席に戻っていて。すぐ、
必ず、もどるから。』

由樹は、二葉の手からノートとペンを奪った。

『なにをする気だ？危険なことか？』

二葉はだまって首を振った。そして、力強く頷いてみせた。大丈夫、
というように。

由樹の顔は、不安で歪む。だが。

二葉は、音を立てないように立ち上がり、「Lady」という札
のついたトイレに入っていった。

由樹も、指示通り男子トイレの個室に入ったが、その途端心臓が
大きく鳴り始めた。

嘉納の忠告が脳裏を駆け巡る。頬が熱くなり、額のあたりがくら
くらす。

盗聴器？

そんなものが、取り付いているのか。だから、誰とも会話しなかったのか。

いや、これは、二葉の妄想ではないのか？バーチャルな世界に取り付かれているのではないのか？

嘉納の話が、それを否定する。

嘉納までもが二葉の妄想につきあうわけがない。

とりあえず、二葉の言うとおりにするしかない。

ワイシャツのネクタイをむしりとった。

息苦しくて、たまらない。

二葉は小綺麗な個室で、メスを取りだした。学校の生物の解剖実験で、刃の先が破損し、廃棄されていたものを持ってきておいたのだ。

さつきカフエオレをたのんだときについてきた消毒液の染み込んだ紙製のお手拭をとりだして、耳と、刃先を拭いた。

生唾を呑み込む。

メスの欠けた刃先を見ているだけで痛い。

二葉は、由樹から渡されたコートを手に取った。まだ、温かい。

紺色のウールの生地に触れ、そしてそれを思い切り胸に抱きしめた。

(私に勇気を・・・！)

舌を噛まないよう、ノートをしっかりと口に咥える。

(ためらってる暇はないんだ。)

今まで、何十回も失敗している。

みみたぶを切り落とすことができないうで来た。だが、今こそは決断のときだ。

もう、帰る場所はない。

由樹を逃がしたら、後は地獄へ墜ちるだけだ。学校へ通うなんてことはおろか、この世で生きていくことはない。

美鈴がそこまで来ているかもしれない。

さあ、急がねば！

二葉は首を上へもたげた。

右の耳朵を左の指でひっぱった。

小ぶりなメスを握る手のひらが汗で滑っている。

そのまま、力をこめた。

「！・・・っ！」

ノートを啜えた口の端から溜まった唾液が滴り落ちる。たまらず、ノートが口の端から滑り落ちた。灰色のタイルとノートの上に、透明な唾液にまじった赤い血が一滴、二滴と染みをつくっていく。

思わず壁を拳で圧迫する。叩きたいのだが、かろうじて理性が「騒ぐな」と脳裏で叫ぶ。

切り取った肉片を見れるほどの神経はない。

頭の中が朦朧としてきた。

（だめ、まだもう片方残ってる！）

耳の神経は他の場所より弱いはずだ。だから、耐えられるはずだ。血の染みたノートを見ることはできない。

二葉は急いでトイレットペーパーを引き出し、丸めて口につっこんだ。

舌や口中の粘膜にまとわりつく紙に吐き気がおこったが、痛みで舌を噛まないためには必要だ。自分ひとりならこの場で死んでもかまわないが、由樹を無事に逃がさない限り、そうはいかない。

そして、左の耳たぶを左の指でつまんだ。

「・・・っ！」

床に手をつき、タイルをかきむしる。

切られた部分の神経の一本一本が苦しきでみみずのようになつのがわかる。

二葉は口の中からペーパーをとりだし、別のペーパーで切り取った二つの肉片を包むと汚物入れにしまった。

これで、二人がずっとこのカフェに潜んでいると思うはずだ。

トイレに流そうかと思ったが、それで電波がとぎれたら何かあつ

たと証明してしまうようなものだ。だから、あえてここに残す必要がある。

額から脂汗が滲む。

だが、行かなければ。

血で汚れたノートを鞆にしまった。

床に落ちた血を気にしている余裕はない。

由樹のコートを着れば、汚れた制服は見えないし、フードをかぶれば耳も血も隠せる。

立った足が震えている。

今の二葉を支えるのは、ただ、由樹への強い思い。その使命感。自分にしか由樹を救えないのだという優越感。

二葉がトイレから出ると、由樹が鞆を背負って待っていた。

由樹には、二葉の顔色が尋常でないことがよくわかったし、その額に汗で前髪がへばりついていることも異常さをかきたてる。

「大丈夫なのか？」

この十分間に何があったのかなど、由樹には想像がつかない。

二葉は、頷いた。

「もう大丈夫。あとは、あなたの家へ帰るだけよ。そこが一番安全だから。」

「・・・わかった。」

「コート・・・、借りて、ごめん。」

それ以上説明する力はなかった。由樹の腕が、二葉の肩を支える。「何も言わなくていい。」

「・・・。」

盗聴器を取ったと聞いたかったが、それが傷を伴うことを隠していられそうにないため、二葉は口をつぐんだ。

そして、ハツとなる。

由樹のそばから離れた。

血の臭いがする。それを由樹に勘付かれてはならない。

由樹を先に行かせ、後を追う。大通りを往来する高級車の排気ガ

スが傷口に染みる。

息があがる。

だんだん目の前がぼやけてくる。

（だめよ、いくら発信機をとったっていったって、油断しちゃ。）
まだ人ごみの解消しない山手線に乗ると、気分が悪くなった。

「少し降りて休むか？」

由樹の言葉に首を振る。そんな余裕はないのだから。

美鈴が由樹の家の前で待っていないことを祈る。カフェにおいてきたピアスを信じて欲しい。それを、祈るしかない。

もし美鈴とはちあわせしたら、もう、最後の手段しかないだろう。それは、覚悟している。

由樹をこんなに好きでなかったら耐えられないだろう。由樹が横にいることをこんなに甘く感じられなければ、とつくに倒れていただろう。

それを噛み締めればいい。

今、由樹は確かにここにいる。そして、その存在を守るためだけに自分は存在しているのだ。

都心から離れるにつれ、人は少なくなっていく。そして、由樹の最寄の家に着いた。

駅前のバスロータリーは、昼前の静けさにつつまれていた。日当たりの良いベンチでは、二人の老女が談笑している。

こんな長閑な風景なのに、二葉には戦場に見える。

「ここから、どういけばいいの？」

「歩いて二十分くらい。バスなら五分。」

「・・・バスでいい？」

「わかった。」

歩きのほうが連れ去られる可能性が強い。

昼間のバスの本数は少なく、次までは二十分ほど待たなければならなかった。

なるべく人目から離れていたほうがいい。そのため、駅構内の狭

い待合室に入った。

腕を抱えて、壁にもたれる二葉に、由樹は言った。

「俺にできることはある？」

「・・・私から離れないで。」

「わかった。」

「理由を・・・話さないかね。」

フードで陰る表情なら、由樹にいろんなことを悟られずにすむだろう。

由樹は息を呑んだ。

とつとつ、秘密が明かされるのか。

だが、二葉の苦しげな息遣いが気になる。絶対、あの十分間で何か危険を冒したのだ。決して外さないフードの奥に、何かを隠している。

待合室の外の広い構内を、のんびりと人が往来している。

どこかで、甲高い笑い声がある。

どこかで、赤ん坊の泣き声がある。

「あなたは、狙われているの。」

「誰に？」

「私の身内に。・・・嘉納君が言ったことを私は否定しない。遠野遺伝子研究所は、初代所長が戦前に始めた人体実験をいまだに引き継ぐ、悪魔の巣窟よ。研究のためなら、人の命は犠牲になってあたりまえ、むしろ名誉だとか言う人たちよ。その証拠に、私の親友は八年間、冷凍保存されて眠っているわ。」

嘉納の真剣な眼差しを思い出す。

すべて、真実だったのか。

「俺を、どうしたいんだ？」

「・・・実験台にしたいのよ。」

「俺を救うと、君はどうなる？」

「それは、知らなくていい。」

宙を睨み付ける白目に血管が浮き上がっている。由樹は、すべてを

知りたくてたまらない衝動をかるうじて抑えた。守られている以上、無茶は要求できない。だが、すべてを話すと言った二葉の言葉の真相がこれだけというのも合点がいかない

「警察とかへ行けば、何とかならないのか。」

「ずっと昔、やったことがあるわ。警察が守ってくれるなら、こんな無茶なこと、あなたにさせないわよ。」

「・・・そうか。」

「そうよ。だいたい、話したって現実逃避の頭のいかれたガキのたわごととしか思われないしね。」

バスの来る五分前に、席を立った。

回廊の細長い窓から差し込む強い光が、一瞬、二葉の首筋に当たり、コートの中の黒髪を透かした。

(えっ?)

赤い筋が見えた気がした。ほんの一瞬だから確かなことはわからない。だが、確かに赤いものが見えた。

(そういえば、ピアスしてるっていつてたよな?)

そのことだろうか。

そうに違いない。

バスは時間通りにやってきた。

由樹が先にタラップを上り、二人分の料金を払った。二葉がそれに続く。と、そのとき。

「!」

後ろにいた背の高い男性の腕が、不意に二葉の耳脇にぶつかった。

「あ、すみません。」

そつだ、普通ならそんなものだろう。

だが、今の二葉にとってそれは叫びたいほどの衝撃となった。

神経がちぎれたままの傷口に、自分の髪やら何やらがすべておそいかかったのだ。

二葉は思わず顔を苦痛にゆがめた。

「遠野?」

由樹には、それが尋常でないことに思えた。

二葉は、すぐにそばの椅子に腰掛け、窓の外をながめるように由樹から顔をそむけた。

「平気、気にしないで、」

痛いのが何だ。どうせ死ぬとわかっているのに、生きている証を感じてどうする。自分を可哀そうがってどうするのだ。

由樹はすぐ前の座席に座った。

二葉の脳裏には嫌な予感ばかりがよぎる。たとえば、今、この場に美鈴が現れて風のような速さで由樹を刺してしまったら。

何のために由樹を守ってきたかわからない。

美鈴ならやりかねない。どんなことも。

二葉は弾かれたように立ち上がると、由樹の座る椅子の脇に立った。

途端、頭のとっぺんで一回転する感覚が襲った。思わず目を閉じる。眉根をきつく寄せずにいられない。

「遠野、座ってるよ。」

「・・・いい。」

由樹にはわからない。いまだ、狐につままれているかのような感覚だ。二葉がバーチャルな妄想にとりつかれているのではという疑念を振り払うことができない。

いや、その方がいい。

二葉や嘉納の言うことが真実であることのほうが問題だ。嘘ならいい。そうであってほしい。

区画が密集する住宅街のバス停で降りたのは、二葉と由樹だけだった。

歩く間も気が抜けない。すべての五感を研ぎ澄ませ、少しの変化も見逃せない。

「1111。」

二階建ての木造瓦葺。狭い庭に樹木が所狭しと植えられている。車道から門、そして玄関まではゆるやかなスロープになっている。

それは、由樹の母親の車椅子のためだ。

門を開け、由樹が二葉を中へ促そうとしたが、二葉は敷地の外で立ち止まった。

「お願い。私がいいと言うまで、絶対に家から出ないで。誰とも連絡をとらないで。」

「・・・それは、どれくらい先のこと？」

「わからない。なるべく早くしようとは思ってる。」

由樹は二葉を玄関へと誘うように手を差し伸べた。

「寒かっただろ。家で休んでいけよ。母もいるし、お茶くらい出せるから。」

それは、優しい誘惑だ。しかし、二葉には許されない。

「ありがとう、でも、だめよ。」

「どうして？」

「どうしても。さあ、家に入って。」

合点のいかない顔で肩越しに振り返る由樹の横顔が綺麗過ぎて切ない。

「合図をするわ。私がこのコートを門にかけたら、あなたは安全で外にでてでもいいということよ。」

「・・・わかった。」

玄関の扉が閉じられ、二葉は門の脇の扉にもたれて座り込んだ。

だが、こんなところにいたら不審者に思われそうだ。だから、両手で這いずるようにしてガレージと植え込みの隙間を見つけ、身を潜めた。

寒いのに、熱い。

額から流れる汗が冷たい。

頭の中が割れるように熱い。

身体のあるところを太くて長い釘で刺されているような痛み。

(いけない、しっかりしなくては。)

ここで倒れてどうする？意味がない。美鈴が由樹の家に火を放つたら。

守りきらねばならない。何としても。

セシリアを捨てたのだ。変わりに一人は救わねば意味がない。

セシリアを犠牲にした罪を思えば、どんな身体にも鞭打てるはずだ。

美鈴は、ある一点から少しも動かない赤いランプを凝視していた。自分達が追われているとは思っていないのか。連れて逃げているのではないのか。

ランプが点滅している限り、発信機が壊れたわけではない。音もしている。水音や・・・女性たちの声。

(洗面所にも隠れているのだろうか?)

渋谷の喧騒に揉まれ、美鈴はカフェに入った。何も注文することなく、受信器が示す赤い光の方へと近づいていく。店員の一人がそれに気付いて声をかけたが、美鈴は目もくれない。

たどり着いた先は、やはり化粧室だった。

一つの個室が、反応する。

(ここに?でも、まさかこんなところに保科由樹と一緒にはいないだろう。)

閉じられたドアは、すぐに開かれた。しかし。

美鈴の驚いた表情に、出てきた女は怪訝そうな顔つきでその脇を通り過ぎていく。

「ちよつと待つて!」

受信器は間違いなくここで赤く点滅しているのだ。なのに、二葉がないというのはどうということだ。

「ここで、高校生みなかった?」

女は明らかに訝しげな表情で、「いいえ。」と応える。

(そんなわけない。そんな!)

美鈴は、とりあえずその個室に入り、鍵を閉めた。

赤い点滅の先に、白い汚物入れがあった。

(なぜ、こんな・・・?)

だが、すぐに美鈴はハツとなった。そして、ふたを開けてみる。ためらいもなく中に手を入れ、そして、血の滲んだ小さなペーパーの塊を手にした。

(まさか・・・!)

それを開き、そして。

目にしたものは・・・!

どす黒い血がルビー色のプラスチックにへばりついている。

(あの子・・・!)

切り落とされた肉片を腹立ち紛れに水で流し、美鈴は走り出した。

何と言つこと。

何と言つこと!

今まで、何度その耳にナイフをつきたてていたか知っている。だが、それはどんな拷問よりつらいから、なぜ仕舞いでいたはずなのに。

それをとうとうやりのけた!

セシリアが無事でいられないと覚悟したのか。それとも、自分たちがセシリアに手を出すはずがないと確信したのか。それとも、ばれたか、セシリアが死んでしまっていることを。

今どこにいるのだ?

こんなことまでして、今、どうしているというのだ?

学校か? いや、こんなことまでしてすぐに捕まるようなところにいるわけがない。

由樹を連れて、どこへ逃げた?

(いえ、落ち着けばわかる。あの子はお金がない。保科由樹だって所詮知れてる。そうそう遠くへ逃げおおせるわけがない。第一、逃げたってどうやって生きていくの? そうよ。こんなことをしたって、一時の気休めにすぎないんだから。)

真昼の喧騒に飛び出し、美鈴は足早に風を切る。

許せない。

逃げたことではなく、ピアスを切り取ったことに。

自分たちからの呪縛を、解き放ったことに。

人間ではないくせに、人間の男のために人間の女を裏切り、自らを犠牲にするという人間のようないふ行動をとったことに。

腹が立って、たまらない。

このどうしようもない苛立ちを、どうしてくれよう？

十二年間、人間として幸せに暮らしてしまったのだから、その人間としての自我をつぶすことなどできないと基は言った。

そんなことはない、と美鈴は言い切り、奴隷のように扱った。そして、ようやく「道具」としての身分を自覚したと思っていた。だが、その殻をやぶり、再び人間として目覚めてしまったのだ。

閉じ込めて置けばよかったか？だが、あんな半端な出来損ないは、実験にも限りがある。

(許せない。許さない。・・・こんどこそ、息の根を止めてやる！)

第5部：別れ

由樹は、「風邪を引いて、気分が悪くて帰ってきた」という嘘をついた。心配する母が何くれと世話をやいてくれるのが痛い。しかし、真相を話す気には一生なれないだろう。

明日は、どうしようか。

あさっては・・・？

限界がきたら、二葉を裏切り、外へ出るしかないだろう。

（はやく、コートをかけてくれ。はやく、もう、大丈夫だと言ってくれ。そうでないのなら、・・・すべて冗談だったと告白してくれ・・・！）

二葉がどうしているか考える。家なら安全だと言った。それから、どうしているのだろうか？一体、何がどうなれば本当の「安全」になるのだろうか？二葉の身内が由樹を狙っているというのだから、その身内が狙うのを諦めたときになる。

それは、可能なことなのか？

（まさか、危険なことをするわけではないだろうな？）

一瞬、ゾクツとした。

妄想が募って、家族を殺してしまったりはしないか？

突然、廊下の呼び出しブザーが鳴った。

一階から母が自分を呼ぶときに用いるものだ。

部屋のドアを開けて、下へ降りていく。

「今、遠野さんの叔母様の方から電話がきたの。まだ、遠野さんが家に帰ってないからクラスメイト全員に電話してきいてるみたい。あなた、何か知らない？」

由樹は、ハツとした。

「・・・まだ、電話切ってないの？」

「ええ、保留にしているのよ。」

これは、いいのか？由樹を狙っているという張本人に、自分の居

場所を伝えてしまってもいいものなのか？

二葉を、信じるしかない。今は。

「俺、帰ってないって言うてくれないか？」

「え？」

「たのむから。俺、こんなこともう二度といわない。でも、頼む。友達の家に泊まりに行つてるとか言つて。」

「でも、変に思われるわ。」

「じゃあ、近所に買い物に行つてるとかでもいいから。はやく、言つて！」

「・・・わかつたわ。」

保留ボタンで、こちらの会話が聞こえなく出来る時代でよかった。母が言い訳する声が聞こえる。

由樹は、静かに二階に上がり、そして自室の明かりを消した。もし、携帯電話でこの近くから家を観察していたらどうだろう？

母が電話を切つたのを確認して、由樹は車椅子の母に頭を垂れた。

「ごめん。」

「・・・私の知らないところで、何かが起こっているの？」

「ああ。」

「今日帰ってきたのも、そうなのね？」

「・・・ごめん。」

「どういうことなの？それに、本当に遠野さんがどこにいるか、知らないの？」

「・・・知らない。とにかく、もう少し時間をくれ。一生に一度の我がままだから。勉強はちゃんとする。区切りがいたら、学校へも行く。」

「・・・あなたを信じているからとしか言えないわ。お父さんにも、どう言ったらいいの？」

「とりあえず、風邪で寝てるってことにして。ちゃんと、全部話せるときが来ると思うから。」

母親の心配この上ない表情がたまらない。しかし、今の自分には

どうにもできないことだ。居留守を使ったことを、後悔するどころか、賢い選択だったと思っっている。

（もう、動き出している。俺のできる最善をつくすしかない。後でばからしいと笑えたなら上出来だ。今は、遠野のことを信じるしかない。）

今、嘉納と話したい。この話を無条件で信じてくれるのは嘉納しかない。あんなに嫌味なヤツと話そうと思う日がくるなどと考えたことがあつたらうか。だが、嘉納の真剣な忠告はこたえた。だから、信じている。

しかし、この事実を嘉納に伝えることが、もし、二葉を貶めることになつたとしたら。

（だめだ。・・・駄目だ。）

由樹はうなだれ、床に身を横たえた。

脳裏を何も駆け巡らなくなった。

もう、何も考えられない。

自分の知らないところで、自分を巡る事件が起こっている。そんなドラマ仕立ての現実を受け入れられなくて、受け入れている部分を引きちぎれて飛ばされそうだ。

片膝を抱えて、額を埋めながら瞳を閉じた。

眠れないが、目を開けていられない。

門に気配を感じたら、きつと、気付く。こんなに神経を研ぎ澄ましているのだ。だから、気付くはず。

マンションに戻った美鈴は、由樹が家に帰っていることを悟った。あんな下手な芝居が通じるわけがなからう。では、今、二葉はどうしているのだ。まさか、由樹の家にかばってもらっているのか。

二葉は、己の身を刻んで欲しいと言った。とうに、死を覚悟はしているのだ。

（お望みどおり殺してあげるわよ。もう、必要ないのだから。）
いくら耳たぶとはいえ、切り取って平気でいられるわけがない。

動作は確実に鈍っているはずだ。どこかで、動けずにいるのかもしれない。

押さえられぬ苛立ちを、透明なウィンググラスにぶつけた。

フロアリングに飛び散ったガラスの欠片をスリッパで乱暴に踏んづけ、美鈴は眉根を固く、固く寄せた。

（友情より愛情をとるなんて。馬鹿な子。そんな、報われないものを。そんな幻想を、人生と引き換えにするなんて・・・！）

ガレージの脇の茂みに身を潜めた二葉は、鋭く突き出た枝に触れないように腕を抱え、うずくまっていた。アスファルトを闊歩する音が寒空に響き渡るたびに硬直し、息を潜めてその正体を見極めた。そんなことを何回繰り返したかわからない。そんな中、見知った影を見つけた。

武士だ。

部活を終えた帰りなのだろう。スポーツバッグを重そうに肩に抱え、由樹の家のチャイムを鳴らす。武士の家は二葉と同じ駅なのだから、正反対のこの場所まで、わざわざ出向いたということだ。誰とも連絡を取るなど言った以上、由樹がそれを忠実に守れば、武士が心配して当然だ。

武士はインターホンで二言三言話をし、そのまま踵を返した。会えないといわれたのだろう。

申し訳ない。

平穏な由樹を巻き込み、しなくてもいい心配をさせてしまっている。武士にすがりつき、伝えて欲しい。由樹に、心からの謝罪を。武士なら、信頼の置ける伝書鳩になる。

だが、喉から今にも吐き出しそうな叫びを、二葉は必死に飲み込んだ。

武士をも、巻き込むつもりなのか。

由樹は、武士を巻き込んだり、心配させたりすることなど決して望まない。

顎をあげ、由樹のいる方向を見つめ、二葉は思った。由樹も、一人で絶えているのだと。二葉がこんな目に遭うのは仕方のないことなのに、関係のない由樹が、こんな辻褃のあわない目にあってしまったていることを、心からすまないと思う。

深夜。

とうとう、雪が降り出した。

見上げた濃紺の闇夜から白いものがゆっくりと舞い降りてくる。

由樹に借りたコートの上に落ちたのは、六角形の星形の結晶だった。まるで、白い砂糖菓子のようにだ。

指先でそつとつまもうとすると、触れた先からしゅるしゅると溶けてしまった。

身体の芯を震わせる寒さが襲ってくる。

美鈴が早く来ればいい。待ち伏せにだって限界がある。いくらなんでも三日以上は待てない。

由樹が家から一步も出ないことを悟るとき、美鈴は動き出す。由樹が家の中にいる以上、手出しはできないからだ。由樹が自ら出てこないなら、無理やり追い出すしかない。そのとき、家に火を放つだろう。

(今晚放火することはないとは思っけれど……)

それはわからない。美鈴の考えていることは、いくら一緒にいたってわかるはずがない。

ピアスをはずして、意味があつたのだろうか。あのままにしておいて、居場所をわからせてしまったほうが話、が早かつたのではないだろうか。

だが、あのまま追跡を受けていれば由樹を自宅まで無事送り届けることは無理だったと思う。だから、よかつたのだ、と思いたい。そうでなければ、むなしすぎる。

今、何時だろう。

待つ時間というのは、いつも長い。

中古の地味な車は、未明に、静かに現れた。

新聞配達が来る寸前の、最もひと気がない時間。

車から降り立った黒のコートを見るや否や、二葉はすばやく美鈴の後ろに回り、やわらかな首の血管に刃の欠けた理科実験用のメスをつきたてた。

待ちに待った瞬間だ。

何度も計画を頭の中で繰り返し、修正し、実行に備えてきた。

思いがけない二葉の行動に、美鈴は声が出なかった。

「……！」

首を仰げ反らせ、美鈴は背中越しに二葉を睨みつけた。二葉は抑えた声で言った。

「そのまま車へ！研究所へ行ってください！」

「……ばかなことを。」

二葉は、メスの刃を首の血管に強く押し当ててみせた。実際に痛みを感じれば流石の美鈴も少しは考えるだろう。

しかし、体力の無い二葉に分は無い。片や武道をたしななんだつわものだ。あつという間に美鈴のひじでみぞおちを殴られ、コンクリートの上に倒されてしまった。

首に刻まれた細い傷など、美鈴にとってどうということはない。

耳たぶを切り取って気絶と寒さに体力を使い切ったか細い人形など、怖るるに足りない。

だが、命がけという執念は、美鈴の不意をついた。

二葉は倒された腕を伸ばし、美鈴の細い足首をつかんで力いっぱいひっぱった。

足をとられた美鈴は、よろめき、ひざをついた。

二葉はその上へ、全体重をかけるように身体を投げ出した。そして、今度は背中から首に腕をまわし、思い切り締め上げた。

「……っ！」

美鈴は喉を鳴らし、苦しげに腕を振り回している。

「さあ、どうします？私が、あなたを殺さないとも思いますか！

？」

二葉は、さらに腕で締め付ける力を強めた。全身全霊、とはこういうことを言うのだろう。すべての痛みを、すべての疲れを忘れて、今はただ美鈴をこの場から離すことしか考えられない。

と、そのときだった。

「どうしました？」

顔を上げると、まだ青が濃い空気の中に、バイクに乗った男性がいる。それは、新聞配達の若い学生だった。二葉が言葉を躊躇し、ほんの少し力を緩めたその瞬間。

パ・・・ン！

男性の動きが不自然に止まり、それからゆっくりバイクとともに横に倒れる様子が、二葉の目にスローモーション映像のように映った。

その銃は、人を殺すものではない。

美鈴が緊急に相手を気絶させて眠らせる、「拉致」のときに用いる常套手段だ。

美鈴は背中の二葉を払いのけ、男性をバイクの下から引きずり出すと、鮮やかな手つきで車の後部シートに投げ込んだ。そして、二葉にもその銃を向けた。

二葉は、身体を硬直させた。

撃たれたら、終わりだ。

ここまでのすべてが、終わる。自分が眠っている間に、由樹は連れ去られる。セシリアと同じように、冷凍保存にされてしまい、一生、日の目など見ることなく朽ちていく！

まっすぐ向けられた銃口に、二葉は身構え、後ずさる。

美鈴の顔は、無表情だ。いつもそうだ。人を研究材料にするとき、こつこつ顔をする。人の感情のない、人でない顔をする。

だが、そのとき二葉が最も怖れていた瞬間がやってきた。

玄関のドアが開いたのだ。

それは、ずっと門扉にコートがかけられることを意識して眠らず、

神経を尖らせていた由樹だった。

「遠野！」

まだ明けない朝なのに、由樹の姿をはっきりと捉えた。

美鈴の銃の先が、向きを変えた。

「来ちゃダメエっ！！」

静寂を引き裂く声だった。

由樹の制服の白いシャツの襟が、風もないのにはためいた。

二葉は駆け出した。

それは、美鈴の方向だった。

銃口が、由樹を捉えないためには、それが一番だ。

「邪魔よ！」

美鈴の黒い銃口が、二葉の額を狙う。

二葉は羽織っていた由樹のコートを剥ぎ取り、美鈴の上半身目掛けて思い切り投げつけた。

重いウールのコートは、ほんの数秒でも美鈴の動きを止めてくれる。

二葉は美鈴の右手の甲を、メスで思い切り突き刺した。

「ああっ！」

喉がつぶれるような叫びも、次の瞬間に、消えた。

二葉が奪い取った銃で、美鈴の、その深い皺が刻まれた眉間を貫いたからだ。

あまりの騒ぎに周りの空気が動き出したのを感じ取った二葉は、気を失った美鈴を車の中へ引きずり込み、代わりに、先ほどの新聞配達の男性を外へ放り出した。丁寧に扱う時間はないし、体力もない。男性は、病院で適切に処置されれば問題ないはずだ。

二葉は一瞬、由樹のほうを見た。

玄関先で呆然としている由樹を、目の奥にしっかりと焼き付けた。

（本当に、さよなら。）

風が吹いた。

冷たい、しかし、少しだけ頬にやわらかい、春を予感させる風。

それが二葉の頬にかかった短い髪を、すべて宙へと舞い上げた。

(!!!)

その瞬間、由樹は見た。

耳たぶから下が、ないことを。そして、固まった紅蓮の血の塊を。

(遠野、まさか……。)

盗聴器がつけられているといった。それは、きっと「物理的に取れない」というピアスのことだったのだらう。

そしてそれがちぎられているのは。

それがなくなっているのは……。

二葉は車に乗り込み、そのままエンジンをかけて走り去っていった。

あのカフェのトイレで、十分の間に二葉が何をしていったのか。なぜ、フードのついたコートが欲しいといったのか。

あんなに顔色が悪く、脂汗をかいていたのか。

バスの中で男性に軽くぶつかっただけで、死にそうなうめき声を出したのか。

すべて、繋がるではないか！

盗聴器がなくなったから、秘密を口で語りだしたのだ。

全然、気付いてやれなかった。

妄想だったらいい、なんて思っていた。

目の前の現実が、今さら脳の中で認識されていく。

由樹がコンクリートの上に取り残された男性に近づくと、どこも怪我をしたり、血を流していないことがわかった。脈もあるし、かすかな呼吸もある。

(あの銃は、殺すためのものではなかったんだ。)

それがわかり、少し安心した。二葉はあの「叔母」を殺したわけではなかったのだ。

由樹は救急車を呼び、長い時間待ち、やがて警察の事情聴取を受けた。だが、その話の中に、「二葉」の存在はなかった。

見知らぬ車が止まり、その音で目が覚め、外を見たら男性が倒れ

ていた、とだけ由樹は言った。あの男性が目覚めれば、きっと二人の女の子をやるのだろう。それを口止めすることはできない。もし男性の証言で警察が動き、美鈴と二葉が逮捕されるようなことがあれば、二葉がどんな境遇でどんな目に遭ってきたか明らかになり、絶対に罪には問われないはずだ。

しかし今、自分の口からそれを語る気にはならない。

あの、蒼い景色に繰り広げられた、自分をめぐるドラマを、語れはしない。夢物語だろうと笑われそうだからだ。

騒動を聞きつけた両親とともに家の中へもどろうとしたとき、由樹はハツとした、

門扉に、コートがかけられている。

いつの間に？

わからない。

コートは、美鈴との争いの楯に二葉が放り投げた。それからは、覚えていない。

合図をするわ。私がこのコートを門にかけたら、あなたは安全で外にでてもいいということよ

(約束を、守ったということか。)

コートを手にとり、由樹は震える唇を噛み締めた。

(バカなヤツ。こんな神業使えるなら、あんな・・・！)

何も出来なかった。

ただ、守られただけだった。

これから、二葉はどうなるのだろう。

わかることは、ただ一つ。

もう、二葉は二度と学校には来ない。

もう、自分のクラスメイトではない。

もう、会うことはない。

第6部：結末

車の運転は、研究所で父が教えてくれた。「いつか役に立つから」と。

（本当だわ。こんなに役に立つなんて。）

バックシートの美鈴が目覚めないかと、ついバックミラーを除いてしまう。二葉は免許証など当然持ってないが、警察の目を怖れる余裕はない。

これから研究所へ戻り、セシリアを取り戻す。美鈴より、所長のほうが怖くない。美鈴はここにいる。所長が拉致に直接手を下すとは思えないから、とりあえず安全だ。このまま美鈴と一緒に断崖から車ごと飛び降りて心中してもいいが、やはりセシリアの行方が気になる。助けられるものなら助けたい。

お金がないため高速道路を使わず、下の道を四時間ほど走らせ、研究所にたどり着いた。

何度も通ったとはいえ、よく道を覚えていたと思う。この、人里から完全に隔離された、迷路の奥のようなこの場所へ。

限界の身体に鞭打って、美鈴のジャケットの襟首を両手でつかみ、研究所の入り口に立った。美鈴の腰元のポケットを探って、カードキーを取り出す。

キープラス指紋認証。

キーを差し込んで、美鈴の腕を引っ張り上げ、黒い液晶画面に五本の指を押し付ける。

扉が開くのはたったの五秒。

その間に中に入りきるよう、美鈴の身体を床をすべらせるように押し込み、ドアが閉まりかける寸前に飛び込んだ。倒れこんだ肩から肘までの肉から骨に、強い衝撃が走る。だが、間に合わなければ強制的に閉じた鉄の扉の餌食になる上、研究所中に警報が鳴り響く。この建物内には、所長自らが細心の注意を払って許可した「研究員」

のみで、警備員も運転手もない。完全セキュリティシステムは他人の介在を許さず、所長自らがプログラムして作り上げた、まさに「極秘」のものであった。侵入者には、容赦なく死が与えられる。

廊下の至る所に待ち受ける、扉という扉すべてにカードを通し、美鈴の指を用いる。

どれくらい同じ操作を繰り返しただろう。ようやく目的の場所へたどりついた。

開いた扉のところに立っていたのが美鈴ではなく二葉であることに、のんびりコーヒーを飲んでいた基は息を呑んだ。

髪をふりみだし、美しい制服はよれよれになっているが、その目は獣のようにきらきら光っている。足元に崩れているのが美鈴であると気付いたのと、二葉が小さな銀色に光るものをぐったりとした喉元に押しやるのは同時だった。

「主任を殺されたくなければ、セシリアを目覚めさせてください。」
こんなに暗く、太く、そしてすっかりとした二葉の声を、基は始めて聞いた。

基は、冷静だった。色々な意味での限界を悟っていたから、黙って二葉に歩み寄った。

「一緒に来なさい。美鈴は置いておけばいい。麻酔銃を使ったんだろう？少なくとも三日は目が開かない。それに、美鈴は私にとっての人質にはならないよ。お前が今美鈴を殺しても、私はなんとも思わないのだからね。」

「……。」

基の研究室からのみ入れられる実験室こそ、最高機密の部屋だ。そこが、セシリアの眠る冷凍装置のある場所。

八年ぶりにセシリアに会える。

その喜びがあるはずなのに、心は高揚しない。

命がけのはずが、その必要なしに目的を達成できてしまうからなのか。

暗くて狭い廊下を通りぬけ、天井の高い、広い部屋にたどり着い

た。その中央に、セシリアの眠る棺のようなカプセルが置いてある。かつて、この脇でどれほど泣いただろう。

ひんやりとした部屋の中で、背筋を伸ばし、唇をひきしめた。会える。

やつと、会える。

だが、その棺に近づこうとした瞬間、基が言った。

「セシリアは、そこにはいない。」

「えっ。」

思わず見た基は宙をにらみつけたまま言った。

「セシリアは、十日ほど前、死んだ。」

二葉は口を開けたまま、二の句が告げない。基は、一体何を言っているのだ。

「実験は、失敗だった。手の施しようがなかった。」

「そんな……。」

二葉は、棺の所へ駆け寄った。ふたには鍵がかかっておらず、思ったよりもずつと軽かった。十日ほど前、美鈴が血相をかえて研究所へ戻ったのは、やはりセシリアのためだったのだ。

棺の中には、塵一つ残っていないかった。セシリアのおいも、影も、何も無い。

二葉は基の襟をつかんだ。

「どこかへ隠してしまっただんでしよう？私の目の届かないところへ、やってしまっただんでしよう!？」

基の表情が、悲痛に歪んだ。

「そうだったら、どんなにいいか。」

「大事にしてたじゃない!すべてを犠牲にして、守っていたでしよう??!」

「当たり前だ!……全力は尽くしたんだ。」

「だから、だから言ったのに!私は十二のあの日、わかってた。こんなことは無理だって!こんなことしなければ、セシリアは二十歳で、あと六十年生きられたのかもしれない!セシリアの両親はどう

するの！？あんなに老いてしまつて、それでもまだ街頭に立つて、ピラを配つて探しているのよ！死ぬまで、あんなことをさせるの！実験なんかのために、何人の人生を狂わせれば気が済むのよ！」

「実験に、犠牲はつきものだ。実験は成功するかどうかなどわからない。だからこそ成功に意義があるんだ。失敗も、成功のための布石なんだ。」

「他人の人生を踏みにじることが布石なの！？そんな上の成功に、何の価値があるというのよ！」

「お前にはまだわからないだけだ。」

「一生わからないわ。私には、どんな実験よりも、どんな成功よりも、セシリアや、クラスメイトのほうが大事よ。どんなに嫌いな奴でも、いざ実験台として拉致する手引きをした後は苦しかった。そのときになつて、いとおしくなるのよ、どんな奴の命でさえも！」

「それは、きれいごとだな。」

基は、つかまれた襟を正し、少し笑つた。

「どんな奴でも。なんていうのは嘘だ。お前の中では、確実に命の序列があつたじゃないか。今までの一番はセシリアだつた。だが、この前は違つた。逆らつて、セシリアが殺されることを覚悟してたんじゃなかつたのか。その上で、保科由樹を美鈴から逃したんじやなかつたのか？」

「。。。。。」

「そのせいで、セシリアが死んだと思えばいいじゃないか。覚悟していたんだろう？それでも仕方ないと思つていたんだろう？実験は失敗した。だがそれは、おまえ自身の行いが招いたことなんだ。」

そんなセリフを、基から言われたくはない。一度はセシリアを捨てたのに、セシリアが自分のせいで死んだと思いたくない。

基は、白衣の胸元から、美鈴が持つていたのと同じ麻醉銃をとりだした。

「セシリア亡き今、お前はどうする？私や美鈴の生活は何も変わら

ない。お前は、これからどうするんだ？研究所に協力するか、それとも、死か。」

まっすぐに向けられた銃口を、二葉は正面からにらみつけた。

「研究所のために、そのためだけに生きる人間は、もはや人間ではないわ。研究という名に踊らされた、ロボットよ！」

「それは違う。」

「いいえ。研究のために、みんな、人間らしいことをすべて捨てていられないの？所長も、主任も、ずっと、ずっとすべてを諦めて、犠牲にしてきたくせに！」

「犠牲ではない。目的達成のための、必要最低限のことをしてきただけだ。」

「人の生死を操ろうなんて目的は滑稽よ！誰だって、いろんなものを抱えながら、精一杯今を生きているのに、その『今』をとりあげて、何が人類の発展よ！」

「では、私たちに協力はできないのだな？」

基の指が、引き金にかかる。

「実験体として生まれたんだ、その使命をまっとうするがいい。」

基は、だまって薄笑いを浮かべた。

この絶体絶命に思える状況下において、二葉は自分でも信じられないほど冷静でいられた。

二葉の心身は、今、ただ一つの目的を達成するためだけに存在している。

今、この命はその達成のためだけに生かされているのだ。

「・・・私の今の使命は、」

二葉は、スカートのポケットに手を入れた。

「ただ、ひとつ！」

美鈴から奪った麻醉銃をすばやく抜き、間髪を入れずに引き金をひいた。

パ・・・ン・・・！！

基が倒れるのと、二葉の膝が崩れるのは、ほぼ同時だった。

眠っていないのと、耳たぶを切り落としたり、極度の緊張が続いたことが重なり、二葉の体力は限界を超えて、その場に大きい音をたてて倒れこんだ。

（まだ駄目よ。まだ・・・！）

基の身体が沈んだことを確認し、二葉はかろうじて肘で上半身をもたげた。

基と美鈴は眠っているだけだ。ここで止めを刺さねば、今までの苦労が水の泡になってしまう。

由樹が一生、研究所から狙われるなどという恐怖から開放されるために。

セシリアや、多くの少年少女のような理不尽な犠牲がこれ以上繰り返されないために。

二葉はもはや残らない力を、強い思いだけで再び奮い立たせた。

二葉が去った朝、警察に事情聴取されるなどして心配する両親を尻目に、由樹は登校した。

二葉が合図したのだ。もう、家に隠れる必要はないのだろう。

万が一、あの「叔母」が何か仕掛けてきたとしても、もう、二葉に守られてなどいられない。自分の身は、自分で守らねばならない。登校すると、あまりにもそこはいつもどおりに時間が流れていて、夕べからの非日常が夢のようにさえ感じられる。

「由樹、大丈夫なのか？」

武士にさえ、何も話せない。ただ、だまって頷くだけだ。

一瞬、嘉納の方を見やったが、一連のできごとは話せないと思っただ。話せば、嘉納の両親から二葉のもとへ捜査の手が伸び、犯罪者にしてしまいそうだからだ。

その日の朝、担任は開口一番に、告げた。

「昨日、遠野の親御さんが来校して、退学手続きをなさった。」
わかつていたことだった。

教室のどこからともなく、
「やっと退学してくれたよ。」

という声が聞こえてきたが、由樹は拳を握り締めて、耐えた。二度と問題は起こせない。母に、あんな思いは二度とさせまいと誓った。ここで相手の襟首をつかんでも、何も解決はしないのだから。

授業に没頭しても、部活に汗を流しても、ふと立ち止まれば今朝のシーンがよみがえる。夢のように儂くて、鮮明な記憶。真っ先に脳裏に浮かぶのは、風で髪が翻り、ピアスごと赤くくりぬかれた耳と、強くて激しい稲妻のような目を持った、女の顔。それは、由樹のクラスメイトの顔ではない。

楽しいことがあって頬の筋肉がゆるむたび、心の奥に針がささったように記憶がよみがえる。こんな平和な時間を安穩と過ごしている自分が、許せなくなる。自分に出来ないことが無いなんて思っただけはなかった。しかし、本当にどうにもならない事が起こった時の無力感は、現実以上の現実を突きつけてくる。

家に帰って、母がいつもどおりに出迎えてくれたときには、ほっとした。

「何も、おかしいことはなかった？」

「ええ、大丈夫よ。それに、何かあっても、そう簡単にはやられないわ。自分の身ぐらい自分で守れないと、由樹のことも、お父さんのことも守れないものね。」

今日、初めて自分が自覚した思いを、母はいつも、当たり前のように思っていたのだ。母にも、そして、父にも、守られているという実的な何かがなかったとしても、いつだって守られていたのだ。「・・・ごめん。本当に、心配も、迷惑もかけて。」

「バカね。そんなふうに思ったことはないわよ。だって、由樹は私の大事な子供なんだから。心配するのは当たり前だし、迷惑と思うことでも、受け止めるのが務めなんだから。」

母を大事にしなければ、と強く思う。今までだってそう思ってきたし、そうしてきたつもりだった。だが、本当にそうだったのだろうか？

次の日の午後は、三年生を送る会だった。受験日に当たっている三年もいるが、そうでなければ、この日だけは登校してくれる。それが、出て行く者の礼儀と務めだという認識を代々継いでいるからだ。来年、由樹たちも今年の三年と同じように、送る会に出ようと思う。今、自分達が先輩に心からの感謝を捧げようという気持ちを、来年は自分達がきちんと受け止めなければならぬと胸に刻むからだ。

四時間目のホームルームから昼休みにかけて飾りつけされた教室に、十八名の卒業生を迎え入れ、会が始まった。机は卒業生がお茶やお菓子を食べられる分だけ残し、後は椅子を人数分入れておく。

メインはオリジナル映画の上映だ。由樹は運営からは一切手を引いていたため、ただ見ていれば良い立場だった。撮影班長ではあったが、編集は由樹が停学中に行われたらしく、どんな映画に仕上がったのかは知らない。

黒いカーテンを引いて暗くなった教室にスクリーンを下ろし、プロジェクタを置いて、上映が始まった。

クラスメイト全員参加だから、登場人物が多くて脚本にも無理がある。だが、ストーリーは単純なものにしているし、表現力でうまく見せている。

だが、映画が終わったときに由樹ははっとした。

映画の中に、二葉がいなかった。

撮ったはずだ。涼子が、撮影できたと喜んでいたのでから。

だが、なかった。

見逃してなどいない。

卒業生への何の感慨もなく、会を終えた由樹に、武士が一枚のDVDを渡した。

「保科に、やるよ。」

「・・・これは？」

「遠野のシーン、カットする前の映画。」

「・・・。」

「遠野が退学した後、切られたんだ。・・・とめられなかった。ごめん。」

「どうして橘が謝る？それに、なんで俺にそれを渡すんだよ。」

武士の細い目が、歪んだ。

「遠野に連れ出されて、学校出て、欠席した日、何かあったろう？何かはわからないし、聞かない。でも、保料があの日から一度も笑っていないから。休み時間は、屋上にいりびたってるし、・・・痩せたし。だから、」

「それをもらって、俺はどうすればいい？それを見て、映像の中の遠野を見て、どうすればいい？！何もできない、無力な自分を嘆けばいいのか？それとも・・・！」

言葉につまる。それ以上は武士に言えないからだ。

武士が何を言いたいのかわからないわけではない。だが、それを素直にのむことができない。

「いらぬなら、捨ててくれてもいいんだ。でも、とにかく受け取ってくれ。保料しか考えられないんだよ、これを持っているべきヤツが。」

「・・・。」

「じゃ。」

去ろうとする武士に、由樹は言った。

「すまない。」

「謝るなよ。心配して当たり前だろ、これでも親友のつもりなんだから。」

自分が、無頓着に多くの人に支えられていたことを、罰当たりだと思う。わかっていたつもりなのに、本当は何もわかっていなかったのだ。

次の日の実力テストで、由樹は初めて上位五十人に入らなかった。

心配する担任に、由樹は言った。

「少し、時間を下さい。必ず、立ち直りますから。ただ、少し気持ちの整理をするのに時間が欲しいんです。自分でしか解決できないことです。すみません。」

思う以上に、二葉の残した傷跡が由樹を支配していた。

非日常的な衝撃、というよりは、他人の陰の部分を垣間見てしまったことへの罪のような意識だった。二葉を救う方法など、いまだにわからない。他人の人生に責任を持つことなどできないのに、安易に関わってはいけなかったのだ。だが、由樹自身、あときは確かに当事者だった。研究者に狙われている実験台だった。そう、それも、いまだに由樹を傷つけている。

だが、次の日、ことは起こった。

朝、教室に入った由樹を待ちかねていたのは、嘉納だった。

「保科、ちよつと。」

コートを着たままの由樹を教室のバルコニーへと連れ出す。まだまだ寒い時期、こんなところへ来る物好きは他にいない。

「これ、見たか？」

それは、今朝の朝刊の記事だった。隅のほうに小さく載っている。

『山林で研究所火災。十人死亡』

その見出しに、由樹の身体がはじかれたように動いた。

「これは……。」

「遠野基博士の研究所。誰も知らない、極秘の施設だったけど、すごい火事で身元がわれた。県境の奥地らしい。死体の身元確認なんか、誰がすればいいのかもわからないみたいだぜ。研究員も、家族とかとの連絡を完全に絶って、働いていたみたいだからな。もしここに遠野がいたとしたら……絶望的だな。」

由樹はその新聞を握り締めた。

「これ、ちよつと貸してくれ。」

「えっ、ちよつと、保科！」

由樹は、鞆を持つと、学校の外へと走り出した。途中すれ違った武

士が声をかけても、返事もせずに駆けていった。

たどり着いたのは、二葉のマンションだった。

だが、目的の部屋には、誰もいない。管理人の話では、二葉が退学した日に引き払っているという。

もう一度新聞を読み返す。

確かに、遠野基という遺伝子工学の権威である博士の所有する研究所と書いてある。だが、果たして二葉がここにいたという可能性はどれほどか？あの叔母を連れて、一体どこへ行ったというのか。やはり、ここしかないのか。

（だけど、わからないじゃないか。死体の身元確認ができないのなら、誰が誰だかなんて、わからない。ならば・・・！）

見上げた空が、薄い薄いブルーで、白に近い。

太陽は雲で隠れて見えないのに、まぶしくて、思わず目を細めた。（あのまま、死んでしまったなんて言わないでくれ。俺を助けたばかりに、死んでしまったなんて、そんなこと・・・。）

この火事の詳細が知りたいと思い、由樹は新聞社に電話をかけた。取材をしたという記者は三十歳前後の男性で、由樹が「元クラスメイトの居場所がわからないが、この博士と同じ苗字だから気になる」という子どもじみた理由にも迷惑そうな声は出さず、話せる限りのことを丁寧に教えてくれた。だが、本当に知りたい二葉の消息はやはり不明のままだった。記者は、もし何か進展があったら連絡してくれるとまで言ってくれたため、とりあえず急ぐ気持ちに区切りがついた。

由樹が恐る恐る学校へ、そして教室へもどると、三時間目が始まるところだった。

「担任には、忘れ物して家に帰りましたって言うといいたけど、俺の言うことだから信用されてないかもな。」という嘉納に、由樹は「サンキュ、助かる。」と素直に礼を言った。単純に、嬉しかった。

その日帰宅すると、由樹宛に差出人の名前のない、白い封筒が届いていた。不安になったが、とりあえず開けてみる。中には手紙ら

しき白い紙と、電子データが保存されているであろう、フラッシュメモリが入っていた。

手紙に目を走らせ、由樹は電流が体内を駆けめぐらさるほどの衝撃を受けた。

その手紙は、二葉からだった。手書きの、きれいだが、しつかりとした文字だ。思わず紙を握る手に力が入り、小刻みに震えだす。

『もう、誰もあなたをさらうことがないようにしました。安心してください。』

保科君にこのメモリを託します。この中に、研究所の犯した罪の証拠と、遠野基の二十年の研究成果が保存されています。保科君なら、これを正しい判断で使ってくれると確信しているからです。私ができるなかったことを、あなたにお願いしたいのです。十年後に、ファイルのロックが解除されます。もしそのときまでに何も判断できなかつたとしたら、ファイルは決して開かず、処分してください。あなたがあなたの人生をあなた自身の力で生きて、活躍することを心より祈っています。そして、その姿を一生見届けていきたかつたと、心から思います。』

由樹の緊張した唇が、少しほどけた。

今まで、何人もの女子の口から告白を受けたが、由樹自身に思いがなかつたため、それに応えられずに申し訳ないという気持ちしか湧いたことがなかつた。だが、この二葉の手紙の最後の一文は、堪えた。

『一生見届けていきたかつた。』

それは、由樹が一番欲しかった言葉。

誰かから言われたかと思っていた、言葉だ。

好きとか嫌いとかではなくて、愛してるとかそんな理解できない抽象ではなくて、もっと確かな言葉。誰かの一生を、ずっと見届けていきたいという気持ち。そして、その対象になることを、漠然と夢見ていた。それを、二葉からもらえたということが由樹の身体の奥を熱くした。

だが、それはそこまでの話だ。

二葉は、死んでいるかもしれない。いや、死んでいる可能性が高い。

『もう、誰もあなたをさらうことがないようにしました。』とは、どうということなのか。そのために研究所に自ら火を放ったというのか。

手紙の消印は火事があったという日になっている。手紙を出した後、事を起こしたと容易に推測される。

手のひらに乗る小さなメモリ。これを今すぐ開けて見たい衝動にかられた。その中に、二葉の消息に繋がるような何かが入っていないかと思うからだ。だが、十年後までは見ることができない。

十年後、一人前の大人になっていれば判断がつけられる頃だと、二葉は思ったのだろう。

自分の部屋の窓から見る風景は、もう平穏な日常ではない。自分の人生は、もう、自分だけのものではない。もちろん、自分を育てた両親や支えてくれた人々への恩返しに人生の半分は費やさねばならない。だが、それ以上に今の由樹の命は、一人の女に救われた命なのだ。もし二葉がいなければ、いつの間にかあの研究所の餌食になってしまっていただろう。その恐ろしさ。そして、今自分が生かされていることへの感謝。

色々な思いを馳せ、瞳を閉じ、二葉からの手紙に顔を寄せた。

（生きていてくれ。それだけだ、それ以上は、何も望まない。あんな悲しい腕をしたまま、死なないでくれ。）

深い、深い吐息に切なさか滲む。

（俺に何も言わせないまま、逝かないでくれ。）

修了式の日になった。

この日、由樹を待つ白い車が校門の前に横付けされていた。

研究所の火事の記事を書いた記者が、由樹を現場へつれていってくれるという。由樹は色々考えた末、武士を誘い、一緒に車の後部

座席に乗り込んだ。武士にはただ、ある事件の現場へ新聞記者が案内してくれるから一緒に言ってみないか、と誘っただけだった。武士は何も聞かず、すぐにOKを出した。

記者、石井は数日前に由樹の自宅へ電話をくれた。石井は由樹の母に「自分の記事に興味を持ってくれた高校生に、後学のため取材に同行させたい」という理由で許可を得てくれた。

由樹が武士を誘ったのは、少し不安があったからでもある。いつ攫われるかという恐怖がまだ癒えてはいない。もし石井が研究所の手先で、おとりの記事を新聞に載せ、由樹を誘惑したとしたら・・・と、勘ぐらずにはいられない。最悪の場合、武士まで実験台になってしまうのだとも考えた。しかし、その不安を打ち消すだけの対応を石井はとってくれていた。学校に来る前に由樹と武士の家を訪ね、保護者に直接挨拶をし、今夜九時には必ず送り届けることを約束してきたことを、互いの母親から電話で知らされたからだった。

「わざわざ、すみませんでした。」
由樹がそう言うと、石井は笑った。

「当たり前のことだよ。君たちは親御さんにとつたら宝物だからね。見知らぬ男が夜遅くまで連れ回すなんて、心配だろう？」

引き締まった体つきといい、真っ直ぐな誠意ある瞳といい、実際の年齢よりずっと若く見える。機敏で、理知的。しかも、闊達明朗だ。素直に、憧れる。

石井は、高速にのってから、少しずつ話を切り出した。

「警察の検証が長引いた上、研究所のガスや薬剤の燃えた後遺ですと立ち入り禁止だったんだよ。今でもまだ、相当の臭いは残ってるから、そのつもりで。」

わけが分からず、無言のままの武士に、由樹は言った。

「遠野のお父さんがやっていた研究所が火事になったんだ。」

「・・・えっ。」

「でも、死体の身元確認ができなくて、遠野自身がどうなったかはわからないから、石井さんに聞いたんだよ。」

武士は、突然の話に、一瞬言葉を失った。石井が由樹の言葉をつないだ。

「身元確認できる人が見つからないって、警察も言ってた。まあ、死体は男女の判別もつかないくらいだし、遺留品なんてものも無いに等しいからね。ただ、現場くらいは見ておかないと、気持ちの整理が……つかないんじゃないかと思ってるね。」

武士は唇を震わせた。

「……死んだ可能性が高いつてことなのか。」

「……信じては、ないけどな。」

「それで、一人で苦しんでたんだな。ずっと。」

「言葉にしたら、認めたことになりそう。……でも、橋にはやっぱり知っておいてほしかったんだ。」

石井は二人の会話の切れ目に、遠慮がちに聞いてきた。

「遠野つてクラスメイト、女の子？」

「……そうです。」

「やっぱり。そんな気がした。」

「遠野博士に娘がいたというのは、よく知られていたんですか。」

「いや、娘がいたというのも、噂の域を出ないくらいだった。ただ、保科君の電話口での様子で……同性ではないな、と。」

何も言えない由樹のかわりに、武士がこたえた。

「すごく複雑な境遇にあったみたいでしたが……、いいやつでした。」

「だろうね。こんなに心配するクラスメイトがいるくらいなんだから。」

由樹は、ずっと無言のまま、窓外の荒野を眺めていた。

武士も、何も言う言葉が見つからない。突然の告白に、まだ実感がわかない。だからといって、慰めの言葉など見つかりはしない。

高速をおりてからは、標識もない複雑で同じような道を進み、ときには曲がりくねった急カーブの坂を上り、存在すら忘れられたような道をいくつも過ぎていく。

「道とはいえないようなところもあるから、しっかりつかまっておいで。」
砂利道、というより岩道のようなところを、車体を上下に揺らしながら進んでいく。

やがて、草が車に踏み潰されてきただけのような道を通り、聳え立つ杉の木の林の前でエンジンが止まった。

「ここからは歩き。一応、荷物は持っておいで。」
乗り物には二人とも強いつもりだったが、流石に体力を消耗していた。だが、すぐにかばんを肩に背負い、石井の背を追った。

「少し前までは警察が一杯で賑やかだったんだけど、こうなると少し心細いね。」

由樹たちは石井にすべてを委ねるしかない。そんな思いに応えるように、石井の足は迷いなくある方向へむかって真っ直ぐ進んでいる。こんなところで誰か一人殺されても、日の目を見ず終わりそうだ。話にきく「樹海」というやつだろうか。

やがて、鼻を突く臭いが襲ってきた。その正体は、すぐに目につきだした。焼けた大木、葉、土、それが空の面積に比例して増えていく。

「研究所の人たちがこんな道をいつも歩いていたとは思えないから、きつと裏道があるんだろうけど、一般人には不明のままだ。」

どれくらい歩いただろうか。

額がうつすらと汗ばんできた頃、遠くに焼け爛れた無機物が影のように見えてきた。

夕焼け空の下、広大な敷地が焼け野原になっていた。かろうじて焼け残った鉄骨の骨組みだけでは、建物の面影すら感じられない。ただの火事ではなく、爆発が何度も起こったのだろう。そうになると、死体は十どころではないのかもしれない。爆破で吹き飛ばされても、ここに元々何人いたかがわからないのだから、十の身元が確認できたとして、その中に二葉がいなかったとしても、安心などできないということだ。

まだ何かが漂っているような、不気味な静けさの中、誰もが言葉をなくしていた。こんな人里離れた場所に存在した研究所。人体実験を繰返していたとしても誰にも気づかれぬのである。ここでなら何が起こつていようと不思議ではない。

「遠野研究所の実態は、ご存知なんですか。」

由樹の質問に石井はちよつとためらい、だが答えた。

「悪い噂は聞いているけど、実際はわからない。表舞台へはほとんど出ない人だからね。」

「例えば、人体実験のために人身売買をしているとかは、ありませんか。」

「ネットではそんなことも書いてあるけど、臓器売買の方が信憑性は高いよ。」

由樹は、意を決して聞いてみた。

「もし、研究所の違法の実態と、博士の研究成果が世にでたら、どうなりますか?」

「それは、すごいことだね。違法の実態は、まあ、本人が死んでいたとすれば一時の話題で終わるかもしれないけど、研究成果の方が莫大な価値があると思うよ。遠野基博士の父親も高名な学者だったから、それを継いでいる実験も多かっただろうし。ただ、その成果が世の中にどういふ影響をもたらすかは、未知数だな。」

「影響、ですか。」

「それを利用することで、例えば、遺伝子を自在に改良してヒトクローンを簡単に作り出せるようになるとか、倫理的に正しく用いられなかった場合、この世の秩序を乱すことになりかねないんだよ。歴史上、そんなことは幾例もあるからね。」

二葉は、由樹にどうして欲しかったのだろう。

十年後になれば、『正しい判断』ができる大人に、本当になれるのだろうか。

一人、焼け跡に何か残っていないか、目を皿のようにして探し歩いたが、何も無い。何かの手がかりになりそうなものは、残っていない。

そもそも無い。

「めばしい物は全部警察が持っていったけど、ろくなものはなかったよ。」

「何か、特徴のある死体はありませんでしたか。」

「特徴？」

「・・・彼女、両方の耳たぶが、無いはずなんです。」

「・・・！」

石井は目を見開き、息を呑んだ。が、すぐに首をふった。

「残念ながら、それを確認できないほどだったようだから。」

「そう・・・、ですか。」

「さあ、そろそろ帰ろう。これ以上日が暮れると、迷ってしまう。」

ここへ来たいと思ったのは事実だ。だが、実際目の当たりにし、結局何もできないまま帰らねばならない気持ち、後ろ髪を引く。

しかし、この荒廃した焼け跡には何の希望も絶望も見出せそうにない。だが、何も無いこと自体が希望になりうることもある。

ずっと黙っていた武士が、後ろから由樹の肩を抱いた。

「死体がない以上、遠野は『行方不明』なんだから、『死亡』にはならないんだぜ。」

「・・・ああ、そうだな。」

「でも、それを一生引きずって、遠野を『永遠の恋人』なんかにはするなよ。」

武士の声は真剣だったが、由樹は小さく笑った。

「大丈夫だよ。」

その答えの真意は、武士には伝わらない。由樹にとって二葉は、「恋人」なんて言葉では語れない。

（俺に許された未来は、俺のものだけではない。自分のために犠牲になったものに報いるための未来でなければならぬ。）

唇を引き締めた由樹の横顔が、軽く空を仰いだ。

夕焼けが、オレンジではなく火が燃えるような色をしている。今にも燃え尽きてしまいそうなほど、激しい、赤。

「すごい、紅蓮だな。」

石井が感嘆の声をもらし、立ち止まった。

由樹は、改めて日の沈む方向を見、まぶしさに目を細めた。
見覚えのある色。

(そうだ、あのピアスの色……)

ゆるる髪の毛の奥から一瞬除いた、赤。あれが「紅蓮」という色なのか。

二葉を縛りつけ、苦しめていた盗聴器と発信機つきのピアス。それを解き放ったとき、二葉はどんな気持ちだったのだろう。

「急ごう。車まであと少しだ。」

石井の声で、二人は再び足をはやめた。

由樹は、一瞬目を閉じ、今の夕焼けの色をしっかりとまぶたの裏に焼き付けた。この色を忘れない限り、二葉のことを忘れない。この色を見るたび、二葉を思い出す。

忘れられはしないが、忘れてはならない。

自分を、命がけで助けてくれたクラスメイトのことを。

(生きていって、信じている。俺が信じ続ける限り、遠野は死なない。)

帰りの車の中、武士は疲れきって後部シートに横たわって眠ってしまった。

助手席に移った由樹は、石井と色々な話をした。こんなに他人の大人と打ち解けて話をするなんて、初めてかもしれない。

「保科君は、将来どうしたいんだい？」

由樹は答えた。

「僕は、ジャーナリストになります。」

それは、二葉から託された未来への答えでもあった。

「……なぜ？」

「伝えるべきことを、正しく伝えられる存在になりたいからです。物事の真贋を見極められる力を、どうしても身につけたいんです。」

「それだけかい？」

石井は探るような目でフロントミラー越しに由樹をちらつと見た。

「・・・付属する理由は、僕が石井さんのいる新聞社に入社できたら、お話します。それまで、待つていてくださいますか？」

「もちろん。君のような後輩を持てるなんて幸せだよ。待つてる。」

夜の高速道路を照らす水銀灯が導く道の向こうに、未来がある。

窓を開けて頬に当たる風は、まだ冷たい。だが、由樹はしっかりと目を見開き、進む先を凝視した。

いつか、必ず真相をつきとめてみせる。

そして、実験という名の下に人が犠牲になるようなことを、二度と繰返させはしない。それを、ペンの力で、実現してみせる。

二葉の遺志を実現することこそが自分に与えられた使命だと、由樹は確信していた。

やがて眼下に広がった街の無数の小さな家明かりは、由樹たちを優しく迎え入れるように、温かく瞬いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0610b/>

紅蓮の影（あかのかけ）

2010年10月8日14時45分発行